181-201

LECTURES ON ENGLISH GRAMMAR.

英和比較英文法十講

故イーストレーキ
增田藤之助 合著

東京 有朋堂發行

序

凡そ國語は比較によりて最もよく知らるゝものなり。比較によらずしては殆んど完全に知る能はずと謂はんも不可なかるべし。所謂る「己れが國語のみを知るものは一の國語をも知らず」とは此の謂なり。されば最も適切に英和を比較したる、卽ち吾等の現在使用する國語を比較の基礎として啓發することを勉むる善良なる英文典を物せば、日本の英語學生にとりて利益極めて多からんに、斯かる英文法書未だ世に出でざるは余が夙に遺憾とする所。本篇は往年不十分ながら時々に此の素論の一端を實現せし試みを玆に纏めて一書としたるものなり。

第一講より第三講までは亡友イーストレーキ氏が嘗て余の依囑に應じて立案起草し、余これを補修したるものなり。就中 Direct and Indirect Narration の如きは故人が最も力を注ぎたる所にして精覈無比、其の生前余に向つて特に此だけを單行本として世に出だしたしとの希望を漏らせしことさへあるもの（今日までの文法書中此點につきて比較的最も委はしきはネスフィールドの文典なるも、其れさへ其詳悉なること此講の十分の一に及ばず）、此の一講のみを以てするも余は本書の「存在の理由」raison d'etre あるを疑はざるなり。

第四講より以下は全く余の講述に係る。此等の點に就きても、他の未だ說かざる所を說き、或は他の語つて審かならざる所を闡明したるつもりなり。我學生一般に兎角 par-

ticiple や infinitive を輕視するの弊あるが如し、余は此等に重きを措くの必要なるを認むるもの也。

抑も吾人他國人にして英語に精通せんと欲せば恃むところ文典の外あらず、而して其の文典は精緻周到なればなるほど愈よ宜しとす。簡易なる教科書によりて英文法の大體を心得たる上は、進んで最も懇切詳密なる大文典に就きて確實透徹なる知識を獲ざるべからず。恰かも一寸手輕き用のためには袖珍小字書も便ならんと雖も、精確に知り明瞭に知らんにはウエブスター、センチュリー、スタンダードなどの大字書を用ひざる可からざるが如し。字書に諸るならば(なまじい小字書中字書の類よりも)寧ろ大字書に由るに若かざると同じく、文法を究むるならば寧ろ及ぶ可きだけ精しき文典に據るに若かず。今や英文法書の世に出づる whose name is legion と云ふべきほどなりと雖も、概ね是れ大同小異の教科書的文典に過ぎざるを見る。本書は此等と全く類を異にし、特に英文法中の重要なる部分を撰んで特別に精密に説明し、讀者に thorough knowledge を供せんことを期したれば、今更に屋上屋を架するの愚を學びたるものにあらざるを信ず。

明治四十三年九月

増田藤之助誌

目次

第一講 (イーストレーキ講述)

時制 (The Tenses)

		PAGE
總説		1.
第一	The Present Tense	4.
第二	The Past Tense	8.
第三	The Present Perfect Tense	14.
第四	The Past Perfect Tense	23.
第五	The Future Tense	32.
第六	The Future Perfect Tense	37.
約説并補遺		
	現在	41.
	過去	45.
	現在完了	47.
	過去完了	49.
	未來	49.
	未來完了	51.
	時制の一致	51.

第二講 (同上)

可能法 (The Potential Mood)

總説 ... 54.

I. May と Might ... ... 56.
II. Can と Could ... ... 62.
III. Should ... ... 69.
IV. Would ... ... 78.
V. Must ... ... 86.
約說 ... ... 98.

第三講（同上）

直接叙法及間接叙法 (Direct and Indirect Narration)

緒言 ... ... 100.
定義 ... ... 101.
應用 ... ... 107.
法則
(A) 通則 ... ... 111.
(B) 疑問文に關する規則 ... ... 123.
(C) 命令文に關する規則 ... ... 127.
備考 ... ... 130.

第四講（增田藤之助講述）

不定法 (Infinitive Mood)—總論

I. Infinitive と Gerund ... ... 135.
II. 不定法の時制 ... ... 137.

III. 不定法と否定詞との位置の關係 ... ... 142.
IV. 不定法と副詞との位置の關係 ... ... 148.
V. 不定法の To なる語 ... ... 148.

第五講（同上）

不定法 (Infinitive Mood)—通常の不定法 (Gerund に非らざるもの)

緒言 ... ... 149.
第一 名詞として ... ... 150.
第二 形容詞と結付く ... ... 152.
第三 物主格と結付く ... ... 154.
第四 前置詞を持つ ... ... 156.
第五 先驅の It ... ... 156.
第六 他動詞の目的格として ... ... 160.
第七 補足目的格として ... ... 163.
第八 補足主格として ... ... 167.
第九 for との關係 ... ... 171.
第十 咏嘆に用ゐらるゝもの ... ... 175.
第十一 If ...に當るもの ... ... 176.
第十二 has に隨ふもの ... ... 177.
第十三 is に隨ふもの ... ... 178.
第十四 about に隨ふもの ... ... 182.
第十五 獨立的用法 ... ... 182.
第十六 動詞の省略 ... ... 182.

第十七 to の省略 (Bid, Dare, Feel, Hear, Let Make, Need, See, Have, Help 等の後に) ... ... 183.

第六講 (同 上)

不定法 (Infini ive Mool)—Gerund (副詞的形容詞的不定法)

緒言 ... ... 192.
I. 副詞的
其一 目的或は意志を表はすもの ... ... 193.
其二 原因或は理由を表はすもの ... ... 203.
其三 「に於て」「に關して」等の意を表はすもの ... ... 206.
其四 「程に」の意を表はすもの ... ... 213.
其五 結果或は歸趣を表はすもの ... ... 214.
II. 形容詞的
其一 「すべき」「する」等の意を表はすもの 218.
其二 「せんとする」の意を表はすもの ... 221.
其三 「せし」の意を表はすもの ... ... 221.

第七講 (同 上)

分詞 (Participles)—現在分詞

總說 ... ... 222.

其一 現在形必しも現在ならず ... ... 224.
其二 when, while の意を表はすもの ... 225.
其三 after の意を表はすもの ... ... 226.
其四 because, since の意を表はすもの ... 227.
其五 if 或は though の意を表はすもの ... 228.
其六 關係代名詞 that の意を表はすもの ... 228.
其七 接續詞 that の意を表はすもの ... ... 229.
其八 「しつゝ」の意を表はすもの ... ... 230.
其九 「而して……せり」の意を表はすもの ... 231.
其十 其所屬の名詞との接近 ... ... 234.
其十一 獨立的用法 ... ... 235.
其十二 其主格の省略 ... ... 236.
其十三 其主格の脱落 ... ... 237.
其十四 being の省略 ... ... 239.
其十五 後に來る夾句との關係 ... ... 240.
其十六 受動的のもの ... ... 242.
其十七 形容詞としてのもの ... ... 242.
其十八 不定詞と現在分詞 ... ... 246.
其十九 動名詞と現在分詞 ... ... 251.

第八講 (同 上)

分詞 (Participles)—過去分詞

其一 過去形必しも過去ならず ... ... 255.
其二 because, since の意を表はすもの ... 257.
其三 if の意を表はすもの ... ... 260.

其 四 though の意を表はすもの … … … 260.
其 五 when 或は after の意を表はすもの… 261.
其 六 關係代名詞 that の意を表はすもの 262.
其 七 接續詞 that の意を表はすもの … … 263.
其 八 形容詞としてのもの … … … 263.
其 九 目的格を以ての have 又は get に隨ふもの … … … … … … 266.
其 十 獨立的用法 … … … … … 270.
其十一 其名詞代名詞等の省略… … … … 271.
其十二 主格の脱落 … … … … … … 274.

第 九 講 (同 上)

名 詞 (Nouns)—分 類

總 說 … … … … … … … … … 276.
第一 普 通 名 詞 … … … … … … 277.
第二 固 有 名 詞 … … … … … … 278.
第三 物 質 名 詞 … … … … … … 282.
其四 抽 象 名 詞 … … … … … … 287.
其五 集合名詞 (collective noun) 並に多數名詞 (noun of multitude) … … … 299.
名 詞 の 用 … … … … … … … 308.
名 詞 の 代 用 … … … … … … … 309.

第 十 講 (同 上)

名 詞——性 (gender) 及 數 (number)

I. 性 (男性、女性、中性、共通性)… … … 312.
II. 數
單數と複數 … … … … … … … 329.
複數の構成 … … … … … … … 333.
單複數の用法… … … … … … … 350.

英文法十講

英和比較

第一講

時制 (The Tenses.)

總說

時制を熟知することは何程かにても英語に通ずるがために須要なり。時制に通ぜずんば善くどころでなく少しも英語を用ゆることを得ざるなり。而して實に時制は學ぶ者に多くの困難を與ふと雖ども、概するに左まで會得し難きものにあらず。何んとなれば世界各國殆んど如何なる國語にも之れと同樣の話法ありて、日本語も固より此の數に漏れざればなり。蓋し世界いづれの處といへども現在、過去、未來の觀念あらざるはなし。唯だ異なるところは或る場合に於て、甲の人民は乙の人民が過去と呼ぶ所ろのものを現在と見做し、若しくは乙の人民が現在と呼ぶ所ろのものをば丙の人民は未來と云ふの差あるのみ。例へば Hebrew 語に於ては唯だ二個の時制あり大抵の言語學者は之れを稱して Present (現在) と Imperfect (半過去) と云ひ居るなれども此れ其の實、未來と過去とに外ならず。蓋しヒブリユー人は嘗つて推論して謂へらく、現在なるものはあること無し、事は皆な未來か過去なりと（而して是れ必らずしも

理なきの說にあらず)、是を以て其の國語の時制には事實上未來と過去とより他あらざるなり。

附言して曰く。現在なるもの無しとは往々人の唱ふるところなり。或る佛敎者嘗つて現在を打ち消さんとて云へるには

現在は指して以て確かに此處にあり彼處にありといふことを得ず、一秒を明指する大時計の前に立ち一秒の指針が現に止まれる折り「只今」と云はんとすれども、四半分も口より出でざる內に旣に次ぎの一秒に移つりゆくなり、加之ならず一層短かく「今」と云はんとするすらも能はず云々

是れ或る人が之れを稱して「現在は竹や杖の如く掴まれるものにあらず、時間は決して止まれるものに非らず、若し止まらば旣に活きたる時にあらず、時は万物の初發より天地の間に常に流がるゝ大河の如し、然るに之れを無しと云ふは、大河の水が盛んに流れて動き居るとて之れを無しといふ誤まりに異らず」と言へるが如く、未だ哲學に所謂ゆる空間(スペース)と時間(タイム)との關係を知らず、又た靜狀(スタチスチックス)と動勢(ダイナミツクス)との理を知らざるものありと雖ども、論理上一應理無きの言にあらず。今まヒブリユー人の推論によりて思ひ出づるまゝ序でに聊か蛇足を添へつ。

扨て又たヒブリユー語には Voices (調)十種の多きあり、阿拉比亞語には同く十四種あり、希臘語には同く三種あり、然るに幸ひにも英語には唯だ他動調と自動調と二個あるのみ、而かも此の二個にても以て大ひに日本學生の多數を困らすに足る。

英語に於ける時制の使用法を說明するには數多の例を用

ふるより善きはなし。規則は忘れ易く、日用通常の語句より引き來たる實例は自から能く記憶に印象す。抑そも日本語殊とに其俗語に於ける時制の使用は英文典上の使用法と甚はだ相異なるが故に、余は玆に余が多年我が學生を敎授したる經驗に基づき、實際上に其使用法を明らかならしめんことを勉めんとす。概して論ずれば、人間の心は人間の言葉と同じく、唯だ時の三種の區別を知るのみ、曰く現在、曰く過去、曰く未來是れなり。是れ又た英文典に於ても然り、然れども英文典に於ては三個とも各々第一の主たる時制に伴なふに第二の從たる形あり。左の表を一瞥して之れを知るべし

Fundamental (主)	Secondary (從)
Present (現在).....	Present Perfect (現在完了)
Past (過去).....	Past Perfect (過去完了)
Future (未來).....	Future Perfect (未來完了)

此れにつき、大體に就きて言へば、實際の現在なる行爲を表はす時制は一あり曰く「現在(プレゼント)」なり。實際の過去なる行爲を表はす時制は三あり曰く「過去(パスト)」、曰く「現在完了(プレゼント、パーフエクト)」、曰く「過去完了(パスト、パーフエクト)」これなり。而して實際の未來なる行爲を表はす時制は二あり曰く「未來(フユーチユーアー)」、曰く「未來完了(フユーチユーアー、パーフエクト)」これなり。然れども時としては、一の時制が他の時制に代はりて其の位他を奪ふことあり、乃ち「現在」は事情によりて未來を表はし、過去をも表はす。「現在完了」は又た往々殆んど過去たり。此の類尙ほ他にあり。頓がて後に至りて明らかなるべし。

第一 The Present Tense. (現在)

時制の使用法を解說するに先きだち、吾人は一言以て讀者の注意を惹かざるを得ざるものあり、他なし「如何に言語を並らべ立てゝ規則を陳說するとも此等の規則には必らず例外あり」といふこと是れなり。實に其の例外の存することは、英語に a rule *is proved by its exceptions* (規則は其の取除けによりて證明せらる) といふ諺あるほどなりとす。而して是れ獨り歐洲の國語のみにあらず、日本語にも斯くの如くの類例多々あり。例へば「行く」なる動詞に就きて見よ。其れの過去(パスト)は「行きし」なり、其れの現在完了(プレゼント、パーフエクト)は「行きたり」或ひは俗語にては「行つた」なり。扨て「行つた」なる語形は過去の行爲を表はすものたること爭ふべからず、然るに俗語にては之れを未來の意味にて用ふるにあらずや。卽ち「行つた方がよかろう」は全く未だ起らざる事柄に關する句なり。此の奇なる句法は英語にて It would be better *were* you to go といふに甚だ近し、玆に were なる語は實に過去の語形なるも、此の場合にては未來の意味を有する Subjunctive verb (接續法の動詞) として用ひらるゝなり。

英語の時制は之れを日本語 (俗語にても雅語にても) に翻すこと能はず。通常便利のために之れを翻譯せば、まづ左の如くなるべし

PRESENT. I praise.....私はほめる
PAST. I praised .....同 ほめし (き)
FUTURE. I shall praise....同 ほめるであらう

PRESENT PERFECT. } I have praised...同 ほめた (たり)
PAST PERFECT. } I had praised....同 ほめたりし (き)
FUTURE PERFECT. {I shall have praised.}....同 ほめたであらう

然りと雖ども事實に於ては、此等の形式にて適當に翻譯せらるゝものは六種の時制の中唯だ二つあるのみ、卽ち「現在」と「未來」と是れなり。過去の三時制は之れを翻譯するに甚だ不完具にして滿足なるを得ず、而して「未來完了(フューチューアー、パーフエクト)」に至りては日本語にて到底之れに當るものなし。成るほど文字通りにては、「私はほめたであろう」は I shall have praised の反譯なりと云ふことを得べし、然れども事實、實地に於ては、此の反譯は全く誤まりにして論理に合はざるなり。日本學生の時制を講究するものは宜しく此等の點を記憶せざるべからず。彼等は思想の新原野に入らんとするものにして、此の新原野にては彼等が本國の語は最早や大ひなる助けとならざるなり。凡そ言語は思想の符號なれば、苟しくも西洋の國語を明解せんとする日本人は全く其思想の仕方を西洋的に改造せざるべからず。

「現在」及び「過去」は各々三種の形體を具ふ。吾人は便利の爲めに、他の文法家の說く處ろに拘はらず、此等の三形體をば Simple (單純的)、Progressive (前進的)、Emphatic (强勢的) と呼ぶべし。

「現在」に就いては此等の樣式左の如くなるべし

SIMPLE: {I praise (non-momentary)}....其當時瞬間に非らず
PROGRESSIVE: {I am praising (momentary)}....其當時瞬間を表はす

EMPHATIC: I do praise.

此の場合にても亦之れを確的に日本語に反譯することは成し得べからざるなり。去れど次ぎの如く云へば幾分か此の三形體を表はすに足るべし

- SIMPLE: 私はほめる
  PROGRESSIVE: 私はほめて居る
  EMPHATIC: 私はまつたくほめる

吾人は此の三形體を各々別に說述すべし。玆には唯だ「強勢的形體は現在と過去にのみ限り、單純的形體と前進的形體とは六種の時制孰れにも有り」と言つて足れりとす。

既に說けるが如く、現在と過去とには各々 Simple (單純的) Progressive (前進的) Emphatic (强勢的) の三樣あり、其の他の四時制には唯だ單純的と前進的の二樣あるのみ。例せば to go なる動詞に就きて

I go は 單純的現在
I am going は 前進的現在
I do go は 强勢的現在

にして此の三樣は各々少しく其意味を異とにす。然れども强勢的は現在及び過去の單純的の代はりに、疑問又は否定に用ふ、例せば I do not go は I go なる單純的の否定なり、do I go? は I go なる單純的の疑問なり。

扨て現在は Present continuation (現在の引續き) を顯はす。卽ち I see, I write, I sing の如く之れを語るとき現に起りつゝある所の或る事物を顯はす。

現在は又習慣或ひは常例を顯はす。I meet him frequently なる句に於ては、余が常に屢々彼れに出會ふ事實を言顯はす。此の點に於ては正しく日本語に似たり。例へ

ば「余は彼の人によく出會ふ」の如し。玆に「出會ふ」は現在にして屢々會合することの思想を傳ふるなり。

前進的現在は(一)現實の行爲か又は(二)未來の意思を顯はす。卽ち I am going は「余は行いて居る」(I am actually now engaged in going) といふ事を意味すべし、或ひは「余は行く、行くと思ふ、行く積り」を意味すべし。

例せば

I am eating breakfast. (只今朝餐を食て居る)

I am eating supper with him this evening. (今晩彼の人と夕飯を食ふ)

此の第二の意味に於て前進的現在は屢々疑問に用ひらる。例へば

Where are yon going this evening? (あなたは今晩どちらへ御出でゝす)

When are you going to America? (いつ米國へ御出でなさる積りです)

I am going to write a letter, so don't disturb me. (今ま手紙を書かふと思ふから邪魔するな)

「行く處です」「書く處です」等も亦た I am going, I am writing (或ひは I am about to go, I am about to write) なる前進的現在と同じ。

單純的現在は時として、其物語りの活々として眞に迫るときに過去の行爲を顯はすがために用ひらる。之れを稱して歷史的現在 (Historical present) といふ。是れ作者が或る事柄を讀者の心の前に躍如として活動せしめんと欲するときに往々慣用せらるゝの手段なり。其の一例を擧ぐれば スキントン万國史 (七十八頁) にトロイの戰爭を記して

Achil'les, the bravest and most redoubtable of the Greeks, offended by Agamemnon, *abstains* from the war, and in his absence the Greeks *are* no match for Hector. The Trojans *drive* them back into their camp, and *are* already *setting* fire to their ships when Achilles *gives* his armor to his friend Patroclus, and *allows* him to charge at the head of the Myrmidons. Patroclus *repulses* the Trojans from the ships, but the god Apollo *is* against him, and he *falls* under the spear of Hector. This *causes* Achilles to return ino the Grecian camp, and he *slays* Hector in single combat; but *is* himself *killed* by an arrow directed by Apollo. Finally the noblest combatants on both sides having fallen, the city *is taken* by the Greeks, through the stratagem of a wooden horse, devised by the crafty Ulys'ses. Troy *is delivered* over to the sword, and its glory *sinks* in ashes.

第二 Past or Imperfect Tense. (過去)

總べての時制の中、日本學生の最も多く誤用するものは過去(パスト)なり。實際上近世日本の俗語には唯だ一種の過去あるのみ、去ればこそ大抵の學生は英語の三種の過去の精微なる區別を領得するに苦しむなり。日本古代の雅語には此等を表はす精密なる區別の在るあり、然れども今日多數の學

生は Past, Present Perfect, Past Perfect に對する直譯の意味を誤解せるが如し。

蓋し

I came	を	私は來りし
I have come	を	私は來た
I had come	を	私は來りたりし

と譯するの不充分なるや明らけし。此の三種の直譯は遂に大抵の學生に毫も差違の思想を傳ふるに足らざるなり。故に教師は此の三個の時制の大ひなる差別を敎示するに當りて深く注意せざるべからず。概するに、學生たるもの過去(パスト)の行爲若くは事件を表はすに於ては大抵いつも過去を用ひて可なりと謂ふべし、十中八九までは爾かして差閊へなかるべし。蓋し能く能く吟味すれば英語にて遠き過去 (long past) と近き過去 (recent past) との間に區別を爲すは甚はだ論理に叶へりといふを得ざるなり、例せば何故に

he *has* just *come* (Present Perfect)

と云ひながら

he *came* just now (Past Tense)

と云はざるべからざる乎、實は此の二種の記述の間竟に認識すべき差違あらざるなり、然るに其の前の章句は現在(プレゼント)完了(パーフエクト)を要し、後の章句は過去(パスト)を要す過去に關して二大則を擧ぐれば

一、過去(パスト)は過去に於ける引續き (continuation) を表はす

二、過去(パスト)は行爲若くは事件の「時」が決定せるときに常に用ひられざるべからず、「時」の副詞が其章句中にあらば殊とに然りとす

此二個の大則は殆んど過去の全體を盡くし得たり、學生

もし能く充分に其の眞乎の意味を了解せば英語の知識に向つて一大長足を進めたるものと謂ふべし、第二則には若干の取除けあり其は後にて明らかなるべし

先づ第一則について云はんに、例へば I *was* sick for three months なる章句に於ては was なる過去必要なり、何となれば是れ duration or continuation of having been sick（引續き病みたること）を表はせばなり。

之れと均しく how long *were* you there（どれほど長く其處に居たか）なる章句に於て問者は其人が其處に居たる間 (duration or length of time) を知らんと欲するなり、故に were なる過去を要するなり

此規則と關繫して、過去（パスト）が屢々疑問に用ひらるゝことを注意せよ、而して斯かる場合に其疑問は日本語の「たことがあるか」にて譯し得べし。例せば *Did* you *ever see* a volcano?（噴火山を見た事があるか）といふことを得るなり。去れど注意せよ斯かる疑問に答ふるに於ては過去を用ふべからずして、寧ろ現在完了を用ふるを要す、左の如し

Did you ever *go* to Asuka-yama? (Past)

Yes, I *have gone* there. (Present Perfect)

No, I *have* never *been* there. (Present Perfect)

然り而して現在完了（プレゼント、パーフエクト）は此の場合に於て問にも答にも用ひられ得るなり。

過去（パスト）は行爲若くは事件の「時」の規定せるとき常に用ひられざるべからず「時」の副詞（アドバアーブ、テブ、タイム）が其の章句中にあらば殊とに然りとす、といへる第二則は第一則よりも遙かに尙ほ重要なり。過去の行爲或ひは過去の事件を語るに就いて大抵いつも過去（パスト）によりて之れを表はす所以んのものは、實に此

の法則に出づるなり、蓋し總べて過去の事件或は行爲と共もに其の年月日附を與へ其の時期の如何を示す（「昨日」とか「今日」とかいふが如く確定的（デフイニツト）にせよ、又は「嘗つて」とか「屢ば」とかいふが如く不確定的（インデフイニツト）にせよ）人間の常なればなり。是れ then, when, as, at that time, whereupon などの如き「時」の副詞をば常に數多使用するに於て殊とに著るし、而して時を表出するには「時」の副詞を以て表はさるゝが如く副詞句 (Adverbial Phrase) を以ても表はされ得るなり。例へば

He *came*, and I *left*.（彼れ來りたれば吾れ去れり）

なる章句に於て、去るといふ行爲の「時」は he came なる二語によりて決定せるなり。故に之れを

When he came, I left.

或は I left as soon as he came.

と書きかゆるを得るなり。孰づれにしても「去る」といふ動詞は過去にせざるべからず、そは「吾れの去ること」の「時」は「彼れの來ること」によりて決定せられ且つ此の所爲は全く過去の行爲なればなり。然り而して he came は又た啻だに其の過去の行爲を示すが故のみならで併せて該の行爲の時が I left と同時なりしが故に、過去にてあるなり、「時」の副詞が明白ならざるか或は其の章句中に現はれざるときにても尙ほ且つ過去を用ふること數々之れあるなり。例へば、己れ去年起りたる諸出來事に就いて人と相ひ語り而して此等の出來事の時日己れにも己れの相語れる人にも善く知れて居ることあり、此の場合に於て其の語り及べる諸事情諸出來事に關する動詞は是非とも皆な過去にせざるべからず。是れ「時」の副詞を用ひざるも「時」は既に兩

人の談話中に含蓄すればなり。

之を要するに、過去の出來事を語るに於ては絶へず此の重要なる時制—過去(パスト)を用ひよ、是れ吾人が切に學生に推薦するところなり、如何なる時制を用ひて然るべきや疑はしきときには、不完了(イムパーフエクト)卽ち過去(パスト)を擇べ、庶幾はくは以て錯誤に陷ゐることを免かるゝを得ん。

且つ注意せよ、過去の强勢形(エムフアチツク、フチーム)(did……の如き)を用ふること屢々あり、而して斯く用ひられたる時には是れ日本語の「實に」「慥かに」或ひは「全く」(俗語にいふ)の意味を傳ふるなり。例へば

A. I don't suppose you went out yesterday:—

昨日おでかけになりませんでしたろう

B. Yes, I *did*.

いゝえ全く出ました

Or, A. Did you do as I told you (or, *had told you*)?

わたしの云ふ通りにしたかえ

B. Yes, Sir, I *did do* so.

左樣でございます、慥かに左樣致しました

Or, A. Then you did'nt go to Shitaya after all?

それぢや一下谷へ行かずに仕舞ひましたか

B. Oh, yes, I *did*.

いゝえ全く行きました

或る他の過去の事件若くは行爲の前に起りたる一事件一行爲に就いて語るに當り過去(パスト)と過去完了(パストパーフエクト)との間に精微なる區別あることを特に注意せよ。此の場合に於て過去完了を用ひてあるべき筈の處に過去を用ひても差支へなきこと屢々これありて、文典の法則甚はだ嚴正ならざるなり。

例へば

I ate my breakfast before you came.

なる章句に於て、before you came なる句は「余が朝餐を食する」行爲の「時」を決定するところの副詞句と見ざるべからず。いつ余は食せしか、汝の來りし前なり。然るに又た

Before you came I had eaten my breakfast.

と云ひても差支へなきなり。而して此の章句に於ては「余が朝餐を食する行爲は汝の來る行爲よりも前きに起れり」といふ事實が主眼にして、前にある「いつ余は食せしか、汝の來りし前に」といふが如き「食する時」には左まで重きを置かざるなり。注意せよ、斯かる場合に就て過去を含有する句(Before you came の如き)は該章句の尾に置くよりも首に置くを可とす、而して斯かる章句は「てしまつた」なる强勢的(エムフアチツク)の過去によりて善く日本語に譯せらるべきなり。乃ち彼の章句は左の如く反譯し得べし

おまへが來た前に私はもう喰べてしまつた

後に至て尙ほ說示すべきが、英語の過去完了は「もー……てしまつた」なる語にて最もよく日本語に反譯せらる、蓋し過去完了はいつも必らず「もはや」若しくは「もー」若しくは「既に」若しくは「此れより先き」などの日本語にて表はし得る如き思想を含めるなり。

又過去と現在完了(プレゼントパーフエクト)との區別を辨へざるべからず、此れも後に至りて詳述すべしと雖ども、約して之を言へば其の大差は、現在完了は過去の所爲若くは事件其れ自身よりも過去の所爲事件の現在の結果に多く關し、過去は過去の所爲事件其れ自身及び所爲事件に伴なふ事情(何時になどい

ふ時、何處へなどいふ場所等）に關して而して其の現在の結果に至りては絶へて之れを示さゞるに在り。例へば

Mr. Baba *has gone* to Osaka. (Present Perfect)

といへば馬場氏は大阪へ向け赴く途中にあるか、或ひは今ま方さに大阪に居るか、孰づれにしても現在東京に居らざることを表はす。然るに

Mr. Baba *went* to Osaka last month. (Past)

とあれば、馬場氏は猶ほ大阪に在るや否や、未だ東京に歸り居らざるや否や、わからず、是れ唯だ馬場氏が去月大阪に赴けることを表はすのみにして其の他に毫も表はすところなし、其の行爲の結果絶へて不明不定なり。是れ過去（パスト）をば一名 Imperfect（不完了）と稱する所以んなり。

第　三　The Present Perfect Tense.
（現在完了）

現在完了（プレゼント、パーフエクト）に關しては日本の學生は殊に多く誤まり易し。然るに多くの學生をして誤まらしむるものは此の時制の名にあるが如し。現在完了の使用は實に其名の後半 (Perfect) に於てよりも寧ろ前半 (Present) に表はされたる思想に密近するなり、即ち此の時制の職分は過去に於て完了したるものよりも寧ろ現在に於て完了したる事物を表はすに在り。換言すれば、現在完了は或る行爲、事件の現在の結果如何といふことに重きを置くなり。

現在完了は唯單純的（シムプル）と前進的（プログレツシーヴ）との二形式あるのみ（此の

時制は元來強勢的の性質を負へるものなるが故に、強勢形（エムフアチック）は別に在らず）

I have eaten (*Simple*)

I have been eating (*Progressive*)

此の二形式の間の差違は大にして且つ顯著なるものなり。I have eaten は I have (just) finished eating（今ま丁度食つて仕舞つた）を意味することあるべく、或は「余は是まで一度或は數度食ふことを成したり」を意味することもあるべし。而して I have been eating は必らずしも「食ふ事が確定的に了れり」との事實を表はさず且つ又た「食ふ事が、つい少し前なりし」との思想を含む。かくて I have been sleeping は一般に「たつた今ま寢床から起きた」若しくは「たつた今ま目が醒めた」といふことを意味す。然れども I have slept は「余は是れまで一度若しくは數度眠ることを成したり」を意味し或ひは「余は眠るに必要なるだけ眠れり、故に眠る事は完了せり」を意味すべし。

此の數例以て現在完了の主もなる使用を示すべし。故に吾人は此の時制の種々の使用を概括して左の如く云はんとす。

一、現在完了は嘗つて完了したる行爲 (Perfected action on some or onemore occasions) を表はす

二、現在完了は行爲が當時恰かも完了したること (the present immediate perfection of an action) を表はす、此れよりして俄かに、丁度今ま、意外に、慥かに、完全に (suddenly, just, unexpectedly, positively, completely) 起りたる事物を表はす

三、現在完了は過ぎし時より當時まで續きたる、或ひは猶

ほ續きつゝある行爲 (an action that has continued from past time until the time of speaking or is still continuing) を表はす

扨第一則に於ては是れ日本語の「たことがある」に當るを知るべし。例へば

I *have ridden* horseback.

馬に乘つたことがある=I have, during my lifetime, once or oftener ridden on a horse.

現在完了にて表はされたるときには、自己の事に關して述ぶる章句は概ね此意味なり。されば學生たるもの「己れは斯く々々の處に生まれたり」といふ事を表はすに現在完了を用ひて自から I have been born…といふときは頗ぶる大ひなる不都合を生ずべし。生まれたことがある！斯かる句を論理的に推せば「余は幾たびか生まれたるが最後に至りて斯く々々の處に生まれたり」との斷案に歸すべきのみ、是れ豈に笑止千萬にあらずや。扨て此の「たことがある」の意味にて問ひを發する場合に於て、先方の人が個樣々々の場所に赴いたことがあるや否や (if he or she has [ever] been in such or such a place) と尋ねるときには ever なる副詞を用ゆるを良しとす。但し之れに答ふるに當りては決して此の詞を用ひず、返答は則ち幾たび個樣々々の場所に赴いたるかを表はさゞる可からず。其の例次ぎの如し。

A. *Have* you *ever been* in Nikkō?

B. Yes, I *was there once.*

特に注意せよ、B が過去(パスト)にて was と答ふるは once なる語が B の日光に赴むける時を特に決定するが故なり。蓋し I *was* there *last year* などの如く凡そ確定的 (definite) に過去の行爲を述ぶるには必らず過去を用ひざるべからず。而して現在完了は決して確定的の過去の時を表はす副詞と共に用ひられず、是れ亦た之を用ふるに於て留意せざる可からざる所ゝとす。already, yet, always, sometimes, often, seldom, 等の如き不確定的(インデフイニツト)の時の副詞は現在完了と共もに用ひらるれども、I *have been* there *last year.* などとは言ふを得ざるなり。又た

A. *Have* you *ever eaten* takuan?

B. Yes, I *have eaten* it.

に於て、B が現在完了を以て答ふるは、是れ彼れが某の格段なる時に澤庵を食つたと言はずして、唯だ嘗つて食つたことがある (I have eaten takuan, during my life-time, on one or more occasions) と言ふが故なり

次ぎに『現在完了は行爲が當時恰かも完了したることを表はし、此れよりして俄かに、丁度今ま、意外に、慥かに、完全に起りたる事物を表はす』といへる第二則は第一則よりも較や瞭解し難く正用し易からずとす。此の定則の何ものたるを會得せんには、短かき章句に於ける過去と現在完了との間の差違を能く能く注目せざるべからず。夫れ然り、

1. A telegram *came* (Past Tense)

2. A telegram *has come* (Present Perfect)

の間の眞の區別は何くにある乎。曰く一前者は過ぎつる某の (certain past) 時若しくは日に電報が來りたることの思想を表はす。實(ゆ)にや人もし英人或ひは米人に向つて單に 'A telegram *came.*' と云はゞ、十の場合中の九までは、斯く came なる過去を用ふるからには是れ必らず某の過ぎつ

るときを指すなるべしと認めて直ちに 'When?' と問ふべし。之れに反して、'A telegram *has* came.' と云へば直ちに、電報がたった今ま來りしこと、俄かに或ひは不意に來りしことを指す。乃はち此の第二則に於ては、現在完了は近き過去 (recent past) を表はす、然れども過去は遠き過去 (long past)— 或ひは兎も角も現在完了にて表はされたる過去よりも遙かなる過去を表はすと謂つて不可なかるべし。斯く說き到れば玆に知る、現在完了は大ひに眞の現在に類似し而して屢ば現在の職分を爲すことを。去ればこそ 'he has come' の代はりに 'he is come' の如き、'he has gone' の代はりに 'he is gone' の如き句は往々見るところにして、殊とに運動—往くこと來ることを表はす動詞の場合にありて然りとす。但し 'he is come' は其の實、眞の現在完了にして、凡べて往くこと來ることを表はす撒遜語的動詞は斯くして其の現在完了を形成するの事實あるにより、to be (*is* come) なる助動詞を此くの如くに使用するは差支へなきなり。而して前進的現在 (プログレッシーヴ、プレゼント) (is going, is coming) と、此の不合格なる現在完了 (is gone, is come) との間の區別を能く注意して辨へざる可らず。

或る過ぎにし時の行爲が現在完了したりといふの意は亦日本語にても言顯はさるゝなり。下僕使ひに出で歸り其の主人に「行つて參りました」='I *have gone* and (*have*) *returned*, Sir!' と云ふ、玆に「行つて」は過去の行爲を表はし、「參りました」は該の行爲の現在の完了を表はす。又た例へば、客旣に色々の品を食ふたる後ち尙ほ斯く々々のものを食へと求めらるゝ場合に答へて「も－澤山頂きました」='I *have had* quite enough already' と云ふ、現

在完了と結付けられたる此の「も－」='already' なる語は則ち、過去に始まりたる行爲の現在の完了を表はすなり。蓋し不確定的 (indefinite) の時の副詞は現在完了と共に用ひられ得るを以て、事の完了如何を表はすに之れを用ひて、I *have already dined.* The bell *has* not *rung yet.* などと云ふを得るなり。

又前にも述べたる如く現在完了は決して確定的(デフイニット)の過去の時を表はす副詞と共には用ひられざれども、特に to-day, this week, this month, this year 等の如き副詞及び副詞句を以て過去の行爲を表はすに I *have written* five letters *to-day.* などの如く現在完了を用ひ得、是れ「手紙を書きたる」は全く過ぎ去りたる行爲なれども其の過ぎ去りたる時は「今日」の內にして、卽ち今ま語りつゝある時までに完了したる事なるを以てなり。

以上第一則第二則によりて知るべし、理在完了は事の「完了」を表はすものなることを。是れ吳れ々々も深く記憶せざる可からざる事實なり。此事實あるに由りて Present Perfect Tense を一名、單に Perfect Tense と呼ぶなり。獨逸の詩人歌ふて曰く、

Ich habe gelebt und geliebet!

これ英語にては、'I *have lived* and (*have*) *loved*' = 'at a certain period in my life I enjoyed to the full the pleasure of living and loving.' に當る。卽ち「喜んだこともあるし、愛したこともある」と謂ふものにして、其事完了して且つ過ぎ逝きたる儀なり。然り而して此の現在完了は斯く事の「完了」を表はすが故に、折々之れを未來完了 (Future Perfect) の代りに、換言すれば、今猶ほ引續きつゝある行

爲にして然かも其れが完了せば尋いで他の行爲起るべき所ろのものを表はすに用ふるあり。

A. When are you coming? (いつ行きますか)

B. So soon as I *have eaten* breakfast (朝餐を食つたら)

玆にBは食ふことの「完了」について考へつゝあるなり。彼れは今ま朝餐を食しつゝあり而して其朝餐濟めば行かんとするなり (he will go)。故にBが行くことは其の食ふことの完了如何に惟れ依る。是れ往々用ひらるゝ現在完了の用法にして而して又た稍々不規則なる用方なり。何んとなれば是れ右に掲げたる例に於ての如く、完了に近づきつゝはあれども尙ほ未だ完了せざる行爲を表はすものなればなり。

最後に「現在完了は過ぎし時より當時まで續きたる、或は猶ほ續きつゝある行爲を表はす」といへる第三則に來りぬ。

A. How long *have* you *been* in Tokyo?

B. I *have been* here three years.

第三則は此の例にて明らかなるべし。AはBが曩きに東京に到着したることを知る、故に其の到着の時より今ま問ひつゝある時までBが如何程長く東京に住ひたるやを問ふなり。Bは則はち之れに答ふるに、到着以來今ま話しつゝある時まで三年間經過したることを以てす。去れば此の定則は單に左の如く云ふことを得べし。

現在完了は、過去に始まりたる行爲の現在の引續き (Present continuation of an action begun in post time.) を表はす

數例を擧げんに。醫師あり患者に向つて其如何ほど長く

病めるやを問ふ、患者答へて曰く、'*I have been* ill for two days.' これ則ち其の病氣が二日前より始まりて今まで續けるの謂なり。又た甲が乙に向つて

I have been waiting for you for the last two hours.

と云へば、乙が丁度今ま來り而して甲が其の來ることを待ちはじめたる時より乙が到着したる時まで二時間が丁度今ま經過したる (have just passed) の謂なり。

Have you been ill?

なる問に於ては乃ち二樣の意義あるを見るべし。其の一は、'Have you ever in your life-time suffered from sickness?' (病氣に罹つたことが有つたか) にて彼の第一則に屬す、其二は此の第三則に屬するものにて尋問を受くる人の現在の樣子に關し、'Have you been sick until the present time? Have you only just recovered? Is it owing to illness that I have not seen you for so long a time?' (今までわるかつたのか) の意を表はす。而して此の問に答へて、'I *have recovered* from my illness.' といふときは「わるかつたが今はよい」の意なり、何んとなれば病ひ快癒して引續き今に及べるものなればなり。

'Japan *has acquired* possession of the Riu Kiu islands.' と云ふことは得べし、然れども 'Tokugawa *has founded* powerful family.' と云ふことは得べからず、何んとなれば現今まで續く事にあらざれば現在完了を用ふべからざるに、德川は既に遠き以前に亡びたればなり。現に生きて居る人に就きては 'Mr.....*has* often *visited* this school.' と云ふを得、去れど既に死せる人に關しては爾か云ふを得ずして、'Mr.....often *visited* this school.' ならざるべか

らず。'This mode of expression *has been* formerly very much admired.' とは云ふを得ず 'was' を用ひざるべからず。己れ天罰に懲りて「吾れは大きに惡るかつた」と己れが既往の罪業を悔悟することを表はすに、現在完了を用ひて 'I *have been* a great sinner.' といふを得、何となれば己れが惡しき行爲の結果は今ま尙ほ依然として存すればなり、卽ち是れ 'I was a great sinner in my youth, and now bear the consequences' の意なり。

'I *have bought* the book' は購ふて其結果尙ほ引續き居る故に「其の書物は今ま吾が所有に屬す」といふの意に同じ。又た 'He *has written* a book' は 'He is an author' といふに同じ、是れ其人の書物を著はしたる所爲は書物となりて今に至るまで存するが故なり。此れと同じく其人の既に死せると今ま尙ほ生きて居るとに拘はらず其の著作に於ける言說を引用するに現在完了を用ふるを得、左の如し

Mr. Darwin himself *has declared* that the monky is man's ancestor.

注意せよ、日本語の「御苦勞さま」などの如き「……さま」てふ意句に於ては一般に現在完了を用ふ。其の例次ぎの如し。

御退屈さま＝I fear you *have found* it very dull.
御苦勞さま＝I *have given* you much trouble.
憚かりさま＝I *have been* very backward.
お邪魔さま＝I fear I *have interrupted* (disturbed) you.

第四 The Past Perfect Tense. (過去完了)

過去完了（パストパーフエクト）は一名 Past preterite とも呼ばれ或ひは Pluperfect とも呼ばれ、卽ち more than perfect を意味する羅甸語の plusquamperfectum なり。故に一言にして云へば、此の時制は完了よりも以上の行爲—或は寧ろ more past than the Perfect Tense の行爲を言表はすの大過去なり。されば其の主もなる職分は本來 Perfect Tense 卽ち現在完了（プレゼントパーフエクト）によつて表はされたる行爲に先んずるところの行爲を表はすに在りき。然るに近世英語にては過去完了は現在完了と直接結合すること稀れになり、却つて多く過去（パスト）と密接し過去と相ひ伴ふて屢々用ひらるゝに至れり。かくて先づ、過去完了は最も多く過去によつて表はされたる他の行爲の起らざる前に完了したる行爲を表はすと謂ひつべし。然るに此の最も重要なる點に於ても過去完了の使用法甚はだ嚴正ならずして過去が其の職分を侵かすこと屢々あり。例へば

1. I *had finished* eating before he came. なる章句は之れが位置を轉じて正さに左の如く云ふことを得べし。
2. Before he came I *finished* eating.

この第一例は他の過去の行爲の起らざる前に一の行爲の完了したることを表はすものにして、卽ち眞の過去完了なり。而して過去に於ける講述中にも述べたりし如く、此の例に於ては「余が食事を終へたる行爲は彼れの來る行爲よりも前きに起れり」（來ぬ前に食べて仕舞つた）といふ事實が主

眼にして、「來ぬ前に」といふ喰べ終りし時には左まで重きを置かざるなり。乃ち此第一例は左の如く反譯し得べし

あの人が來ぬ前に私はもう喰べてしまつた

而して第二例に至りては、來ぬ前にといふ喰べ終りし時に重みあり、換言すれば「いつ余は喰べ終りしかといふに其の時は彼れの來りし時の前なりき」との意なり。然りと雖ども第二例に於ても過去と同樣過去完了を用ひて Before he came I had finished eating といふを得、是れ過去完了の用法の甚はだ嚴格ならざる所以なり。

蓋し文法拘泥家には彼の第二例に異議を容るゝもの多かるべし、彼等は「彼れの來らぬ前に食事を終りしことを表はすに必らず過去完了を用ひざるべからず」と主張するならん。然れども此の場合に常規を外づれて過去を用ふることは習慣すでに之れを確定せり學生之れを用ひて敢へて差閊へなしとす。

手短に言へば、過去完了は already の如き副詞を含むと見做すべし—「もはや」「もう」「既に」「是れより先き」などの日本語にて表はし得る如き思想を含めりと知るべし。故に苟くも「一の行爲が他の行爲の起るに先きだちて既に完了したり」といふの思想を表はすときにはいつも過去完了を用ひて可なりとす。去れど此の思想と、或る行爲がたつた今ま完了したること（現在完了の第二則として既に開陳したる）を表はすの思想とを混亂せざるやうに注意せざるべからず。

「もーはや來た」といふは其意、過去に始まりたる行爲の現在の完了を表はすものなるが故に、必らず現在完了を用ひて

He *has* come already.

と云はざるべからず。之れに反して、他の過去の行爲を語るに於て「もはや來て居た」といふは其の意、件んの他の過去の行爲が起るに先きだちて來ることが完了したるを表はすものなれば、

He *had* come already.

と云つて過去完了を惟れ用ひざるべからず。

過去完了は「是れより先き云々したり」といふの思想を含めるより、主眼の行爲事件の先導となるところの行爲事件を叙するに用ひらるゝあり、

The storm *had* ceased, and the wind was still.

これ「暴風雨既に止んで（止みたりければ）風は今や靜かになりぬ」の意なり

A body of six thousand Mahrattas, half soldiers, half robbers, *had been* hired to assist Mahommed Ali; but.....they *had* hitherto remained inactive on the frontiers of the Carnatic. The fame of the defence of Arcot roused them from their torpor.

この前のセンテンスは「雇はれて居たりしも爲す處乃なくして居たりしが」の意にして、後のセンテンスは之れを承けて「然るに今や.....せり」との意なり

Nor *had* he only proposed to himself the end. He *had* also a just and distinct view of the means by which it was to be attained. He clearly saw that.....He saw also that.....He was perfectly aware that.....

此の初めの二センテンスは主要の趣意を言表はす處ろの後のセンテンスの先導となれるものなり

次ぎの例亦た之れに據りて推すべし

He *had been* bred to the law, and divided his time between proffessional business and the avocations of a small proprietor.

過去完了はまた過去によつて表はされたる或行爲の後ちに完了したる行爲を言ひ顯はすが如くに見ゆること少なからず。然れども是れ唯だ外見に過ぎざるのみ。左の例に視よ

We *met* a deer before we *had crossed* through the woods.

未だ森を横ぎつて仕舞はざるに一個の鹿に出會ひたり

此の例の如くんば「過去完了は、稀れに現在完了によつて表はされたる行爲に先んずる處の行爲を表はし、而して最も多く過去によつて表はされたる行爲に先んずる行爲を表はす」といへる前の法則は當てはまらざるが如し、何となれば鹿に出會ふ行爲を以て明らかに森を横ぎる行爲の完了に先んずると爲し、過去完了によつて表はされたる「横ぎつて仕舞つて居た」を以て、却つて過去によつて表はされたる「出逢へり」の後にありと爲せばなり。是れ一見輙ち爾か思はれ易し、然れども能く考へよ、孰づれの行爲が前きに始じまりしか、鹿に出會ふ行爲が前きか、否な、森を横ぎることは夙とに其れの前に始まりしなり。されば知るべし過去完了は此の場合に於ても不當にあらざることを。森を横ぎる事は、鹿と出會ふ事が起りしよりも前に始じまりて而して其の出會ふ事の起りしときに完了せんとしつゝ

ありしなり。成るほど該横ぎる行爲は當時未だ完了せざりき、而かも其の出會ふ所爲に先んぜることは疑ふべからざる事實なり。乃ち或る他の過去の所爲の前に必らずしも完了せざるとも其の前に起りて居たる行爲には、過去完了を用ひて差閊へなきことを注意するを要す。尙ほ次ぎの數例に徵せよ

A new nest *had* just *been finished*, when a pair of sparrows took possession of it.

新らしき巢が丁度出來あがつた其時一對の雀が其れを占領せり＝雀が其れを占領したるときは新巢が當時纔かに出來上つたところなりし

They *had not journeyed* far, when the river and the way for a time parted.

未だ遠く行かざるに河と路とが一時離れたり＝河と路とが離れたる當時には未だ遠くまで行きて居らざりしなり

The chime *had gone* three quarters more, when he remembered on a sudden, that.....

此等の諸例に於て、一寸見れば或ひは過去完了にて表はしたる行爲が過去にて表はしたる行爲の後ちに完了したる樣にもあれど、此等の場合の when は右譯文を以ても示したるが如く孰づれも and then の意なれば、其の實矢張り過去完了にて表はしたる行爲が過去にて表はしたる行爲に先んぜること明らけし。是れ爾く過去完了を用ひある所以なり。

吾人は以上諸時制を說明するに當りて獨り直說法 (Indicative Mood) のみに就きて述べたり、去れど凡そ時制の使用は勿論其の「法」に隨つて大ひなる差異あり。大抵の場合に於ては如何なる時制にても其の本動詞の意義を助け說明する助動詞を見て其の「法」を發見すること甚はだ容

易なり、然れども英語に慣れざる者にあつては、接屬法(Subjunctive) の過去完了は直說法の過去完了と誤解せられ易し、此の誤解は吾人が特に學生に戒しめざるべからざる所ろとす、然らざれば既に講述したるの言多く不當と見ゆるものあるべければなり。されど過去完了の場合に於ても接屬法を發見すること難きにあらず、そは if なる接屬法的助辭が用ひらるゝか、若しくは had なる助動詞が常に必らず代名詞に先きだちて該助動詞と主動詞との間に代名詞が來るを以て、其れによりて知らるればなり。之れを例すれば

If I had gone, I should have met him.

或ひは

Had I gone, I should have met him.

右兩者いづれにてもイタリックの處は接屬法なるなり。尙ほ次ぎの數例を見よ

Had I known it, I should not have done so.

あれを知つて居たら左樣しなかつたのだろう

He would have been glad, *had* I accompanied him.

共もに行つたらば悅んだろう

Had we only been diligent, we should have passed.

勉强さへしたらば及第したろう

If he had been poor, I would have helped him.

貧乏であつたなら助けてやつたろうに

We could hardly have believed such a thing, *if you had* not told us so.

もし君に左樣聞かなければ、そんな事があらうとは信ぜられなかつた

注意せよ、接屬法の過去完了は實際に無き事を假定して其の中に含める眞の事實の時が過去なる場合に用ひられ (I *did* not know it といふことが眞の事實なるに其の然らざることを假定するときは *had* I know it とか *if I had* know it とか云ふなり)、而して前記の數例に見ゆる如く主句(Principal Clause) に於ける should have 或は would have 或は時として could have と結付いて用ひらるゝを例とす

この過去完了に關して以上述べ來りたるところを概括するに其定則まさに左の如し、讀者その各定則の下に附する實例によりて尙ほ此の時制の用法を明らかにすべし。

一 過去完了は過去若しくは現在完了によつて表はされたる行爲の前に完了したる行爲を表はす

Where *had* you gone when I called on you?

伺ひに上がつた時に何處へ御いでゞしたか

I *had* not learned English when I entered this school.

此學校へ入學したときには、まだ英語を學ばずに居た

I tried to stop him, but he *had* already made up his mind to go.

とめやうとしたが、もーはや行くに極めて居た

As I *had* been sick, I was unable to go with him.

病氣であつた故に共に行かれなんだ

It was the first time he *had* stayed there.

彼れが此處へとまつたのは此れが始めて

He came after I *had* gone.

僕が返つてから、あの人が來た

He said he would eat it after it *had* got a little cool.

少し冷めてから喰べようと云つた

After, Before, Till 等の後には過去完了の代はりに過去を用ふること往々あるが、斯かる場合に於て過去完了の用ひは其の表はす所ろの行爲が「此れより先き既に完了したること」の意を大ひに强むるなり、卽ち

After Columbus (had) discovered America, he was greatly honoured and praised by the king of Spain.

に於て、had あるは之れ無きよりも「發見してから」といふの意强しと知るべし。

二　過去完了過去若しくは現在完了によつて表はされたる或は他の過去の行爲の前に未だ完了するに至らざるとも其の前に起り居て其時まで續ける行爲を表はす

He found there was nobody ill there. In fact he *had been* cheated.

其處に病氣の者は一人もなきことを見しが、其實彼れは欺むかれて居たりしなり（欺むかれて居て斯く見しものなるが故に、斯く見し時には尙ほ欺むかれたる事が續き居たるなり）

He *had* scarcely passed the threshold, when the tile fell to the hearth and broke into a dozen pieces.

彼れが辛ふじて閾を越へた其時瓦落ちて碎けたり（瓦の落ちたるときは彼れがまだ閾を越へるか越へぬかのところなりし）

三　過去完了は決して獨り孤立して用ひられず唯々過去若しくは現在完了と關係して用ひらる。これ上來の例に於て明らかに見らるべし。蓋し過去完了は過去の過去にして卽ち相對的（リラチーヴ）の時制なるが故に、過去若しくは現在完了の前に立つか後に附くか孰づれにしても此れと相ひ伴ふにあらざ

れば之れを用ふるは不當なり。是れ日本學生の兎角過ちに陷ゐり易き處ろなれば切に注意を要す。但し其の相ひ伴ふべき或る他の過去の行爲は必らずしも文面に明記せられずして文意の中に含蓄せることあり、又た其の相伴ふや同一センテンスの內に限らずしてセンテンスを別にして相ひ關係すること少なからず。

On the next day, the bag *had* disappeared.

是れ此のセンテンス中に相ひ關係すべき或る他の過去の行爲明記なきも、we *found* the bag *had* disappeared（翌日、と見れば囊は失せて無かりけり）といふの意を含めるなり

An attempt made by government of Madras to relieve the place *had* failed. But there *was* hope from another quarter.

これ「マドラス政府が此處を救はんとしたる企ては敗ぶれたりしが」といふ前のセンテンスと、「他方より望み有りき」といふ後のセンテンスと相伴なへり

The day *had been* very mild. Half an hour before sundown, the captain *gave* the cheering order to call the hands to go in swimming.

此れまた「此の日最とのどかにてありたりしが」といへる前のセンテンスと、「日暮前に船長は云々せり」といへる後のセンテンスと相關係せり

この最後の二例に於て、前なるセンテンスは孰れも、主眼の事實なる後のセンテンスの先驅となるもの也以上の三則にて、以て過去完了の全躰を言ひ盡くせり。左に尙ほ接續法の過去完了の例一二を擧げて以て此項を結ぶ

Subjunctive Past Perfect.

He blushed, as if he *had* been insulted.

辱かしめられたやうに赤面した

If the empty dishes *had* not been here, I could have declared an oath I had not dined.

からの皿が無かつたなら、食はなんだ事を誓つて斷言できたらうに

第五 The Future Tense.
(未來)

總ての時制中「未來」は使用するに最も容易なるものにして、其の使用法に關する法則も記憶し易し。去れど日本語にては屢々未來の行爲を表はすに「現在」を以てするが故に時としては學生をして其の間に迷はしむることあり。乃ち宜しく大躰の通則として左の通り心得べし、

凡そ明確なる未來の行爲及び事件は概するに

第一、I am going, I am leaving to-morrow 等の如く前進的現在 (Progressive Present) によつて表はさるゝか

第二、I shall go, I shall be leaving (shall leave) to-morrow. の如く實際の「未來」によつて表はされざるべからず

此 I shall go と I am going との間の差違（若し差違ありとせば）は甚はだ小なり、卽ち後者は「今ま將さに行かんとする處ろなり」の意にして、未來に行く意味の上に又た現在直ぐ行くことを意味するなり。而かも二者ともに

日本語の「行かう」「行きませう」に當る。但し同意を表はし若しくは寧ろ他人を勸誘することを表はす處ろの「行きませう」なる日本語は Let us go と譯するに如かざること往々之れあるを注意せよ。

又 I can about to go の如く、不定詞(インフイニチーヴ)の伴なへる 'am about' なる句を以て未來を表はすことあり、此の場合にては現在直ぐに行くことの意味猶ほ一層顯著なるなり。或はまた不定詞の伴なへる 'Be' なる現在助動詞を用ひて未來の意味をあらはす時あり、下の如し

What *is to become* of me?

He *is to be punished.*

How *is* the government *to be carried on?*

How *is* this *to be explained?*

My picture *is to be finished.*

これ皆な to ..... の不定詞の中に未來の意を含めるものにして、而して孰れも其の未來の意とゝもに必然 (Necessity) の意味を含有せり

此の外古代より前世紀の中頃までは屢々單純なる「現在」をば未來の代りに用ひたり、蓋し古英語にては特に未來に關する變形(インフレクション)なくして常に現在を以て未來を表はしたるなり。

I *go* to my father.

(此の例に於ては、"go" なる動詞の意味が未來を指すなり)

Duncan *comes* here to-night.

He *returns* next year.

The Prince leaves for Nikko to-morrow.

(上の三例に於ては、孰れも其句の尾にある「時之副詞」が未來を表はせるなり)

さりながら斯く未來を表はすに單純なる現在を用ゆるは現今に於ては普通の慣例にあらず。

例へば

Go into my vineyard, and I *give* you what is right.

の如き、今日の英語にては甚はだ可なりとせず、I *shall give* といふを遙かに宜しとす。

Goes Cæsar to the capitol to-day?

の如きも、*Is* Cæsar *going?* といふか若しくは *will* Cæsar *go?* といふに如かず。然り而して現今にても前進的現在もて陳べたる問に答ふるには往々單純的現在を用ふ、次の例を見よ

A. *Are* you *going* to the Rokumei Kwan this evening? (Progressive Present)

B. Yes, I *go* there. (Simple Present)

或は A. When *are* you *going* to Yokohama?

B. I *go* there to-morrow.

此等の場合とても同じく其の答に前進的現在或ひは未來を用ふることを得て、而かもこれを用ふる方が普通なるなり。

When *do* you *leave* Tokyo? We go to Hakone to-morrow.

の如く未來の代はりに强勢的現在 (Emphatic Present) を用ふるもの折々これ有りと雖ども、是れ寧ろ宜しきを得たる英語とは謂ふべからず。去れど若し之れを用ふるとすれば唯々これを問にのみ用ふ、答へ若しくは單なる陳述には決して之れを用ひざるなり。即はち次の如し

A. *Do* you *go* to the theatre to-morrow? (Emphatic present)

B. No, I *am not going.* (Progressive Present.)

或は No, I *shall not go.* (Future.)

然るに嘗つて一時我が邦英學生の會話教科書として往々用ひられたる彼の「パーテルの會話篇」には文法に外づれたる强勢的現在を濫用せる例多し、學者宜しく其例に倣はざれ。

Shall と Will.

未來助動詞なる shall と will との使用及び其の種々の意義に關しては、一方ならぬ混雜ありて學者を惑はしむること少小ならず。概するに、shall は一人稱（單數複數とも）の代名詞に伴なひ、will は二人稱及び三人稱（單複數とも）に屬するを通則とす。然れども will は亦た屢々一人稱とともに用ひられ shall も往々二人稱三人稱とゝもに用ひらる、而して斯く用ひらるれば此の二助動詞は其の通常使用の意義よりも全く異なりたる意義を表はすなり。次ぎの要目表は以て其の諸々の使用を明らかにするに足るべく、學者宜しく之れを深く記憶に印すべし。

第一 Shall は一人稱に用ひられたるときは
- 意向、所存 (Intention.)
- 未來 (Futurity.)
- 威嚇 (Menace.)

を表はす

同二人稱及び三人稱に用ひられたるときは
- 命令 (Command.)
- 保證 (Assurance.)
- 脅迫 (Threat.)

を表はす

此の例下の如し

a. *I shall* leave to-morrow. （意向）

明日出立する積りです

b. *I shall* probably not meet him again. (未來)
多分もう彼の人に出逢ふまい。

c. *I shall* go, no matter what you say. (威嚇)
お前が何んと云ふても行くぞ

d. I say *he shall* go. (命令)
あの人が行かねばならぬと云ふのに！

e. Don't cry; *you shall* have it. (保證)
泣くな、屹度やらふ

f. *You shall* do just as I say. (脅迫)
お前は私の云ふ通りに仕なければなるまい

第二 Will は一人稱に用ひられたるときは { 決斷 (Determination. / 主張 (Insistence.) } を表はす

同二人稱及び三人稱に用ひられたるときは { 意向 / 未來 / 決斷 } を表はす

この例次の如し

a. *We will* go, even if the teacher gets angry. (決斷)
教師が怒つても我々は行くに違ひない

b. *I will* do just as I please. (主張)
僕の好く通りにするトモ！

c. *He will* return next year, he says. (意向)
來年歸るといふ

d. I'm afraid *you will* not like it. (未來)
恐らくは御氣に入りますまい

e. *They will* be idle, no matter how much I scold. (決斷)
如何に叱つても、あの人達は怠まけるに極まつて居る

而して注意せよ、間接話法 (Indirect Narration) に於ては右の通りにして shall が should となり will が would となるなり。例へば

He said: "*I will* be back by Sunday." (Direct)
He said that *he would* be back by Sunday. (Indirect)

第六 The Future Perfect. (未來完了)

最後に來るものは未來完了、一名 Second Future(第二未來) と呼ばるゝものなり。是れ他に之れと同一の意を表はすの道あるが故に（例へば、I shall have left Japan when you come back. はまた I shall leave Japan before you come back. と云ふことを得るなり）使用せらるゝ少なしと雖ども、其の重要なるの度に於ては敢へて最小と謂ふべからず。此の時制や日本語には正さしく之れに當るべきものあらず、彼の「行つたらう」といふが如き「書いたらう」といふが如きは眞の第二未來にあらずして、寧ろ假定的若しくは條件的の意味を傳へ、意見或ひは臆想を表はす、而して此等は I think, I suppose 等の如き句にて英語に譯せらるゝこと最も多し。乃はち「行つたらう」は次ぎの如く色々に譯せらるゝことを得べし

1. He may have gone;
2. I think he has gone;
3. I suppose he is gone;

而して英語を使用する人民、殊とに蘇格蘭人の如きは或ひは之れを誤まつて

4. He will have gone.

と云ふことあるべし。然れども是れ「未來完了」の眞正なる適當なる用法にあらず。

但し日本の俗語にて大に「未來完了」に類するものゝ折々使用せらるゝあり、そは「行つたのだらう」の如き「云ふたンだらう」の如き「寢て仕舞つたンだらう」の如き卽ち是れにして、此等は時として（甚はだ稀れながら）事件の未來の完了に關して用ひらるゝなり。蓋し斯く事件の未來の完了を表はすは「未來完了」の本來の趣意なり。「未來完了」は啻だに未來に於ける事の起りのみならず、また未來に於ける事の成就、完了を表はすなり、故に今ま始じまりつゝあるも或ひは夙とに始じまりたるも將來に至らざれば完了せざるべき一事件若しくは數事件を語るに用ひらるゝなり。讀者こゝに至りて此の時制の名の甚はだ適當なるを見るべし。此の時制は始じまれる事の成就を表はす然かも唯未來に於てのみ其の終局の成就を見ることを表はす。過去は未來にあり一完全なる成就は唯だ未來に於て達せらるべしと一是れぞ此時制の指示するところなり、去れば「未來完了」使用の法則は下の如く之れを概括すべきなり。

一「未來完了」は、以前に既に始じまりたる或ひは今ま方さに始じまれる一事件若しくは數事件の未來に於ける成就、完了を表はす

二「未來完了」は、他の未來の事件が起るに先だちて起るべき事件の未來に於ける成就、完了を表はす

以下これを例に依りて說き明かさん

「未來完了」は the future completion or perfection of an action, or series of actions, that commenced sometime ago or has just commenced（以前に既に始じまりたる或ひは今ま方さに始じまりたる一事件若しくは數事件の未來に於ける成就完了）を表はす、といへる第一則にありては、日本語にて正しく之れに相當るものを見出さず。概するに日本語法にては斯の場合に現在完了（プレゼント、パーフエクト）を要するなり。例へば

1. My grandmother *will have died* ten years ago to-morrow.

うちのおばあさんは、明日になると、丁度十年前に死んだ

併し此れとても日本語に於ては無理なる奇怪なる句なり。案ずるに右の二者の中英語の言顯はしの方が論理に叶へるを見る。蓋し其の所謂ゆるおばあさんの死去以來經過したる十年は「明日」に至らざれば完了せず。現在に於ては卽ち今ま之れを語りつゝある時に於ては、九年と三百六十四日が經過したるのみ、滿十年の時期は「明日」を俟つて初じめて完了するなり。去れば茲に、九年と三百六十四日が既に實際經過したりとの事實の外に、明らかに一の未來の觀念の傳へらるゝあり。乃ち will は未來にして have died は死去の完了を表はす、かくて

will＋have died＝will have died. 卽ち「過去の未來」

なるを見るべし。又た次ぎの例を視よ

2. If I have to go to-morrow again to Yokohama, I *shall have had* to go five times since Monday.

また明日も横濱へ行かなければならぬならば、月曜日から五度行かなければならなかつた

（これ日本語にては如何にしても奇異なる句にして、外國人にあらざれば誰れも之れを用ゐんとするものはなかるべし）

此の章句は大ひに前の例に似たり、蓋しこれを語る人は「月曜日以來」既に四たび行かざるを得ざりしものにして、而して其の四たびは確かに完了したればなり。但だ其の行かざるを得ざる第五度目は未だ起らざるものにして、これ未來に屬する事件なり。さばれ此の二例は以て能く第一則に於ける「未來完了」の使用法を明示するに足るべし。

扨て次ぎに、「未來完了」は the future completion or perfection of an action that will occur before another future action can or will occur（他の未來の事件が起るに先だちて起るべき事件の未來に於ける成就完了）を表はす、といふ第二則は、既に云へる如く日本語に類似する處ろあるが故に前則よりも了解し易しとす。例へば

1. Before you come, I *shall have started.*

you の來ることは勿論未來の事件なり、而して此の一件の起り得る前に I は出立せんとす。要するに二者ともに未來に屬す、然れども I の行爲は you の行爲よりも先きに起るべし、是れこの「第二未來」を用ひざるを得ざる所以なり。就て曰ふ when, after, before, as soon as 等によりて導かるゝ句（クローズ）に於ては

I shall return you the book as soon as *I have read it.*

The boy will not come back before *he has spent* all the money.

などの如く、未來の符號なる shall 或ひは will を省きて現在完了の形を呈することあり（「現在完了」の項參看）

2. I *shall have finished* eating by the time you return.

お前が歸つてくる時までに、私はもうはや食べて仕舞ふでしやう

此の例の如きは復た說明を待たざるべし

約說并補遺

以上一ト通り「現在」「第一過去」「第二過去」「第三過去」「未來」「過去の未來」の六時制を講じたり。これより之れを約說し旁々その辨明の不足なりし點を補ひゆきて以て此時制之說明を完結せんとす

「現在」に就て

六時制の中最も多く最も廣く使用せらるゝものゝ一は勿論「現在」なり。「現在」は現在の事行の外に、前進的（プログレッシーヴ）現在若しくは單純的（シムプル）現在若しくは疑問に於ける强勢的（エムファチック）現在の場合に於ての如く屢々未來の事行を表はし（既に現在及び未來の部に於て說けり）、又た作者が目睹るが如くに物語るときに用ひらるゝ所謂ゆる歷史的（ヒストリック）現在の場合に於ての如く時としては過去の事行を表はすことあり

「現在」の中最も多く用ひらるゝは單純的現在なり。而して單純的現在（は或ひは之れを Present Indefinite といふ）の中最も多く用ひらるゝものは、時の如何に拘はらず常に不變なるものを表はす用法にあり、前きに現在の部に於て「常例或は習慣を表はす」といひたるもの卽ち是れなり。是れ最も能く記憶せざるべからざる點なるが故に尙ほ一層詳述せん。

The sun *gives* light. 太陽は光を與ふる者なり

Twice two *is* four. 二と二とを合せば四なり

Man *is* mortal. 人は死するものなり

Conscience *makes* cowards of us all. 良心は人をして臆病ならしむるものなり

Water *seeks* the lowest level. 水は低くに就くものなり

Time and tide *wait* for no man. 時と潮とは人を待たざるものなり

Still waters *run* deep. 靜かなる水は其の流れ深きものなり

The evil that men do, *lives* after them;
The good *is* oft interred with their bones. 人の惡事は死後に遺り其の善事は骨と共に埋まるものなり

是れ皆な時の制限なき universal truth をいふものなり、此等の場合に於て單純的現在は時の際限なき永久變ぜざる一般の事實を表はすの手段たるが故に名づけて Universal Tense とも謂ふべきものなり。そは實際單に現在丈けよりも多くの意味を有し、過去現在未來を含みたる總べての時を代表す、於是乎現在は唯々其の總べての時を代表するものとして用ひらるゝのみ。乃ち或る人が云々の事柄を主張し若しくは否みたりといふことを述ぶるに、其の主張し若しくは否みたるは過去なるも其の事柄にして時に拘はらざる universel truth なれば其事實を表はすに此の單純的現在を以てせざるべからず、例せば He denied that Electricity and Magnetism *are* the same agent. と云ふべし、were と云ふ可からず。而して自然の常道、定律、法則、生物の特質、習慣、性癖、其の他凡そ一定恒規ある事物は皆な單純的現在を以て代表せざるべからず

The mountains *look* on Marathon,
And Marathon *looks* on the sea.

是れ千古不變の狀態なるを以て單純的現在を用ふるなり。人の資格常態等を表はすに於ても亦た然り。例せば

He *snores*. 彼れは鼾かく癖あり、從來も鼾かきたり今後も鼾かくべし

He *works* hard. 彼れは勤勉家なり

He *superintends* the harbour. 彼れは港頭の監督者なり

He *sings* a good song. 彼れは歌が上手なり

He *has* a good name. 彼れは令聞ある人なり

I *write* for the newspapers. (これ平生新聞紙に寄稿するの習慣をいふ)

He *goes* to Yokohama. (これ未來にも關すれど或は平常の行爲をも指すなり) あの人はよく横濱へ出かけます

Do you swim? といへば「汝は只今泳ぐか」と尋ぬるにあらずして「一體汝は泳ぐことが出來るや又これを爲すや」と尋ぬるなり、而して之れに答へて Yes; I *swim*. といへば時に拘はらずして一般に「然り」と云ふなり。又た *Do* you admit that? No, I *deny* it. の如きも然り。特に今と限定して云ふにあらず、「一體おまへは其れを承認するか」「いや承認せぬ」と云ふなり

其の著者の既に死せると今ま尚ほ生きて居るとに拘はらず其の著書に於ける言說を引用するに現在完了を用ふると同じく單純的現在を用ふることを得

.....*says* Plato.....

Mr. Spencer himself *says* that.....

の如し、是れ其の言ひたる時は過去なるにも拘はらず、其の言說は當時に限らずして何時までも存するが故にユニヴァーサル、テンスを以て表はすなり

單純形(シムプル)現在は又單に現在の事行のみを表はすこと往々あり。此の場合に於てはI *now charge* this jar; *At present* I *do* duty for another person; などの如く特に現在を示す副詞を用ひ。或ば斯かる副詞を用ひず只だ前後の文勢により事情を推測して其の單一なる現在の事件たるを知らしむ卽ち The door *is* open といへば事實上其の「常に開いて居る」にあらずして「今ま開いて居る」ものたることを知る、The wind *blows* hard; we *are* late; the stranger *speaks* to you; Mr. Speaker *is* in the chair 等の如きも事情に依りて其の現に今起れる事たるを推知す、又I *give, declare, admit, pronounce,* sentence の如き官用的儀式的の宣言に於ても其の場合の性質よりして單に現在の所爲たることを知る、尤も斯かる場合にも now なる副詞を付することもあり

注意せよ日本の俗語にて「解かりました」「有りました」などと過去にて言ふ場合に、英語にては單純形現在を用ひて I *understand.* Here *it is.* と云ふなり

單純形現在が未來の意を表はすことに就きては尙ほ言ふ可きものあれども、そは便宜の爲めに未來の部に至りて述ぶべし

扨て單に現在の事行を表はす單純形現在と、前進(プログレッシーヴ)形現在とは相似たるが故に能く其間の區別を辨へずんばあるべからず。前進形現在は他の歐洲の諸國語には其例なき英語特有の形にして、一事一行を現實に限ると同時に其事行が現在に於て尙ほ未だ完了せざることを示し、且つ現に今ま專ぱら其の事行に係はり居りて他の仕事に向ふの遑まあらざることを暗示す。單純形現在その前後の文勢に依り事情を

推測して單に現に今ま起れる事件を表はすものたるを知らしむるとても、此れとは同じからず。He *writes* と云へば單に「書くといふ行爲に係はる」ことを表はす卽ち「讀みもせず若しくは歩るきもせず若しくは話しもせず若しくは何も爲すなくて坐りもせず、而して只々書く」といふことを含蓄す。然るに He is *writing* (書いて居る) なる前進形は、「卽今專ぱら書くといふ用事に係はりて居る」ことを示し而して「今ま書いて居るからして他の用事は爲すを得ず」といふことを含む。左れば差當りての所爲を述ぶるには此の前進形現在を用ふ、He *is balancing* his books; he is *revising* his mathematics; he *is pursuing* his investigations; the boys *are playing* の如し若し夫れ其の目的單に或る行爲を特に示すに在りて其の他の事實を問はざるときは單純形現在を用ふべし、I *walk*; he *rides*; you *go* in the boat. などの如し、此等の句は「散歩する」「騎る」「行く」といふことに特に重みを置きて只々其等の行爲を表示せんとするのみ、其餘の事(例へば其等の行爲の繼續如何の如き)は復た問ふ所ろにあらざるなり。然れども I *am walking* などと云へば「今ま散歩して居るところである、而して此の散歩は今は尙ほ完了せず」といふことを表はす、故にれ此を意味せんと欲するにあらずして前進形現在を用ふれば是れ英語使用の正格を失するものなり。蘇格蘭人の如きは The master *is calling* you; he *is speaking* to you; he *is not intending* などゝ言へども此れ宜しく The master *calls*; he *speaks* to you; he *does not intend* といふべきものとす。乃ち未來の意思を傳ふる現在に於ても He *is leaving* town to-morrow の如き

は he *leaves* town tc-morrow に如かず。但し He *is leaving* for America とは言つても可なり何となれば爾く遠國に行くには暫らく準備に係はりて居らざるを得ざるべければなり

前進形現在にして「……する所ろです」「……しやうと思ふ」「……する積り」てふ意味を示すもの或は之れを名づけて Present Intentional と稱す

I *am going* to write. 今ま書くところです

I have been reading English; but I *am going* to stop now. もう止めやうと思ふ（止めるつもり）而して是れ Immediate Future と見做さる、蓋し其の今將さに起らんとする行爲を表はせばなり

「過去」に就て

「現在」と同じほどに最も廣く使用せらるゝものは過去（パスト）なり。過去は其の過去に於ける時期の長短を問はず卽はち過去幾千年間に亘る事たると過去一瞬間の事なるとを問はず凡そ全く過ぎ逝きて今は在らざる事物を表はすものにして、歷史上の事實を記するには專ぱら之れを用ゆれば或は是れ Historical Tense とも謂ふべきものなり。去れば實際學生にして充分過去と現在完了と過去完了との區別に精通するまでは、總べての過去の事件を表はすに皆な此の過去を用ひて可なりとす。此の Past を呼ぶに日本にて往々半過去なる名稱を以てすれども、半過去といへばそは眞の過去を表はす能はざるにやとの誤想を生ぜしむるの恐れあるが故に穩當ならず。

過去の單純形（シムプレ）と前進形（プログレシヴ）との差異は前に單純形現在と前進

形現在との區別を詳說したる處に據りて推知すべし。蘇格蘭人の如きは、*Were* you *ringing*? I *was supposing*. などゝい言へども此れ宜しく *Did* you *ring*? I *supposed*. といふ可きものとす。I *talked* yesterday with a foreigner. I *saw* in the papers. I *heard* in the morning. の如きも、「話しをした」「見た」「聞いた」といふ行爲を表示するが主にして而して其等の行爲の繼續如何の點に重きを置かざるときは、此等の言顯しの前進形を用ふるよりも英語の自然の格に叶へりとす。

He *was going* to be killed. That is just what I *was going* to say to you. の如く前進形過去にして（……する所ろでした」「……する積りでした」といふ意味を示すもの、又は I *was* to write (=I intended to write, I was going to write) の如き意思見込を表はす過去形は或は之れを名づけて Past Intentional といふ

因に曰ふ、第十六世紀及び第十七世紀に於ては、forsook, shook, took, mistook などの過去形をば過去分詞（パスト、パーチシプレ）の代りに用ひたることあり、是れシエークスピヤ、ミルトン等の文に往々見るところなり、The letter was *written* といふ可き處を wrote といひ、the wine was drunk と云ふ可きを drank と云へるが如き例また少ながらず。而して殊に詩に於ては過去と過去分詞とを混用するの傾向あり、I *begun* (began と過去形を用ふべきに) の如き、the latest minstrel *sung* の如き是れなり。

「現在完了」に就て

次ぎに多く用ひらるゝものは（「未來」を除いては）現在完（プレゼント、パーフ

了(エクト)なり。此れに關して一言追記すべきは、此時制は行爲事件の完了を意味するよりして以て其の完了の時より以後(現在まで)の空間の樣を表はすに用ひらるゝことありといふ事これなり、卽ち he *has been* は he is no more, he *is dead* を意味し、I *have been* young は I *am now old* を意味し、I have *written a letter* は I *now possess a written letter* に同じ。

現在完了に於て、*have* come といふ可きを *am* come といひ、*hase* gone といふ可きを *is* gone といふなどの例あることは既に說きたるが、此の二者其間に差別なきにあらず。have, has は單に其事の完了を表はせども、am, is, are は其主格の有樣情態を表はして其の分詞 (come, gone の如き) に一層明らかなる形容詞的の意味を與ふ、例へば he *has* come は「來た」とて來の完了を表はすにあり、he *is* come は「來た、して玆に居る」との意を切にす。此の特別の例は現今にても間ま用ひられ殊に詩に屢々用ひらるゝが兩者適當の用方を云へば彼れは *John has* come の如く活動的のもの有生のものゝ場合に適し、此れは *the box is* come; *the melancholy days are* come の如く受動的のもの無生のものゝ場合に適するやうに見ゆ。されば the noble Brutus *is* ascended の如き今日にては *has* ascended となし、we *are* come off like Romans の如きも *have* come となすを可とす

現在完了は have 又は has なる助動詞と過去分詞とにて形成するものなるに、前にも述べたる通り第十六七世紀頃には過去形をば過去分詞として用ひたるとあるが故に、現在完了の場合にも過去分詞の代りに過去形を用ひたる例

多し。has *broke* (broken と云ふ可きを), have *mistook* (mistaken と云ふ可きを), have *chose* (chosen とすべきを), have *ran* (run とすべきを)の如し

現在完了の前進形(プログレッシーヴ)は、たゞた今まで續きつゝありて今丁度完了したる行爲を表はすものにして、彼の今ま將さに始じまらんとする行爲を表はす處ろの「プレゼント、インテンショナル」を正反對なり

「過去完了」に就て

現在完了に次いで使用の度の多きものは過去完了(パスト、パーフエクト)なり。此時制を用ゆるには尤も深く細心謹愼して吳れ々も濫りに用ゆべからず

現在完了の場合に於ける如く、過去完了に於ても、had といふ可き處に was 若しくは were を用ひたる例間々あり、they *were* (*had*) come; he *was* (*had*) entered into the connexion. の如し

又た現在完了の場合に於ける如く、過去完了の場合に於ても往時過去分詞の代りに過去形を用ひたることあり。I *had* neither *ate* nor *drank* (*eaten* nor *drunk* と云ふ可きを)の如し

過去完了の前進形(プログレッシーヴ)は、或る他の事件のありし前に(必らずしも完了せざるとも)起りつゝありたる繼續事件を表はす、he told the policeman that the man *had been trespassing.* の如し。

「未來」に就て

未來は其使用の度の頻繁なるに於ては第三位に居るものなり。扨て單純形現在を未來の代に用るの例は既に示せし

が「開會しませう」などと云つて議會を召集する場合に於ては多く此の例に由り、未來形を用ゆるを以て却つて可なりとす、例へば The Commitee *will* meet on *Thursday next.* といふは寧ろ The Committee *meets* on *Thursday.* といふに如かず。ウエリントン侯爵つて上院に於て *Does* the House *meet* to-morrow? と問ひたるの例あり

現在若しくは未來の主句(プリンシパル・クローズ)に從屬する副詞的從句(ディペンデント・クローズ)に於ては又未來を表はすに大抵單純形現在を以てす、例へば

If the servant leaves me, I cannot help it.

(イタリックの處が副詞的從屬句なり以下準之)

If you lend me this book, I shall be much obliged.

Take care of my dear children *when I am dead.*

但し上の例にては if 云々 when 云々てふ未來の事件が起ることを期するなれども、若しそれ其の未來の事件が實際果して起るや否や甚はだ疑はしく不慥かなるときには現在を以てせずして、從屬句の未來の助動詞として should 若しくは would を用ふるなり、例せば

If you *would* lend me the book, I should be much obliged. (是れ貸して呉れるとは期して居らざるなり)

If you *should* see Mr. Tanaka, please give him my complements. (面會することが覺束なきなり)

而して現在或は未來の副詞句に從屬する關係的客句(レラチーヴ・サブゼクチーヴ・クローズ)に於ては未來を表はすに矢張り未來の形を用ふるなり、下の例を視よ

He says he *will come* and see us next week *if he has* any spare time. (he will.....week が He says に對する關係的客句にして if he 云々てふ副詞句に從屬せるものなり以下準之)

When you wake up, I am sure you *will have* less pain.

又過去の主句に屬從する從句に於ては、其の從屬句の未來を表はすに必ず過去を以てせざるべからず

They *began* to consider how they *should do* this.

He *hoped* the doctor *would forgive* him.

If I *were* to take you across, your mother *would call* me an unkind fellow.

上の例に於て began, hoped, were が過去なるが故に之れに從屬する未來をば過去形にして should, would となさざる可からざることなり

「未來完了」に就て

未來完了(フューチュアー・パーフェクト)即ち第二未來は總べての時制中最も少く使用せらるゝものなり、此の時制を表はすに單純形現在を以てする(殊とに接續法(サブジャンクチーヴ)に於て)ことあり、

これを例せんに

Till thou *speak,* thou shalt not pass from hence.

といふ現在形は

Till thou *shalt have spoken,* thou shalt not pass from hence.

といふ第二未來に同じ。

「時制の一致に就て」

二箇以上テンスを使用するに就いて彼此相ひ撞着せざるやう一致の法則を守らざるべからず

第一、同時の諸事件は同一のテンスにて言顯はさゞるべからず

過去の事件を語るに就ては大抵過去(パスト)を用ることなるが、其の人の氣を引き立たしむる出來事の一條を活き々々と語らんがためには既に說きたる如く場合に應じて現在を用ふることあり（尤も此の歷史的現在(ヒストリックプレゼント)は初學者漫に摸倣して用ふべからず凡そ此等常則外の自由は餘ほど熟練したる上にあらざれば不可なり）去れど其の場合に於て二者の間に搖動して過去をも用ひ現在をも用ふるが如きことあるべからず。次の例は彼此一致せざるものにて不可なり

Fierce as he *moved*, his silver shafts *resound*.

第二、一センテンス中に於て主句(プリンシパル)のテンスと從句(サボーヂチート)のテンスと衝突すべからず

He *affirmed* that he *will* (would ならざる可からず) go to-morrow.

He *hid* himself lest he *shall* (should ならざる可からず) be impressed.

It *were* (had been ならざる可からず後の had been と適應するやうに) well for the insurgents, and fortunate for the King, if the blood that was now shed *had been* thought a sufficient expiation for the offence.

If you *please* to employ your thoughts on that subject, you *would* conceive the miserable condition many of us are in. 是れ If you *please*, ...you *will* とするか然らざれば If you *pleased* (it pleased you),.....you *would* とせざるべからず

但し時に拘はりなき千古不變の事實、現在の瞬間にも適用せらるべき一定常住の事實を言顯はすがために單純形現在(シムプレゼント)

を用ふるは此の例外にして、假令ひ過去の動詞と結合するとも過去の動詞の從屬となるとも、之れを過去に變ずるを要せず。左れば吾人は

Galileo *maintained* that the earth *moves* (moved にあらず)

と云ふ、地球が動く事實は如何なる時に於ても眞にして永く不變なるが故に・maintained に含める時に制限せられざればなり。次の例も之れと同じ

He *denied* that gold *is* (was とすべからず) the most precious metal.

尙ほ下の二例を視よ

The rustling of silk, the slight noises, the occasional whisper, *seemed* to him part of the great mystery of sound, and of the mystery which sound *conveys*.

All night long the northern streamers
Shot across the trembling sky:
Fearful lights, that never *beacon*,
Save when kings or heroes *die*.

第二講

可能法 (The potential mood.)

總說

可能法は元と決して解す可からざるものにあらず。日本の俗語にも甚はだ之と相ひ似たる處ろ多し、適當に云へば、日本語には可能法なし、然れども或る場合に於て可能調(potential voice)ありといふを得べし。例へば「見る」See は自動調(Active voice)なり、「見られる」I am seen は他動調(passive voice)なり、「見える」I may, can, or am able to see は可能調なり。又た

聞く	to hear	自動調
聞かれる	to be heard	他動調
聞える	may, can hear	可能調

斯くして可能法或は可能調は英語日本語ともに首として過去、現在、未來の行爲若くは事件の有り得べき事、出來べき事、能力、自由を表はすものなり、此の外、英語にては可能法は更らに行爲若くは事件の必至己む可からざる事、義務、確實を表はす。

可能法には四つの時制あり、現在(present)、過去(past)現在完了(present perfect)過去完了(Past perfect)是れなり。然れども其性質使用ともに全く直說法(Indicative mood)の時制と異なり。過去の可能法は單たに現在の行爲事件を表はすのみならず未來の行爲事件すらも表はすなり。此は少

しく奇異なるが如しと雖ども、其の行爲若くは事件をば未だ來らざれども既に起りつゝあるもの若くは起りたるものと見做すに外ならず。未來の測る可からざる事を語るに於て殊とに然り、can 又は may を用ふる鄭重なる挨拶或ひは請求に於ても亦た然り。

可能法は決して接續法(Subjunctive mood)の如くに變化屈曲に移らず、單に助動詞を以て言顯はす。此等の助動詞は原來皆な時制を具ふるものなれども今まは唯だ現在と過去のみを普通に用ふるなり。其の助動詞は卽ち may (might), can (could), should, would, must, ought 是れなり。可能法の時制の使用法は概要下の如し

一 現在可能法は現在又は未來の行爲事件の有り得べき事、出來べき事、自由、必定、義務を表はすものにして、動詞の根基不定詞(goの如き)と may, can, must なる助動詞との結合より成り、又は to てふ不定詞と ought なる助動詞との結合より成る。

二 過去可能法は(甲)過去の可能、自由、必定、習慣を表はし(乙)現在の可能、勢力、必定、要求、義務を表はし(丙)未來の可能、不慮、義務を表はすものにして、動詞の根基不定詞と might, could, should, would との結合より成る。

三 現在完了可能法は現在の可能、自由、必定、義務、又は過去と見做されたる、但し實際起るや否や必す可からざる行爲事件に關しての確信を表す者にして、動詞の過去(have gone の如き)と may, can, must, ought なる助動詞との結合より成る。

四 過去完了可能法は起る可かりしに起らざりし或る過去

の行爲事件の出來べき事、有得べき事、必至、義務を表はすものにして、動詞の過去と could, might, should, would なる助動詞との結合より成るなり。

I. May と Might.

既に可能法の大體の性質を述べたれば、是れより更らに可能法に用ふる各助動詞に就きて詳密に講述すべし。此等の助動詞中の重もなるものは may (might) と Can (could) なり。實に可能法は此よりして其の名稱を導びき來りたるなり。蓋し potential といふ語は元來能力(アビリチー)、勢力(パワー)若くは可能性(ポシビリチー)を言ひ顯はすものなれば也。故に可能法は行爲、狀態若くは事件の能力、勢力等を言ひ顯はすところの一種の動詞形なりと知るべし。

扨て may は本と勢力若くは可能性の意味を有したれども、近世の英語にては can 一般に之に代はりて此の二性質を表はすなり。之れに反して may は多く「不確定」「疑ひ」若くは「事情許るさば出來得るの力有る事」を表はすことゝなりぬ。斯くして、I may go は (一) I can (am ble to) go を意味す、日本の俗語にて「歩るける」「參られる」「行かれる」などいふもの是れなり。(二) perhaps I shall go を意味す、日本の俗語にて「……かも知れぬ」といふものに當る。(三) I can go (because my going is permitted) を意味す、日本の俗語にて「行いてもよい」「見てもよし」などの如し。

May と might は共に人或ひは想ふが如くに專ら或現在若くは過去の行爲、事件にのみ關せずして而して現在若くは未來の行爲、事件に關す、might なる過去の形ちは唯

々不確定若くは疑ひの意を强くするのみ、或ひは請求の意を傳ふるに於て may よりは鄭重なる形式として用ひらるゝに過ぎず。特に注意せよ。might 及び could なる過去形は屢々謙遜若くは懇願の意味に於て現在形の代はりに用ひらるれども矢張り或る現在若くは未來の事柄に關することあるを。例へば

may I go?——行いてもよいか

might I go?——行いても宜しうございますか

の如し。

may と might に於ける可能法の種々の形式及び其の意味は次ぎの如し。

一 現在(プレゼント)。I may go、即ち「余は行くの力あり(行くことを得る)」、「余は恐らくは行くべし」、「余は行くことが出來る(事情これを許るす)」の意。

二 過去(パスト)。I might go 即ち「余は行くの力有り」、「余は恐らくは行くべし」の意、然れども「余の行くことの確定せず或は甚はだ疑はしき」意を含む。實に此の形式の後には一般に but を以て始じまる否定句(ネガチーヴクローズ)の伴なふあり、I might go if it didn't rain, but I don't think I shall go in any case の如し。注意せよ、此の形式及び一般に可能法の過去は若し假定と相伴なへば過去接續法 (Past Subjunctive) を要することを。下の如し。

I might see him if I went now——今ま行けば彼の人に會ふかも知れぬ

He might be commended by his teacher, if he were only diligent——勉强さへすれば先生に褒められるだろう

三 現在完了(プレゼントパーフエクト)。I may have gone. 即ち「余が行きなせしことは有り得べき事なり」(然れども余は爾が爲したることを記憶せず、若くは余は行きなせしや否やを確かめず)の意。此れは或る過去の行爲、事件の不確定に關す。

四 過去完了(パストパーフエクト)。I might have gone. 即ち「余は行くことを得べかりしなり」(然れども余は爾かなさゞりし)、「恐らくは余は行きなせし」(然れども余は其れに就いて甚はだ疑はし、寧ろ余は爾かなさゞりしと思ふ)、「余が行くや否やは(其の過去の當時に於て)慥かならざりし」(然れども余はツヰリ行かざりし)の意。見るべし此れは可能法の時制(テンセ)中の最も困難なるものなり。何となれば是れ數多の不意の事變を含蓄すればなり。注意せよ、此の形式及び一般に可能法の過去完了は若し假定と相ひ伴なへば過去完了接續法(Subjunctive Past perfect)を要ずることを。其の例左の如し。

I might have gone if he had come. (然れども彼れは來らざりし、故に余は行かざりし)

I might have drowned if the boat men had not heard my cries. (然れども彼等は余の叫聲を聞きたり、故に余を救ひたり)

以上四種あり。尙ほ一言す、may が現今多く不確定若くは疑ひの意を表はすことは、may be (It may be の代はりなる)なる簡略句が往々一語に縮められ接續詞(コンジヤンクシヨン)にして用ひらるゝの事實に徵して明らかなり。例へば

It may be that I shall go.

或ひは更らに之を簡單にすれば

May be I shall go. の如し。

而して米國の或る地方にては此の may be を轉訛して mebbe といふ、Mebbe and mebbe I shant の如し、乃ち之れを解釋すれば I will not tell you whether I shall or shall not (余は云々する乎せぬ乎わからぬ〔言ひかたし〕といふの意なり)。

今ま此の二ッの可能法助動詞の使用法を概括せん。蓋し此の二者は後ちに至りて示すが如く、酷はだ Can と Could の使用法と相ひ肖たり。然れども唯だ May は概して不確定を表はし、Can は獨り勢力若くは可能性の表はしに用ひらるゝを異なりとす。

May と Might は

(一) 不確實、可能性(ポシビリチー)

(二) 請求

(三) 許容、(拒否)

を表はすものなりと知るべし。

(一) 不確實、可能性

此の兩思想を言ひ顯はすに於て英語の May と Might は既に說けるが如く、「參られる」「行かれる」などいふ日本語の將成調、若くは「かも知れぬ」といふ語尾に相當し、又た時としては「……ないものでもあるまい」の如き俗語に當れり。

1. He may have arrived already. 最早や着いたかも知れぬ

2. I may go to-morrow. 明日行くかも知れぬ

3. Don't you think he may be sick? 病氣ではありますまいか

4. The doctor says he may not walk for another

week. もー一週間立たなくては歩るけまいと醫者がいふ

5. It may snow before the end of the month. 月の末までに雪が降らないものでもあるまい

6. I might have gone if I had been able to do so. 行かれたら行ッたろーかも知れない

7. May not you be mistaken? お心得違ひではありますまいか

8. He may come, but I don't think he will. 來られないこともないが、來やしますまい

9. He may or may not be ill. 病氣であるかないか、どーだか知れない

10. I might do so if I could, but I really can not. 出來るならそーするかも知れぬが全く出來ぬ

11. If you really studied (Subjunctive Past) diligently, you might succeed. ホンとに勉強すると、成功しないこともありますまい

12. He says he may have posted the letter, but he does not exactly remember (whether he did or not). 其の手紙を郵便函へ入れたかも知れぬが、ハッキリと覺へて居ないと彼の人は云ふ

13. It may be that the steamer will arrive to-day. 滊船が今日中に着くかも知れぬ

14. It may be that I can see you again one of these days. いづれ復たお目に掛かれますでしう

(二) 請求

此は May の甚はだ容易なる使用法にして、現在に於て、若しくは Indirect Narration 間接話法（間接話法とは、或る人の言ふことを記者が其の人に代はりて間接に言ふも

のにして、次ぎの例に於ける3の如し）に於ける過去に於てのみ起り得るなり。是れ「……でもよい（よろしう御座ります）か」といふ日本語の疑問法に相當せり。而して注意せよ、請求を擇らむに於ては過去の Might を以て現在の May よりも鄭重にして禮儀に叶へりと爲す。

1. May I call a Kuruma for you? 車を呼んで上げませうか

2. May I go and play with those boys? 此の小供等と一所に遊びに行てもよいか

3. He asked his father if he might go to Ueno. 上野へ行てもよいかと彼れは父に聞いた

4. Might I offer you a glass of wine? 葡萄酒を一杯差上げてもよろしう御座いますか

5. Might I have a horiday to-morrow? あした一日休んでもよろしう御座いますか

(三) 許容（拒否）

此れ又容易なり。請求の場合に於けるが如く是れ亦た唯だ現在と過去とに起るのみ。「……てもよい（よろしうございます）」といふ日本の俗語これに當れり。而して之れに關し注意すべきもの二ッあり。第一、英語に於ては許可を與ふるものが請求者の用ゐたる動詞を用ふること希れにして、唯だ肯定のときには You may, 否定のときには You may not と言ッて總べての請求に答ふるを以て足れりとす。第二、You can を以て許容を表はすこと往々之れあり、然れども此れは You may の如くに鄭重ならず、實に此の二者の間の差違は甚はだ僅かなれども便利の爲めに

You may＝……ても宜しう御座います

You can＝……てもよい

と云つて可なるべし。

1. He may go, if he's a good boy. ゼとなしければ行つてもよい

2. You may not eat those cakes. その菓子パンを食べてはいけない

3. I think we may now go in. もー這入つてもよーございますでせう

4. It may rain all day for aught I care. 終日降つてもよいさ、かまうもンか！

5. You may get as angry as you please; it is n't my fault. 如何に御立腹なすッても仕方がございません、私のした事ではありません

II. Can と Could.

日本人より見れば、此の章は可能法中の最も六ケしき部分なり。蓋し其の重もなる困難は、日本動詞の斯の可能形が殆んど如何なる場合に於ても正さしく受動的(パッシーヴ)構造に均しきの事實に存す。故に同一の可能形にして之れを英語に飜へせば二種若しくは三種に譯し得べし。例へば「彼れが食(タ)べられない」の如き句を見よ、此は次ぎの三樣を意味ずべし

(一) He is not eaten (受　動)

(二) He cannot eat (可　能)

(三) He cannot be eaten (受動的可能)

要するに、日本の俗語にては(二)と(三)との間に區別を立つるに由しなし。之れに反し(一)と(二)との間の差異は容易すく見分けらるべし。仍つて概要の法則を述ぶること左の如し

(一)「は」「が」「を」なるテニヲハの伴なふ日本語の句は英語の自動的可能法を以て飜譯せざる可からず

(二)「に」なるテニヲハの伴なふ日本語の句は英語の受動に均し

此の第二の場合に於ては時として英語の受動的可能法を用ひて可なり。例へば「其れは私に見られぬ」なる句に於けるが如し。此の句は勿論受動なる that is not seen by me によりて譯し得べし、去れど受動的可能法を用ひて that cannot be seen by me とする方尙ほ近し。然れども日本語に於て尙ほ更らに可能法の力を明らかに表はすの場合多し英語の賓格(オブゼクチーヴ、ケース)と同一なる「を」なるテニヲハを用ふるが如き是れなり。日本の俗語にては或ひは「私は其れを食べられない」と云ふ、是れ卽ち賓格の力を失なへるを見る、或ひは「私は其れを食べられない」と云ふ、是れ I cannot eat that なる英語に該當す。

Can なる動詞は may の如く嘗つて總べての時制(テンセス)を具へて、現に Chaucer の時などには過去を用ひしが、今は唯だ現在と過去(パスト)を日常に用ふるのみ。可能法の爲めには現在と過去とにて充分なりと雖ども、未來、現在完了(プレゼント、パーフエクト)、若しくは過去完了(パストパーフエクト)の勢力(パワー)或ひは能力(アビリチー)を言表はすの場合起るときには、able (unable) なる形容詞を to be なる助動詞の種々の時制と合せ用ひ、之れに隨ふ to なる不定詞を以てし以て can の時制の缺乏を補なふ。例へば I can not sleep は又た I can not able (am unable) to sleep とするも可なり。但し特に注意せよ、此は可能法の中に含まれざるなり。able unable) なる形容詞と共もに to be なる助動詞を用ふるや否や、can は既に通常の動詞と見做さる、而し

て最早や可能法と關係なきなり。

完全を欲するがために左に can の變化表を附す。去れど吳々も注意せよ、此れは可能法と毫も關係なきことを。例へば can なる動詞の過去は I have been able to なり。然れども是れ I can have gone or eaten などいふ can に於ける可能的過去とは大ひに異なりて意味全く同じからず。

不定詞　to be able to

現在　I can or am able to＝デキル

過去　I could or was able to＝デキタ

未來　I can, or shall be able to＝デキルダロー

過去　I have been able to＝デキタ

過去完了　I had been able to＝デキテ居タ

未來完了（フューチュアーパーフエクト）　I shall have been able to＝デキタデアロー

分詞　being able to.

命令法　be able to!

之れに反して Can に於ける可能法（例へば to go なる自動詞と結び付きたる）の表は左の如し

現在　I can go.

過去　I could go.

現在完了　I can have gone.

過去完了　I could have gone.

注意せよ、此等は通例「行かれる」「行かれし」「行かれた」「行かれたりし」などいふ日本の俗語にて譯すれども、此の譯は全く正しからず、何となれば此等の日本語は毫も英語の可能法の力を與へざればなり。

今や can と could とに於ける可能形の意味と使用法とを講ずべきの時となれり。此の二種は總べての可能法助動詞の如く甚はだ may と might に肖たり。之れを別々に列擧すれば次ぎの如し

一　現在（プレゼント）。may の場合に於けるが如く、can を持てる可能法現在は未來と現在との兩意義を有せり。卽はち I can go は I am able to go at present（今ま行くことが出來る）を意味することもあるべく、I shall be able to go at some future time（イツカ後ちに行くことを得べし）を意味することもあるべし

二　過去（パスト）。I could go の如きは三樣の意義あり。（甲）I have the power to go（余は行くの力あり）、或ひは I can able to go（余は行くことを得）「然れども余が行くや否やは確かならず、或ひは全く或る他の偶然の事情に屬す」を意味す、（乙）「余は或る過去の時に於て、行く力を有したり、若くは行くことを得たり」、「余は常に行くを得たり」とて卽はち習慣的能力（customary ability）の意味を有す、例へば

I could walk well when I was young. 若いときには、よく歩るけた

注意せよ、此の意味に於て could は唯だ過去に於ける習慣的能力を言ひ表はすことを。（丙）「余は行くの力あり、若くは行くことを得、去れど余は行かんと思はず又は行くを欲せず」の意味を有す。此の意味にては「行かれないことも無いが」と云ふ日本語に均し。注意せよ、若し此の形式にして假定と結び付けば may を以ての可能法過去の如く過去接續法（past subjunctive）を要することを。次の如し

I could go *if it did not rain,* but I don't think I will anyhow. 雨さへ降らなければ行かれない事も無いが、降つても降らなくても行きたくない

三 現在完了(プレゼントパーフェクト)。I can have gone の如きは「余が行きたる事は有り得べきことなり、去れど余は行きたるや否や慥かならず、或ひは之れを記憶せず」の意味あり此は may を以ての現在完了の如く、或る過去の行爲、事件、狀態の不確實を指すなり

四 過去完了(パストパーフェクト)。I could have gone の如きは、(甲)「余は行くの力を有せり、去れど余は行かざりし」との意を含む。(乙)「若し他に何事か起りしならば余は行くを得しなり、去れど其起らざりしが故に余は行かざりし」との意を有す。茲に又た may と might の場合に於けるが如く、若し此の形式にして假定と結び付けば、過去完了接續法 (Subjunctive past perfect) 之れに先きだち、若しくは之れに隨ふものとす、例せば

I could not have believed it possible, if I had not seen it myself. 自身が其れを見なかつたら、斯樣なる事があられると信じられ無かつたらふ

是れより愈々 can と could の種々の使用法に及ぶべし。注意せよ、請求を爲すに於ては現在を用ふるよりも過去を用ふる方稍や優美鄭重なりとす。例へば

Couldn't you go with me? は

Can't you go with me?

よりも丁寧なるなり。又た強き疑ひ若しくは躊躇を言ひ表はすに於て(殊に疑問の形にて)も、現在よりも過去を用ふること多く、而して然かするを可となす、下の如し。

Couldn't you be mistaken? 御心得違ひでは御座いませんか

Couldn't he be ill? 病氣ではありますまいか

之れを要するに、can と could は

第一 勢力、能力、可能性(ポッシビリチー)

第二 請求

第三 許容(拒斥、否定)

を言ひ顯はすなり

第一 勢力、能力、可能性

1. I'm very sorry for you, but really it can't be helped. お氣の毒さまですがどうも仕方が御座りません

2. I can't help laughing whenever I see him. あの人を見るたびに笑はずに居られない

3. I can understand his not going, but I can't imagine how he ever thought of going. あの人は行かないわけですが、一體どうして始じめから行かうと思ふやうに成つたか分からん

4. Even then I might have saved him, but being already exhausted could save none but myself. 其の時にも彼の人を助けるんであつたが、最早疲かれて自分の外に誰れも助けられなかつた

5. I could have died to save him. あの人さへ助けられゝば、私は死んでもよいと思つた

6. I could do it, if I "had a mind to". そうしようと思へば、出來ないこともないが

7. Can / Could } he be sick, I wonder. 病氣か知らん

8. Could I have gone, I should have bone so. 行かれたら、行つたろう

9. I could have danced for joy. 躍るほど嬉しがつた

10. He can have started already. もー出立したかも知れません

11. I can possibly have made a fool myself, but I hope I did not. 馬鹿な、ナリをしたかも知れないが、そーでなければよい

12. I can't think where I put it! どこへ置いたろう!

第二　請求

1. Can I look at your watch? 御時計を拝見してもようございますか

2. Could I assist you? お手傳ひしませうか

3. Can I go to the music-hall to-night? 今晩寄席へ行つてもよいか

4. Can't he go with me? あの人は私とともに行つてはイケませんか

5. Can I have the pleasure of accompanying you? お共致してもようございますか

第三　許容

1. You can take away now. もうお膳を引いてもよい

2. You can have a holiday on the 1st. 朔日には休んでもよい

3. As he is so much better, he can take a walk to-morrow. 餘ほどよくなりましたから、あしたは散歩してもよかろう

4. Pa says I can go, hurrah! 父が行つてもよいッて、うまいねー

III. Should.

Should なる助動詞は唯だ過去(パスト)と過去完了(パスト、パーフエクト)との可能法にのみ用ひらるゝと雖ども、其使用方は他の諸助動詞の用法よりも複雑なるものあり。蓋し英語にては Should に二様ありて、相異なりたる根基より生じ而して甚はだ異なりたる意味を存せり。之れが爲めに此の重要なる助動詞の使用に餘ほどの混雑存す、乃はち此の混雑は直接に、二種の古(ナー)撒遜動詞(ラド、サクソン、バーヴ)を溶化して一個の近世英語助動詞となせるに起因するものなり。

一の Should は、今ま「未來」の符徴として用ひらるゝ所ろの Shall の過去形に外ならず。他の Should は Sollen なる古撒遜動詞の「現在」及び「過去」を含めり。此の動詞の「現在」及び「過去」は近世の獨逸語に今ま尚ほ痕跡を存す、次の如し

現在　Soll
過去　Sollte　｝兩つながら Should によりて言ひあらはす

然るに奇妙にも此の撒遜動詞の現在形は今英語の Shall にて言ひあらはすなり(前に言へるが如く shall は實際、別の根基より出て來りたるものなるに)。斯くて例へば近世獨逸語の er soll gehen は英語の he shall go にて反譯し、而して其の er sollte gehen は英語の he should go に當る。こは直譯のみ、去れど現在形を英語の should にて言ひあらはす場合は甚はだ多し、但し次は則ち其の取除けとなるべき例外なり

(一) 命令の場合に於ては撒遜語の soll は必らず shall を用ひて反譯す、次の如し

I say he *shall* go.

（二） 脅迫の場合にても同じく shall を用ふ、その例下の如し

If a man offends against this law, he *shall* die.

（三） 約束若しくは保證の場合に於ても同じく shall を用ふ、例次ぎの如し

If you are good, you *shall* go with me.

然り而して茲に shall の過去形たる should と、可能法の should とを區別するを得る一の道あり。他なし、shall は一般に第一人稱（單數の、又は複數の）とゝもに用ひらるゝが故に、之れと同性質たる、之れが過去形なる should もまた同樣に用ひらる。之れに反して將成法の should は人稱若しくは單複數の如何によりて變ずることなきなり。後ちに至りて追々に明らかなるべきが如く、此の should は ought なる不具動詞（テフエクチーヴ、バーブ）及び had better なる句と殆んど其の使用法を同じふするなり。

去れば should に於ける將成法の「時」は唯だ二個あるを知るべし、卽はち過去と過去完了とあるのみ。然れども元來此の二個の「時」の名稱は穩當ならずして人を誤まらしめ易し、何んとなれば此の二者ともに毫も其の名ざされたる可能的行爲又は事件の現實の時を表はさず、過去といふも實際過去にあらず、過去完了といふも事實過去完了にあらざればなり。

其一、過去（パスト）。I should go 此れは「行くは吾が義務なり」It is my duty to go を意味することもあるべく、「余は行くべき筈なり」I ought to go を意味することもあるべく、「余は行くこそ然るべけれと思ふ」I think it is good for

me to go を意味することもあるべく、若しくは「余は行く可し」I shall go（箇樣々々の事起るならば）を意味することもあるべし。乃はち知る、其の意決して過去の意味にあらざることを。特に注目せよ should にして若し假定と結び付けば其の假定的の句は必らずや過去接續法 (Past Subjunctive) に於て置かるゝなり。例へば

(1) I should go if he came. 此の場合に於て came なる過去の語のために誤まつて茲に言ふところの出來事は過去の事件なりと思ふの學生多し。然れども if he came は接續法の過去（パスト、サブジヤンクチーヴ）にして、直說法の過去 (Past Indicative) にあらず、而して接續法の過去は決して過去の行爲、事件に關はらざるなり。

(2) 前記の句は I should go if he should come. とするも可なり。此の場合に於て假定は過去設若法 (Past Conditional) にして、過去設若法は常に接續法と同一なり。然れども矢張り前記の如く if he came の形式を採用するに如かず。

(3) if なる接續詞を省ぶいて Should he came, I should go. となすも亦た可なり。此の場合に於て設若的の假定は一般に章句（センテンス）の初めに在り、且つ通常の式を顚倒して助動詞を主格の前に置くなり。

(4) 若し假定が甚はだ遠きことか若しくは殆んど出來可からざるほどの事なれば、假定句中の重もなる動詞は不定法（インフアイニチーヴ）にし、之れに先きだつに to be なる助動詞の過去接續法（パスト、サブジヤンクチーヴ）を以てす。例へば、I should go if he were (*past Subjunctive*) to come (*Infinitive*). 此れ則はち「彼れの來ることは甚はだ疑はし、或ひは寧ろ、是れ殆んど（全

然にあらざるも）有り得べからずと思ふ」といふことを意味す。尙ほ下の二例を見よ、

(甲) Were you to die, I should die too. (*but I do not think you will die*). あなたが死ぬと私も死ぬ（併しあなたが死ぬとは思はれぬ）

此の句に於ては if は省ぶかれたり、故に其の假定は前記の例の如く章句の初めに立ち且つ主格と助動辭と前後顚倒するなり。

(乙) If I were really ill, I should send for a phisician. (*but I am not really ill, therefore I do not send for a phisician*). ホンとに病氣なら醫者を呼びにやらうが……

特に注意せよ、此の should は彼の sollete なる古撒遜動詞と同一にあらず。此は久しき習慣によりて將成法の一部分と見做さるゝに至りたりと雖ども、其の本原は將成的(ボテンシヤル)よりも寧ろ設若的(コンデシヨナル)なり。

其二、過去完了(パスト、パーフエクト)。I should have gone. 此れは「行くは吾が義務なりき」It was my duty to go を意味することもあるべく、或ひは「余は行くべき筈なりしと思ふ」I think I ought to have gone を意味することもあるべく、或ひは「余は行かざりしことを悔ゆ」I regret thot I did not go を意味することもある可く、又た或ひは「余は行きたるなる可し」I should have gone（若し個樣々々の事起りたりしならば）を意味することもある可し。乃はち見よ、過去完了は玆に決して實際過去の行爲、事件に關はらずして、唯だ過去として見做されたるものに關することを。）

旣に Should の過去完了(パスト、パーフエクト)に於ける初めの三樣の意義を講

じたれば是よりは其の假定的(ハイポセチカル)使用を吟味すべし。前きにも云へるが如く、此の過去完了は實際過去の行爲を言表はさずして、只だ過去として見做されたる行爲事件を言表はす、卽はち「或る偶然不慮の事件が起りたりしならば、出で來つたであらふ所ろのもの」を言表はす。扨てスウヰントンなどの文典には毫も接續法(サブジヤンクチーヴ)の過去完了の事につきて言はず、是れ全く其れが if を付加することを除けば正さしく直說法(インジカチーヴ)の過去完了形と同樣なるが故に過ぎず。去れども以前には實に其間に大ひなる差違ありしなり。其の差違近世の獨逸語には今ま猶ほ痕を存せり、乃はち

Hatte gegeben＝had gone（過去完了直說法）

Hätte (haette) gegeben＝if……had gone（過去完了接續法）

然らば則ち、假定的の句に於て should を持てる可能法過去完了の後とには常に必らず接續法過去完了隨ひ來ると謂ふべし。下に其の數例あり

(1) If he had come, I should have gone. あの人が來たら私が行つたろふ

此の句は意味の變化なくして次ぎの如く書くことをも得るなり

(*a*) Had he come, I should have gone;

(*b*) I should have gone, if he had come;

(*c*) I should have gone, had he come;

(2) If I had known that, I should not have done so. それを知つて居たら、そうしなかつたろふ

(3) Had I not had to go, I should not have gone. 行かなければならぬ事が無かつたならば、行かなかつたらう

特に注意せよ、Shouldに於ける過去完了可能法の使用方にして、玆に例外にして而かも屢々用ひらるゝもの一あることを。

Should he have come, let him known that I am waiting.

の如き句に於て、先行句（come までの）は多分丁度今まで起りたりとして見做されたる行爲若くは事件を指すなり。是れ日本語に譯すれば左の如し

最はや來て居るなら、私が待つて居ると知らせてお呉れ

個樣なる句の後とには大抵イツも命令句の隨ひ伴なふものなり。此の點を明らかならしめんがために玆に尙ほ二三の例を擧げん

(1) Should there be (*Present Potential!*) no answer, never mind. 返事がなくてもよい

(2) Should he wish me to see me, say I'll come by six o'clock. 私に會ひたいと云ふならば、六時までにあがるといふてお呉れ

(3) Should I have been mistaken, please pardon me. 若しも間違ひが御座いましたら、どーぞ御勘辨を

然らば則ち可能法の should は

第一、義務
第二、勸告
第三、後悔遺憾
第四、意見

を表はすものなりと謂ふべし

こゝに其の例を示すべし

第一、義務。義務を表はすに於て Should は日本語の「筈」

「……すべきものだ」「可し」と譯すべし。而して是れ勿論殆んど常に肯定的に用ひらる。

(1) One should know one's own deficiencies. 人は己れの不足を知らずんばある可からず

(2) We should always obey our parents. 吾等は常に兩親に順ふべし

(3) I should go, but I don't want to. 行く筈だが、どうも行きたくない

(4) Every one should be vaccinated. 何人も種痘をす可き筈のものだ

(5) He should have come, but did not. 來る筈でしたが、來なかつた

(6) Oh, I should have known that! あゝ其れを知つて居るべき筈だ

(7) You should treat me with more respect. お前は私に向つてモツト鄭寧にしなくてはならない（する筈です）

(8) One should not look unconcernedly at the sufferings of others. 他人の苦痛を知らぬ顏に見るべからず

第二、勸告。勸告を表はすに於て、should は日本語の「方がよい、よからう」「……てはいけない」「ものぢやない」「方がよくない」などに同じ。

(1) You should not say such things. そんな事を仰しやらない方が宜しう御座います

(2) You should be more careful. もつと氣を付ければよいのに

(3) He should not have gone with such a fellow. あんな奴と共もに行かなければよかつた

(4) If you want to speak English perfectly, you

should be unweariedly diligent. 英語を充分に覺へたければ、倦まずに勉強するがよろしい

(5) You (had better) should leave it unsaid. 言はずにおくとよう御座います

(6) You should not have attempted it. やつて見なければよかつた

(7) He should have taken medicine sooner, I think. 早く藥を飲めば善かつたろふ

(8) May be he should have gone then, but I'm not certain. 其のときに行けば善かつたかも知れないが、どうも請合ふわけには參らない

第三、後悔遺憾。should の後悔遺憾を表はすや殆んど常に自己一身上の事柄に屬す。吾人は固より他人の擧動を惜しむことあるべし、去れど最も屢々用ひらるゝものは單數及び複數の第一人稱なり。尙注意せよ、次の例に於て總べて should に代ふるに had better なる句を以てするを得る事を。

(1) I should not have spoken so rudely. そんな不禮なことを言はなければよかつた

(2) Upon second thoughts (now I think of it), I should have left it unsaid. 今考へてみると、言はずにおけばよかつた

(3) Dear me! You should not have done that. おや々々、そう爲さらなければよかつたらう

(4) "I should have been a better man," he whispered, when at the point of death. 死にかゝるときに、「善人であればよかつた」と微かな聲で言つた

(5) I should not have got so angry. そんなに怒らなければよかつた

(6) I think I should have done better to stay at home. 家から出ない方がよかつたらう

(7) There's no use crying over spilt milk, but I should undoubtedly have been more diligent. もー仕方がありませんですが、もつと勉強したらよかつたに相違ございません

第四、意見。此は英語に於て往々「義務(オブリゲーション)」と區別すべからざることあり、去れど日本語にては其の差違容易に識認せらるべし。卽はち是れ大概「……そうなものです」「……そうです」などに當る。

(1) As the steamer left on the 13th, it should be in by to-morrow. 十三日に汽船が出帆したゆゑ、あしたまでには著しそうなものです

(2) At this rate, it should rain before long. これで今に雨が降るだらふ

(3) That cake should be very nice. 其の菓子パンは甘まそうです

(4) He should be back soon, for he promised to be here before three. 三時前に來る約束したから、もー歸へりそうなものです

(5) What's that? Noncense! You should know me better than to think I would do it. なんだェ？ばからしい！僕は其んな事をせぬと君が知りそうなものです

(6) He should have replied before. 前にも返事を送るだらうと思つた

(7) From what I've seen of his conduct so far, he

should be a good fellow. 今迄の行なひについて見ると、善さそうな人です

Should like.

Should like（此れ一人稱にのみ限る、二人稱及び三人稱の塲合には would like を用ふ）なる句は別に一言の説明を費やさゞるべからず。此れ「困難なるもの又は成る可からざるものを爲し若くは得んとするの願ひ」を言ひあらはす。

去れば注意せよ、此は would like と大ひに異なることを。乃はち

I should like to go.

は「行きたき願ひ」を言表はせども困難又は不可成の意を含めり、然るに

I would like to go.

は單に切なる願ひを言表はすのみにて、絶えて斯かる意を含むことなし。此の例左の如し

(1) I shoule like never to die. 決して死なないやうにしたいです

(2) I should like to become a millionaire in a day. 一日間に金滿家になりたい

(3) I should very much to accompany you, but I fear it will be impossible. 實に御一所に行きたう御座いますが、恐らくは六ツかしう御座いましょう

(4) I should like to travel in foreign lands, but..... 洋行いたしたいですが、どーも……

IV. Would.

多くの點に於て would に類似する二個の撤遜動詞、近世の獨乙語に其の迹を存せり、卽ち to will なる意味を有する willen と、to desire なる意味を有する wollen と是れなり。would は蓋し此の二個の複合なるべし、何となれば其れ往々 will てふ動詞の過去を表はすと同時に又た、to desire の意なる wollen てふ動詞の現在及び過去（パスト）をも表はせばなり。例へば

Would God that he might recover!

此の章句に於て would は will なる動詞の第一過去接續法（サブジヤンクチーヴ）（懇願又は希望の意の）にして、之れを解釋せば

Oh that God commanded that he might recover!

となる、卽ち「余は彼れの恢復を命ぜんことを神に祈る」との意なり。之れに反して、

I would go, but I dare not.

なる章句に於ては、would なる動詞は實際 to desire の意なる wollen てふ古き動詞の現在（過去）なり。此は次の如く解釋するを得べし

I greatly desire to go, but I dare not.

玆に又 would の使用に第三の意味あり。今や英語に於ては will なる助動詞は「未來」の符號となり、其の古への使用法と異なり來れり。間接話法 (Indirect Narration) に於て would は常に will の代はりを爲し、昔しの to order, command なる意及び to desire なる意味を失ふて、單に未來直説法（フユーチユアーインジカチーヴ）の一過去形となりぬ。斯て would には三種の性質ありて實際中々複雜せり

今ま先づ此の最後の第三より説きはじめんに、次ぎの數例は間接話法に於ける would の使用方を明かすべし

1. Direct:—"*I shall go,*" *said he.*
   Indirect:—*He said he would go.*

2. Direct:—*We thought, "He will return the next day.*
   Indirect:—*We thought he would return the next day.*

3. Direct:—*I said to myself, "I will never do so again.*
   Indirect:—*I said to myself that I would never do so again.*

4. Indirect Present;—*I suppose he will come.*
   Indirect Past: *I supposed he would come.*

以上以て would が will なる未來助動詞の過去として用ひらるゝときには其の原來の意味を失なふことを見るに足るべし

次ぎに to will なる動詞より出て來りたるものとしての would は二個の使用方あり

第一　希望若くは祈りを表はすに於て

第二　強き願欲を表はすに於て

第一。第一の場合にありては would に伴なふ代名詞なし、何となれば是れ天に向つて希望を述ぶることを含めるものにして、乃ち實の目的物は "Lord," "Heaven," "God" なればなり。これ既に上に掲げたる最初の例にて明らかなり。特に注意せよ、此の would の後には必らず常に接續法若くは可能法の過去或は過去完了(パストパーフエクト)の伴隨することを。下の例を見よ

(1) *Would Heaven that it were not so!*=I wish it were not so (but it is so).

(2) *Would(to)* God *I had never met him!*=I wish that I had never met him (but I have met him).

(3) *Would that he came quickly!*=I wish he would come quickly (but he has not yet come).

(4) *Would that I knew what will happen!*=I wish to know what will happen (but I do not know it).

(5) *Would that this pain left me!*=I wish to be free from this pain (but I am still suffering).

上の五例に於て、從句(サツボーヂチート、クローズ)は接續法の過去と過去完了なる動詞を含めり。次ぎの例は同じ關係なる可能法の過去を例證するものなり

(1) *Would Heaven I might!*=I wish that I had the power to do so (*I'canimo dekireba yoi ga*).

(2) *Would that I could see him now!*=I wish I had the power to see him at this moment (but I have not this power).

(3) *Would that I had not had to go!*=I wish it had not been necessary for me to go (but it was necessary).

(4) *Would that he might have recovered!*=I wish he had recovered (but he did not recover, *i. e.* he died).

(5) *Would that I could have gone!*=I wish that I had been able to go (but I was not able to go).

第二。強き願欲（或ひは時としては至極本懷、大滿足、全然甘諾等の意）を表はすに於て、would には常に或る人代名詞(大概は一人稱の)の伴なふなり。次の例を見よ、

(1) *I would die for him.*=I am willing even to die for him.

(2) *I would I know not what*=I greatly desire to do something, but I do not know what it is.

(3) *I would—what would I not? For the sake of somebody.*=I am entirely willing to do anything (even die) for the sake of some one (whom I dare not name).

(因に云ふ、此の第三の例なる二行は古き蘇格蘭の俗曲より取りたるものにして、其の所謂ゆる some body とは英國の王位を要求し king Charles たらんと期せし prince Charlie を指すなり)

(4) *I would I could!*=I strongly desire to be able to do so (but I am not able).

(5) *I would it did not rain*=I wish it were not raining (but it is raining).

(6) *I would to Heaven that man had not come*=I wish that Heaven had kept that man from coming.

(7) *I would give the world to see him*=Even though I have the possessor of the world, I should gladly give up my possession, if by doing so I might see him.

will なる動詞より出で來りたるものとして would like と should like との使用の差違を茲に明らめざるべからず。前回に於て should like なる句は「爲し難きもの、得難きものを望む」の意を表はすことを說けり。去れど一人稱(單數にせよ、複數にせよ)にては should を用ふるも二人稱及び三人稱にては單數複數とも would を用ふるなり。その例次ぎの如し

(1) I should like to go=*I wish to go (but it is or will be difficult for me to do so).*—行きたいには行きたいが

(2) We should like to have a holiday to-morrow=*We wish to have a holiday to-morrow (but we fear that it is difficult for us to obtain this holiday).*

此等は第一人稱(單數及び複數の)の例なり。注意せよ、斯かる句は屢々、願ひ兼ねる事、申し難き事を請求するかの如く遠慮して禮儀的に用ひらるゝを。例へば、婢僕が其の主人に對して「あした一日お暇を戴きたう御座います」と云ふは英語にて I should like a holiday to-morrow, Sir. たるべし、乃ち此の文中に於ける should like は禮儀的の意味に用ひられたるものにして、「願ひ兼ねますが」「申し上げ兼ねますが」などの如く謙遜して言へるなり

而して第二人稱及び三人稱(單複數の)に至りては則ち should を用ひずして would を用ふ。例へば

(3) I am sure he would like to be able to go. あの人が行かれいは喜ぶに違ひない

(4) Wouldst thou like to learn the secrets of the future? 未來の秘密を知らんと欲するや

(5) They would like to learn more quickly, it seems. あの人たちはも少と早く覺へたいと思ふをーです

(6) You say you would like live forever; why, you must know that's impossible! いつまでも生きたいとお少しやるか、そうはゆかぬと御存じのくせに!

To desire の意味なる wollen てふ動詞より出で來りたる would は奇妙なる意味の働らきをなす

第一　過去の習慣、ならはし

第二　鄭重なる請求の意を傳ふるに用ひらる、殊とに打消しを持つ接續詞に於て然り

第一、較や近年までは would を以て過去の慣習、ならはしを言表はせること多し。Washington Irving's "Sketch Book" などには比々として之れ有るを見るべし。去れど近年に至りては多く用ひざることゝなりぬ(今日にても會話には折々之れを用ふるとは云へ)。其の例

(1) When I was young, I would go for a long

walk every day=*When I was young, I had the habit of taking a long walk daily.* (若いときにはよく毎日遠い所へ散歩した)

(2) Whenever his wife scolded, Rip would take his gun and go off to the woods=*When his wife scolded, Rip was accustomed to take his gun, etc.* (妻の怒鳴るときにはリップはイツモ鐵砲を取つて森にゆくを例とせり).

(3) He would always drink a cup of tea before retiring=*He was in the habit of drinking a cup of tea before going to sleep.* (彼れは寢る前に茶を一杯飲むが習らひなりき)

(4) He would not obey his father, no matter how angry he got.

此第四の文に於ては would なる助動詞は兩樣の意味を有せり、willen より來れりとも見るべく、wollen より來れりとも見るべし。第一の場合にては He was not willing to obey his father (彼れは父の命に順ふを欲せざりき) の意にして、第二の場合にては He was accustomed not to obey his father. (彼れは父の命に順はざるを常とせり) の意なり

第二。鄭重なる請求に於て would 若しくは would not (一般に之れを略して won't となす) を用ふること亦た屢々あり。此の意味に於て would は日本語の「呉れる」なる動詞に近しと謂ふべし。其例次の如し

(1) Would you kindly tell what time it is? 今まは何時でございますか

(2) Won't you take a seat? おすはりなさいまし

(3) Won't you go in my stead? 私の代りに行つて呉れませんか

(4) Would you oblige me with the loan of a dollar? 一圓だけ貸してくださいませんか

(5) Won't you stay with me? 一所にとまつて呉れませんか

斯くの如きの類は極めて多し、讀者宜しく自から其の例を推求せよ

Would の不規則なる使用

第一。won't (=would not) をば will not の縮稱若しくは略稱として用ふることあり、これ文典上には全く正しからずと雖ども習慣によりて既に是認せられ居るなり。蓋し shall not は正しく之れを縮めて shan't となすべし、去れども win't (=wili not) といふが如き略語はあらざるが故其の代りに won't を用ふることなり。但し正しき否定的未來 (Negative Future) の代はりに此の略語を用ふるは宜しからずとす。次の如し

(1) *I won't go*=I shall not go.

(2) *I won't do any such a thing*=I will not (shall not) do anything of the kind (ike that).

(3) *He says he won't be able to go*=He says he will not be able to go.

(4) *I think it won't rain*=I think it will not rain.

次ぎの二例に於て特に would の正しき使用と正しからざる使用とを注意せよ

(*a*) He says he won't go.

是れ宜しからず. won't を will not とすべし

(*b*) He said he won't go.

此は上の例に反して正しきものとす。蓋し won't は would not の謂にして、此の場合に於ては間接話法 (Indirect

Narration) なるが故に would not となさゞるを得ざるなり

第二。今まーッ would の奇妙なる使用法は米國に往々行はるゝところにして

Oh, I wouldn't do tnat! (そんな事をするな)

或は Oh, I wouldn't do that if I were you! (そんな事をしちやいかん)

の如き諫止の句に用ひらる、其の眞の意味は、Do not do that 若しくは You shall not do that の謂なり。此は文典上正しからざれば避けて用ひざるを可とす。

V. Must.

總べて他の可能法助動詞の如く、must も亦古撒遜(サクソン)動詞—近世の獨逸語には此の動詞猶ほ跡を存せり—より出て來りたるものにして、此の動詞は古昔にありてそれ々々の各時制(テンス)を具へたりしなり。現今に於て英語の must は唯だ一の形を有するのみ=間接話法 (Indirect Narration) に於ける第一過去として之れを用ふるを見れば現在(プレゼント)と過去(パスト)との兩性質を兼ぬるとは云へ。而して實に must なる形は古撒遜動詞の過去の轉訛にして其の現在の轉訛にはあらず。即ち古代の形は左の如くなりき、

現在　muess

過去　muesste=近代英語の must

此の故に今日の must は嚴密に言へば決して現在にあらずして過去なることを見るべし。然るに斯の古撒遜動詞(其の使用は Chaucer 時代より百五十年前に全く消へ失せたり)の現在と過去とは時を經て遂に must なる一語を

以て表はすことゝなりぬ。左れば must は一の不具動詞 (Defective Verb) と見做さゞるを得ず。

單に可能法の點より見るを止め一個の動詞として觀察すれば、must の不具なることが大ひなる不便となること往々之れ有らずんばあらず。乃ち其の不具なるが爲めに各種の時制(テンス)を表はす能はざるなり。勿論 I am compelled, I was obliged, It will be neccessary for me, I have been forced 等の如き句を用ひて迂遠に其の欠乏を補なふことを得、然れども時間を費やさずして其の意を傳ふる簡單なる句を好む處の普通の人々には、斯樣なる形造りの句は餘まり長きに過ぐるなり。

Must の不具なるより起る不便利は斯くして、to have なる動詞の種々の時制(テンス)と共もに或る他の動詞の to に於ける不定詞(インフヰニチーヴ)を用ひて以て避けらるべし。I must go の代はりに I have to go と言ひ得て毫も意味に異なるところなし。故に must の變化表(コンジユゲーション)は次の如し

Present Tense:—I must *or* I have to.

Past Tense:—I had to (*I must* in Indirect Narration only).

Future Tense:—I must, *or* I shall have to.

Present Perfect:—I have had to.

Past Perfect:—I had had to.

Future Perfect:—I shall have had.

Participle and Gerund:—Having to.

Infinitive:—To have to.

(注意せよ、總べて此等の時體に於ける to なる助辭は日本語の「べく」にして「まで」にあらず)

以上の用例下の如し

(1) Present Tense:

Have you go already? *or* Must you go already? もーお歸りですか

You must go and return at once; *or* You have to go and, etc, 早速行つてこなくちや

(2) Past Tense:

I had to go and call (*or* I had to send for) a doctor last night. 昨夜醫者を呼びに行かなければならなかつた

It seems he had to start before eight o'clock. あの人は八時前に出立しなければならんだそーです

(3) Present Perfect:

I have just had to take some medicine. 今ま丁度據どころなく藥を飲んだばかりです

I have just had to mail a letter. 今ま郵便を出さなければならぬ用事があつた

(4) Past Perfect:

I had had to go to Ginza before I could call at your residence. あなたの御宅へあがられる前に、銀座へ行かなければならなかつた

It is quite true that I did return the money, but I had had to be very anxious until I did so. 金を返したは返したが、返へすまでは餘ほど心配しなければならなんだ

(5) Future:

I mustn't believe what you say. あなたの仰しやる事を信ずるわけには參るまい

In any case, I fear I shall have to go this evening *surely*. 如何にしても、今晩こそは行かなくてはなりますまい

(6) Future Perfect:

If I have to go to Yokohama again before the 5th, I shall have had to go there five times in the last fortnight.

I'll try my best to see him, but I fear he will have had to start before I get there.

Mustなる動詞の使用方は色々ありて其範圍極めて廣し。去れど不具動詞(デフエクチーヴ、ヴアーブ)としての must と、可能法に於ける其の使用方とを深く注意して區別するを要す。此の可能法の場合に於ては must をば其の自動詞としての使用方を措き、單に助動詞と見做さゞるべからず。かくて I must は一見して其の must てふ動詞の直接法(インデカチーヴ)なる現在躰(プレゼントテンス)たることを知る。然れども I must go は to go てふ動詞の可能法なる現在躰にして must は則ち可能法助動詞なり。加之ならず可能法助動詞としての must の意味と、單純なる動詞としての其れの意味との間には頗ぶる大ひなる差違あり、否な此の兩者の意味は全然相似同じからざるなり。日本の英學生は屢々 I must have gone を、日本語の「行かなければならなんだ」に同じと誤解す。余は教授に臨んで之を學生に説明するに一方ならぬ困難を覺へり、殊とに其れが「行かなければならなんだろう」とも譯せられ得る(大抵は「行つたろう」と同じけれど)故に甚はだ間違ひ易し。例へば

If I had not gone to the rescue, he must have died.—扶けに行かなかつたならば、彼の人は死ないければならなかつたろう(或は)死んだろう

去れば I must have gone は決して「行かなければなら

なんだ」と同一にあらずして、(場合に應じて)或ひは「行かなければならなんだろう」とも譯すべく、或ひは「行つたらう」とも譯すべく、或ひは「行つたに違ひない」などと譯すべし。

可能法助動詞としてmustは唯だ二種の時制に於て見はるゝのみ、現在可能法(プレゼント)と過去完了(パスト、パーフエクト)可能法と是なり。例へばto goなる動詞に就きては

(1) 現在　　=I must go.

(2) 過去完了=I must have gone.

の二種あるのみ。但し注意せよ、間接話法(インデレクト、ナレーション)に於ては。mustは又た可能法過去(パスト)の使用方を具すると謂ふべし。I thought I must goなる句に於て、I must goなる枝句はto goなる動詞の可能法過去なりと見做さゞるべからず。猶ほ一層此の點を明らかにせんが爲め試みに此の句に於てmustの代りにto haveなる助動詞を用ひよ、I thought I *have* to goと云はずして、.....I *had* to goと云はざるを得ず、乃ちmust goは過去にてあること瞭然たるを見るべし

餘り大切ならざる種々の使用方を外にして、mustなる助動詞は特に

一、命令

二、確乎たる意見(斷言)

三、必至(餘儀なき事)

を言表はすに用ひらる。而して次ぎに重要なるは

四、丁寧懇懃なる意見

五、輕蔑

なり。此等の中最も困難なるものは第五なるべし、然れど

も學者もし、mustなる動詞は其の可能法上の使用に於ては「ねばならぬ」といふ元來の意味を失なふ(第一と第二とを除いて)事を明らかに記憶しさへすれば、左まで困難にはあらざるなり。請ふ例を藉りて之れを辨明せん

第一　命　　令

命令にありて、mustは唯だ現在躰にのみ用ひらるゝと謂ふべし、然れども上にも一寸言へるが如く彼の面倒なる間接話法には其の過去可能法あるが故に茲に又た過去をも含入せざるを得ず。命令の意味に於てmustは積極的(ポジチーヴ)には日本語の「ねばならぬ」に當り、消極的(ネガチーヴ)には其の「……てはならぬ」或ひは俗語の「……ちやいけない」に當る。蓋し命令には「云々せよ」といふ正面的のものもあれば「云々する勿かれ」といふ反面的のものもあるなり。

其の例次ぎの如し

a. Present Tense (*Positive.*)

(1) You must go at once: 早速行かなくちや、いけない

(2) Tell him that I say he must stop it: 私が其れを止めろと云ふと、あの人に云へ

(3) You must obey me! 私の云ふことを聽かなければならぬよ！

(*Negative.*)

(4) You must not (*or* mustn't) hold the baby so: 赤ン坊を、そう抱いちや、いけない

(5) He mustn't think of going I say! 行くような考へもあつてはならぬと云ふのに！

(6) You must not disturb me just now: 今ま邪魔してはいけません

b. Past (*Indirect Narration.*)

(7) I told him he mustn't go: 行つてはならないと私は彼の人に云ふた

(8) He said I mustn't cry: 泣いてはいやと彼の人が僕に云ふた

(9) They said I must stay: とまらなければならぬと彼等が私に言ひつけた

命令は命令法 (Imperative mood) を以て表はさるゝこと一般の例なり。然れども命令法の代はりに must を用ふること亦た頗ぶる多し但し此の場合には I tell you とか I say とか云ふ句の一般に伴なふを常とす。實に must を用ひて命令を表はすは其の命令をして益々强からしむるなり。其の例次の如し

Direct Narration.

(1) Go, / You must go, } I tell you=行かなくてはならぬと云ふのに！

(2) I say you must not even think of such a thing そんな事は考へてもいけないよ

(3) I say you must!=なくてはならぬと云ふのに！

(4) You mustn't go with him=あの人と一所に行つてはいけない

(5) He mustn't let them go=あの人たちを行かせてはいけない

Indirect Narration.

(6) Father said I mustn't=そうしてはならぬとおやぢが云ひました

(7) He said I mustn't think badly of him=悪しからず思ふやうに願つた

(8) I told him he had to go, willy-nilly=いやでも行かなくちやならぬと僕はあの人に云つた

(9) He said I mustn't cay=泣くとわるいよとあの人が私に云ふた

第二　確乎たる意見(斷言)

Must の使用法の此部分は最も困難なるものゝ一なり、何となれば是れ ought 若くは should と甚はだ混じ易ければなり。然れども此等諸々の可能法助動詞の間には大ひなる差違あり。試みに下の章句に就て見よ

甲　He ought to come soon;

乙　He should come soon;

丙　He must come soon.

此の三者いづれも其の大意は「余は彼れが速かに來るを信ず」I believe he will come soon に外ならざれども、甲は更らに「彼れは來る筈なり」It is his duty to come との意を含む。乙は殆んど此れと同一なれども「彼れは必らずや來るべし」とて尙ほ一層特別に之れを言ふ人の意見を含示す。丙は(第一)「彼れは是非とも來らざるを得ず故に來るならん」There is necessity for his coming and he will therefore come を意味し或は (第二)「彼れは來るに相違なし」I positively believe he will come を意味す。乃ち此の意味に於て丙は日本語の「に相違ない」「にきまつて居る」「に違ひない」等に當り、或は「慥かに」「屹度」に當る。要するに丙卽ち must は確信、斷言をいひ表はすものと約言して可なり。其の例次の如し

Direct Narration.

(1) It must be more than eight=もー八時が過ぎたに違ひない

(2) It must be funny to live for a century=百年ほど生きると屹度おかしからう

(3) He must have forgotten it =忘れたんでしよう

(4) They must be happy=悦んで居るに相違ない

第三　必至、餘儀なき事 (Necessity)

此の部門に於ける must の使用法は較や容易なり。此の場合に於て must は現在に於けるものを除いては、實際の可能法の外に在り。特に注意せよ、既に述べたる如く I must have died の如き句は決して it was necessary for me to die! の意を含まず、此の句は假令ひ needs なる語の挿入せらるゝことありとも決して necessity と關係を有せず、これ恰かも日本語の「慥かに死んだのであらふ」に當る、而して needs (は副詞なり名詞にもあらず動詞にもあらず) を加入するも只だ單に日本語の「に相違ない」の如く其の意味を強むるに過ぎず。その例

Direct Narration.

(1) I must needs got to work now: もー仕事を始めなくてはならない

(2) It seems he had to leave unexpectedly: 突然出立せざるを得ざりし由

(3) Must you really go now? もー御歸りですか (此れは屢々よく言ふことなれば特に注意せよ)

(4) Had I to go, I should go; but I don't have to: 行かなければならぬならば行くが、行かなくてもよい

注意せよ、此の第四例に於て「なくてもよい」なる日本語は not have to と英譯すべく、又た need not とも譯するを得。されば吾人は次の如く云ふを得べし

a. I think he need not go.

b. I think he doesn't have to go.

此れ兩つながら日本語の「あの人が行かなくてもよいと私は思ふ」に當る

Indirect Narration.

(1) He says he has to be off now: もー歸らなくてはならないと云ふ

(2) I declared that I had not had to quarrel with him: 彼の人に喧嘩しなければならぬ樣の事は決して無かつたと私が云ふた

(3) He thought he must needs die.

此は大切なる例なり蓋し must needs 玆に *Necessity* 或は *Relief* を表はせばなり。卽ち下の如く之を解釋するを得

a. He thought he would have to die,

or *b.* He thought it would be necessary for him to die;

or *c.* He thought he would certainly die.

(4) He insisted that I must (*Past Tense!*) go: 行かなければならぬと私に云ひつけた

第四　丁寧慇懃なる意見 (Polite Belief)

鄭重なる意見を陳ぶる must の使用は、未來若くは過去の假定語句 (the future or Past Hypothetic) を以て正さしく日本語の「ぬぞ」に當る。されど斯くして用ひらるゝは日本語よりも英語に多し。例へば

a. 御邪魔さま

b. 御愁傷さま

c. 御苦勞さま

などの如き句に於て可能法の must を用ふること屢々なり、卽ち之れを英語にすれば次の如し

(*a*) I must have interrupted (your work *or* you).

(*b*) You must be greatly grieved (*or* in great grief.

(*c*) You must have taken much trouble.

されど同上の場合に於て又た次の如く云ふことをも得

(*a*) I fear I have interrupted you;

(*b*) Permit me to offer my sincere condolence;

(*c*) I fear that that I've given you very much trouble.

記憶せよ、斯かる禮儀的の句は英語に於て敢へて定まりたる形式あるにあらず、皆な其時の事情及び話者の感情如何によりて如何樣にも述ぶるなり。

第五 嘲笑、輕蔑 (Scorn *or* Contempt.)

此の部門に於ける must の使用は、恐らくは總ての中にて最も困難なるものなり。嚴密に言へば、此の使用法は正則の文法に叶はず、而して Thackeray 及び Dickens の如き大家にして折々之を用ふるとあれども、そは通俗の狃れ々々しき談話の一種類として然かするのみ。余が知るところに據れば、日本語にては must の此の使用法に正しく相當するものなし、是れ全く日本人の思想の方、言說の方と異なれるものなればなり。但し其意義は「自分で……せずには居られない」といふに在り。

冷笑輕蔑の意味に於て must は唯現在可能法 (Present Potential) にのみ用ひらる。而して間接話法 (Indirect Narration) に於ては勿論此の現在が過去可能法 (Past Potential) となるなり。

其の例

(1) Not satisfied with soiling my book, you *must* upset the ink as well. 私の本をよごしたばかりでなく、インキもこぼしたかれ

此の句に於て must なる語は嘲笑を表はすものにして、之れを分析し解剖するときは則ち下の如きの意味となる

As if not contented wish simply soiling my book, you *seem to have been compelled* (*by some evil desire, so to speak,*) to upset the ink also."

(2) What! You not only do not go to school, but *must* spend your time with evil associates! ひどい！學校へ行かねばかりでなく、惡い友達と遊ぶンだれ！

要するに、斯かる句に於ける must なる語は話者の方於て、對者卽ち話し掛けられたる人が「惡しき慾の誘惑によりり或ひは己れの性質の愚なるがために個樣々々の惡しき事柄を爲すやうに餘儀なくされたり」has been compelled (=must) to this or that bad thing, either by the prompting of some evil desire or owing to the stupidity of his nature といふ嘲笑的の意見を抱ける由を含むものと謂ふべし

尙次の例を案ぜよ

(1) You *must* not only look at the cake but eat it, eh? And you know I forbade your touching it! 菓子をながめるばかりでなく其れを食つたのかエ、其れにさわつてはならぬと云つて置いたのに！

(2) He cried not only for a new hat, but he *must* have a new suit! あの兒は新らしい帽子が欲しいと云ふばかりでなく新らしい着物が欲しいと云つて泣いたよ

(3) You *must* be idle, it seems! どーも君はなまけてるやうだね

(4) You not only forgot to deliver my message, but *must* also spend the whole day idly! お前は、わしが使命を忘れたばかりでなく終日なまけて居つたれ

約　　說

結論に臨んで、吾人は先づ第一に受動詞 (Passive Voice) の事に就いて一言すべし。日本語動詞の可能形は大抵受動形と同一なるが故に、此の兩者孰づれが言顯はされたるやを知ること往々困難なり。加之ならず、英語には受動詞に於ける可能もあるが、是れ日本語には殆んど譯し難きところなり。例へば、

容易すく殺されたらう

なる句は之れを

(1) He might easily have killed.

とも譯し得べく、或ひは之れを

(2) He might easily have been killed.

とも譯し得べし。其の孰づれが正しきやは全く事情の如何んに依る。此の第一のものは卽ち能動調 (Active Voice) なる可能法にして、第二のものは受動調の可能法なり。

又たOughtなる語に關して言はんに、此は實に本とoweなる動詞の過去なりしを今ま廢たりたるものなり。故に此語は最も近く日本語の「可し」に相ひ當るなり。

最後に、可能法は日本語にては用ひざる場合に英語にて之れを用ふること屢々あり。かくて

行いたのだろう

なる句の英譯は次ぎの數者の中孰づれにても可なり

(1) I think he went.

(2) I think he has gone.

(3) He may have gone. (Potential)

(4) He might have gone.

然れども英語にては此數者いづれも異なりたる意味あり。茲に知るべし、一の日本語の句も事情に依つて色々に譯せられ得ることを。

第三講

直接叙法及間接叙法
(Direct and Indirect Narration.)

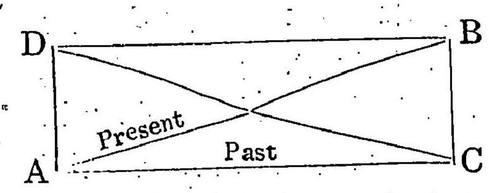
緒言

充分に英語に通曉するについて其途上に横はるところの困難を擧げ來れば、(日本學生より視て)間接叙事法を以て其の第一首位に置くも不當にあらざるべし。冠詞や——動詞の奇異なるインフレクションや——ムードや——テンスや、いづれも日本人に取つて六づかしからざるに非らず而して總べての中最も一般學生の難きを感ずるものは蓋し間接叙事法なり。是れ英米人は殆んど自然に之れを解するゆゑ説明の必要を感ぜざるならんが、日本人にあつては之に苦しむこと一方ならず。間接叙事法を知るには學者善く文典上の諸法則を心得居るを要す、殊とに總べての時制(テンセス)に關する知識を要し、而してまた諸代名詞(パーソナル、ポッセッシーヴ、及びデモンストラチーヴ)の區別差異を熟知せざるを得ず。去れば間接叙事法は英語の知識を試めすべき精神的の力業とも謂つべし。勿論間接叙事法にも日常普通の談話に用ひらるゝ左まで六づかしからざる一種あり、此れ直接叙事法 (Direct Narration) を用ゆればわざと無理に勉めたるやうにて餘り不自然に聞ふべき場合に、人々の自然に用ゆる直覺的(インチュイチーヴ)間接叙事法の類にして、過去に於ける自己の感情思想若くは言葉に係はる短き叙事に於て、或は

話者が簡短に他人の言を引用し他人の考を指示するときに殊に屢々用ひらるゝ所、即ち日本の俗語などにも常に之れ有るところなり。若し夫れ文學に於ては間接叙事法更らに幾層複雜なる多端なる形ちにて屢々見はる、之れを正しく用ゆるは亦た是れ英語固有の美を發揮するの道といふべし。斯く間接叙事法を正しく美はしく使用するは其の功主として拉丁の記者——殊とにヲーガスタス帝時代の修史官に歸すべきものにして、彼の有名なる史家 Livy (Titus Livius) の如きは實に此技の達人なり。降つて近代に及びマコーレーまた其の達人たり、小説家としてはサッカレーいと此技に巧者にして實に彼れが文の重もなる美の一は、其直接叙事より間接叙事に移り間接叙事より直接叙事に變ずる取扱方の巧妙なるに存すといふも可なるほどなり。

I. 定義

間接叙事法の何ものたるを解せんには先づ下の如く圖式を引くべし



Aは話者にして、Bは話し掛けられたる人とせよ。AよりBに達する線は現在の時即はちAが話しつゝある時を表はす。AよりCに達する直線は過去の時即はちAがCに話し(若しくはCと談じ)つゝありし時をあらはす。扨てAがCの言ひたる事若くは思ふたる事をBに語るとせよ——即は

ちAがCの言ひたる事若しくは思ふたる事を叙し (to narrate) 或は引用する (to quote) とせよ。之れを叙するに直接叙事を以てすること能はざるは前の圖式を見て明かなり、何となればAとCとの間の直線はBにまで至らざればなり、故にAとBとの斜線を通りてBに達せざるを得ず(Cの言ふたる事がAを經て行くことなれば)。左れば羅典にては間接叙事法を呼んで oratio obliqua=oblique speech といふ。蓋し斯くしてCの言がAの媒介を經てABなる斜線を通りBに達すればなり。若しCが自からBと語るなれば、其の言或は考はCとBとの直線を沿ふてゆくべし、乃はち間接叙事ならで直接叙事を用ひざるべからず。勿論文書に於ては引用符(クオーテーションマーク)一名 inverted comma (" ") を用ひてAがCの言を文字通りに引用することを得るなり。然れども普通の談話に於ては、引用符は見るべからざるが故に、Cの言をば其の用ひたる代名詞をも其儘存して文字通りに引用すれば、必らずゴチヤ々々になつてBをして其の解す可からざるに茫然自失せしむべし。今ま之れを例せんに第一、CがAに I am sick と言たりとせよ、扨てAが此事をBに語るに於て或はCの言を引用するに於て文章にては次の如くいふを得べし

I met Mr. C. to-day, and he said "I am sick."

然るに之れを聲出して讀めば如何に其の不都合に聞ゆるを見るべし。文章に於てはBたるもの直ちに、上の I am sick なる句に於けるIなる代名詞がAにかゝらずしてCにかゝることを知るべし、何となればAがCの言を文字通りに引用したる證據には引用符の在ればなり。然れども談話に於ては引用符復た見るべからざるが故に、Bは定めてIなる

代名詞を以てCにかゝらずしてAにかゝるものと思ふなるべし。實に文章に於てすらも引用符なくしては其の意味明瞭なる能はざるべし如下

I met Mr. C. to-day, and he said I am sick.

しかるに間接叙事と其の複雜なる法則の助けによりて、此の單純なる句も其の病めりといふはAなるかCなるか甚はだ明らかになるを得。先づCがAに對して、彼れ卽ちAが病めり(或は病氣らしく見ゆる)といふ事を言ひたるならばAが之を叙する次の如し

I met Mr. C. to-day, and he said *I was sick.*

此の句中のIは兩ながら之れを云ふ人自身卽ちAにかゝるものにして、he なる代名詞はC其人にかゝるなり、蓋しAよりいへば勿論己れ自からは第一人稱 (I) に、其の對者なるBは第二人稱 (you) にして、Cは則ち第三人稱 (he) なればなり。而かるに若し病める事がAにかゝらずしてCにかゝるものなるときはAは次の如くいふ可し

I met Mr. C. to-day, and he said *he was sick.*

此の句中一人稱の代名詞は言ふまでもなくAにかゝり二個の三人稱代名詞はCにかゝるなり。知るべし間接叙事法は他人の言ひたる事書きたる事考へたる事を正解するに大いなる助けとなる(殊とに通常の談話に於て)ものなることを

是に於て乎間接叙事法の定義については下の如くいふべきなり

間接叙事に於ては、記者(若しくは話者)親しく躬から語る。記者若しくは話者自身の外は何人もIたる能はず卽ち何人をも一人稱にて指す能はず。間接に叙したる章句は

記者が叙事中の一部分を成すなり、故に其の文法上の正否については記者自から其の責めに任ぜざるべからず。左れば必らずしも他人の云ふたる通りに其の文句を引用するを要せず、更らに之れを簡約にして、記者が最良と思ふまゝに其の意味を表はして可なり

第二に、上の圖式に於て、DがCに話したることをばAがBに語らんと欲するとせよ、かゝる複雜なる叙事は如何に引用符（“ ”）を用ゆるも之れを明らかにする能はざるなり。Dの言なりとしてCが直接若しくは間接に叙したることをAは是非とも間接的にBに語らざるを得ざるべし。而して是れまさに間接叙事法の助を以てするも尙ほ大ひなる混雜の起り易き處とす、何んとなれば英語にては三人稱の代名詞唯一あるのみなればなり。羅典語には二ツ之れ有り、近き he なる ‘*is*’ と遠き he なる ‘*ille*’ と是れなり、恰かも日本語の「それ」と「あれ」とに似たり。其は扨措き、AがBに次の如くいふとせよ

I met Mr. C. to-day and he told me that D said he was sick.

此の句は二樣に意味すべし、第一 D は C が病めりと云ひたりとも見るべく、第二 Dが己れ自から病めりと云ひたりとも見るべし。此の混雜は此の句に二個の三人稱ありて、初めの he なる代名詞は C を指すものならざる可からざれども（他に三人稱の先行詞なきゆゑに）、後の he なる代名詞は CかDか孰れをも指すを得る（二者ともに三人稱の先行詞なるゆゑに）に由るなり。然れども此の困難は其の疑はしき代名詞の後に直ちに其れが代表する人の名を繰返せば避け得らるゝこと多し。文書に於ては一般に此の註明

を下の如く括弧の中に入るゝなり

(1) I met Mr. C. to-day and he told me that D said he (C) was sick,

i.e. D has told C that he (C) looks sick.

(2) I met Mr. C. to-day and he told me that D said he (D) was sick,

i.e. D has told C that he himself is sick.

最後に、こゝに又更らに他の間接叙事法あり、此の第三種は間接叙事中最も屢々あるところのものなり。

其の何ものたるを例示せんに、件の圖に於てACの線はA自身が過去のときに云ひ若しくは考へたるものを表はすとせよ。其時にAは直接に云ひ若しくは考へたるなり、換言すれば、己れの言若しくは考をあらはすに「現在」もしくは「未來」を用ひたるなり。扨て今まAは己れが過去（件の圖に於けるACの線）に於て言ひ若しくは考へたることをば現在（圖に於けるAB）に於てBに語らんとす。ACの時に現在（或は未來）なりしものがABの時に現在（或は未來）なる能はざるや明らけし。去れば英語にありては（否な歐洲各國の國語にありては一般に）、ACのとき卽はち過去に用ひたると同一の時制をばABのとき卽はち現在に用ゆるを以て論理に叶はずとなすなり。されど日本語に於ては然らず、日本語は斯かる場合にも時制に變動あらざるなり。惟ふに英語の如くする方論理に叶へるものなるべけれ。勿論Aにして己れが過去にいひしことを其の言葉通りに引用せんと欲せば爾かなし得べし、然れども談話に於て引用符の見るべきものあるに非らずんば、其の「現在」が果して實際の現在を表はせるか否か、若しくは其れがAの

叙事として過去を表はせるか否かを判すること甚はだ難かるべきなり、而して談話の際に見らるべき引用符なるものは未だ發明せられざるを奈何んせん。

此の點は充分明白にせざるべからずして日本の學生たるもの明らかに瞭解せざる可からざるところなり。請ふ一例を擧げて之れを説明せん。今日卽ち二月二十八日にA氏がいたく病むとせよ、彼れ自から死するならんと思ふほど其の病篤しとせよ、之れを直接にいへば

A thinks to himself, "I shall die."

なり。然れどもA快復して他日(假令へば三月十五日)其病氣のことを友人に語るとせよ、二月二十八日に於て己れの思ふたる所を語るに、On that day I thought I.....何といふべき乎、shall die とはいふと能はず、何んとなれば二月二十八日の「未來」は三月十五日に於て最早未來にあらざればなり。Aは復た病氣にて死するならんと思はず、何んとなれば既に快復したればなり。是故に彼れは論理上 On that day I thought I *shall* die. とは云ふ能はず。こゝに於て乎動詞のインフレクション其の助けとして來る。乃ち實際的にいへば should は shall の過去形なり。故にAは

On that day I thought *I should die.* と云ふ、斯くて此の I should die の三語は謂はゞ一種の Past Future とも稱しつべきものにて、兎に角是れ二月二十八日に於て己れの思ふたることは未來の考なりしも今や其時は過去となつて逝けりといふの意を表はすなり

然り而して日本語に於ても(英語のとは異なりたる仕方にて)此場合には一種の間接叙事の用ひらる可きを見るべし。二月二十八日にAは「今日は死ぬだらう」と思ふとせん、而かも日本語にありても若しAが病ひ快復したる後ち三月十五日に己れの病氣を問ふて吳れたる友人と語るに臨んで此れを言通葉りに引用して「今日は死ぬだらうと思つた」といはゞおかしく聞ゆるならん。乃ち其れより寧ろ「あの日には死ぬかと思つた」と云ふにあらずや。玆に於てか英語と同じく二個の變化の生ぜるを見る、第一「今日」(to-day) なる語は「あの日」(that day) となり第二「死ぬだらう」(shall die) なる動詞形は「死ぬか」(should die) となれり。蓋し英和ともに、當時の思をば直接的に傳へずして間接的に告ぐるなればなり。

II 應用

以上説くところにより間接叙事には實際唯だ二個の種類あるとを見るべし、第一は話説者が他人の言若しくは考を引用するもの第二は話者自から自己の書きたる事思ふたる事を叙するもの、是れなり。然れども此の二者の間には最も重要なる差異の存するとを注意せざるべからず、乃ち第一の場合に就ては話説者が他人の現在若しくは過去の言、考を引用するを得れども、第二の場合に於ては話者唯だ自己の過去の言、考を引用するを得るのみなり。これ何故ぞ、他なし、現在に就ては話者現實に自己の現在の言を叙しつゝあるが故に論理上間接叙事を成す得べからざればなり。

會話を報告するには長短を問はず一般に直接叙事を用ふるに加かず。いろ々々の人がなしたる短き談話の相連續したるものを引用する時の如きは皆これを直接に叙するを常とす。

話說者が兩人とも男にてある場合、或ひは甲の男が乙の男のことを語る場合に於ては殊どに然るなり、話者兩つながら女にてある場合、或は甲の女が乙の女のことを話す場合に於ても亦た然り。若し斯かる場合に間接叙事を用ひなば混雜を來たすことを免れざるべし、何となれば前にも既に云ひたるが如く三人稱の代名詞は唯だ一あるのみなればなり。

一寸としたる評言或ひは說、殊とに自己の評言或ひは說を叙するには大抵間接叙事を用ふ。要するに、叙事者が其の報告する談話を正さしく言葉通りに記憶し居らざる場合、若しくは其の言葉が餘り長くして其通りに傳ふるを得ざる場合、若しくは叙事者に於て其言葉を改め修正し得べき場合に於ては間接叙事を用ふるこそ宜けれ。抑も間接叙事の使用は之れを用ふる人が教育あることの一證たり、之を巧みに用ゐるには直接叙事よりも多くの思考を要す乃ち善く之れを用ゆるは以て其の腦髓の順整なることを示すものなり。

然り而して唯々單に他人の言を引用するには必ずしも間接叙事を用ゐるを要せず。詩歌を引用し若しくは大文人大辯士の言を引證するが如きときに於ては必らず直接に之れを引くを常とす、卽ぱち言葉を換へて之れをいへば、叙事者自ら其引證する記者演者と同化(アッシミレート)するなり。心理學的に言へば、叙事者自から件んの記者演者の天才精神を吾がものと爲して(その當時暫らくの間)全く其人と同一になるなり。斯かる場合には毫も法(ムード)を變じ時(テンス)を變ずるの必要あらず、他なし叙事者と其の引用したる言を發せる本人と玆に同一人となりたればなり。げにや英語國民(イングリシュスピーキングピープル)は如何なる場合

に直接叙事を用ひ如何なる場合に間接叙事を用ふべきかといふことをば宛ながら本能的直覺的(インチユイチーヴリー)に知るが如く見ゆるなり。

且つ注意せよ、他人の述べたる常住不變の事實(時に拘はらずして、いつまで經ても渝はりなく眞となる普遍の事實)を引用するに於てもテンス若くはムードに變化なきなり。

Knowing and teaching that *knowledge is power*, Plato was an ardent student to end of his life.

是れ實際間接叙事にして而してプレートーの過去の言を引用するなり、然かもプレトーの述べたる "Knowledge is power" てふ格言は古今に通じて變らざる常住普遍の眞理にして如何なる時にも應用せらるべきものなるが故に、引叙せる言も依然現在 (is) なるなり。

一寸としたる言、短かき一片の告白、簡短なる返事などを叙するには間接叙事を用ゐるに如かずして、さる場合に直接叙事を用ゆれば何となく其の調子の子供らしきを免がれざるべし。然るに日本語にては斯かる場合にも猶ほ、他人の言を引くと話者自己の考を引用するとに論なく、多くは直接叙事を用ゆるなり。例へば

Then he declared that he could not understand it at all.

を直接叙事に直ほしてみよ

Then he declared, "I cannot understand it at all."

是れ餘り小供らしくしておかし。去れど邦文に於ては之れを直接的に

此に於て彼れは曰へり「余は毫も之れを解する能はず」といふこと通例なり。英語にて間接的に

He said he would be back by Sunday.

といふもの、日本語にては則ち其の友人の言ひたる通りの詞を繰返へして

「日曜日までに(私は)歸る」と(彼人は)云ひました

=He said that: "I shall be back by Sunday."

といふ

「十二時に出るから車の支度をして置け」と左樣彌吉に云ひつけてお呉れ

の如きも、英語にては寧ろ

Tell Yakichi to get *jinrikisha* ready for me at twelve o'clock.

と間接に叙す可きなり。日本の召使ならんには

「是非に御目にかゝりたい」と主人が申しました

といふところ、英人なる召使は

My master told me to tell you, Sir, that he particularly wishes to see you.

と云ふべし

「御大事になされませ」と仰しやつて下さい

の如きも英語に翻へすに當りては間接叙事を用ひて

Please be so kind as tell him to take great care of himself.

とすること宜けれ

蓋し英語に於けるが如く間接叙事法の使用について人稱(パーソン)や法(ムード)や時制(テンス)に變動を生ずることは日本語には之れあらず、而して以上の場合の如き、日本語にて此れを間接叙事にするは唯だ「…の旨」「…の由」「…といふこと」「やうに」「さう」などの言葉を使用するにあるのみなるを見るべし、次の如し

必らず來るべき旨往いて告げよ=Go and tell him to be sure to come.

來るやうに言つたが、むかうでどうしても來られぬさうです=I told him to come; but he said it was absolutely impossible for him to do so.

III. 法　　則

(A) 通　　則

一　間接叙事に於ては萬づ皆な一に其の先導動詞(イントロダクトリー、ヴァーブ)の時制(テンス)(現在にせよ過去(パスト)にせよ現在完了(プレゼントパーフエクト)にせよ)の如何に繫る。I say, I said, I have said の如き若しくは I think, I thought, I have thought の如き是れなり。

二　間接叙事に於ては引用符(" ")存せず、若し之れ有らば是れ其の叙事引證は間接にあらずして直接なり。下の如し。

Direct:—"I should like to go," said he.

Indirect:—He said he would like to go.

Direct:—"I fear no man," he replied.

Indirect:—He replied that he feared no man.

但し注意せよ、間接叙事を用ふるに於ても間々引用符を存することあり、是れ其の言をば叙事者自からの言ふ所ろとせず他人の言ふところとして讀者の注意を惹かしめ

んが爲めにして、卽はち此れは他人の言なるぞといふことを殊更らに切に表はさんとするに在るなり、此の形式は直接叙事體と間接叙事體の中間に位するものと謂ふべし。スケッチ、ブックなる「リップ、ヴアン、ウヰンクル」の中に其の適例あり、The orator bustled up to him and.....inquired "*on which side he voted.*" Another short but busy little fellow.....inquired in his ear "*whether he was Federal or Democrat?*" これ兩者いづれも間接叙事なるに引用符を施こしたるものにして、其の引用符の中なる句は則ち「汝は何づれの方に投票する乎」「汝はフェデラル黨なる乎、デモクラット黨なる乎」との意なり

三 直接叙事にあつては引用符の中に包まれたる章句の前に於て其の先導動詞(イントロダクトリー、ヴアーブ)の後に「コムマ」もしくは「コロン」伴隨するなり、例へば

He said, "I think that is true."

Mary looked pale and said: "Father is so sick that he will not recover."

然るに間接叙事に於ては、此の「コムマ」もしくは「コロン」の代はりに、日本語の「…との旨を」「といふことを」に相當する that なる語を以てす、其例下の如し

Direct:—"What is that?" she asked.

Indirect:—She asked what that was.

Direct:—He said: "I'll do it anyhow."

Indirect:—He said *that* he would do it anyhow.

Direct:—"It is," said he, "far from here."

Indirect:—He said *that* it was far from {here / there}.*

*此の場合に於て here を用ゐるか there を用ゐるかは此の章句を引叙しつゝある話者其人の位地如何に繫かる。乃ち彼の前に掲示したる圖式に據りて云はんに、若しAがCの言ひたることをBに語りつゝあるならば、而してCの言に於ける here にして若しAがCの言を引叙しつゝある時に居るところの場所と一致するならば、則はち勿論 here を用ゐるを正當とす。然れども若しAが他の場所に居るならば—卽ちCの其の言をなしたるときにCの居りたる處に居らぬならば、there を用ゐざるべからず。日本語に於ても同樣なり

Direct:—He said, "I fear it will rain."

Indirect:—He said *that* he feared it would rain,

—or, more simply, *He feared it would rain.*

附言 間接叙事に於て、直接叙事の「コムマ」もしくは「コロン」の代はりなる that なる語必らずしも挿入するを要せず、此語を省ぶくこと件々之れあり、殊とに俗話上(colloquial)の英語に於て然り、斯く俗話用の英語に於ては凡べて章句を引用するに意味に差支へなき限りは成るべく丈け簡短に之れを引用するなり、是れ何人もよく知らるゝところなるべし。蓋し談話用の英語にては常に「時は錢なり」との金言を實行して可及的時間を儉約するやうに簡短を旨とするなり、日本語の「左樣しではいけません」といふをば急ぎの折りなどに「そうしちやいかん」と縮めていふが如きも其の一例にあらずや。

四 若し先導動詞(イントロダクトリー、ヴアーブ)が過去(パスト)にてある(通例大底然り)ときは其叙事中にある動詞も皆過去形に變ず

但し其の過去完了(パスト、パーフエクト)は依然とし

て變はることなし、蓋し過去の意味にては過去完了が終局にして、其れよりも以上に進む形式は無ければなり

間接叙事に於ける時制(テンセス)の變化は下表の如し

直接叙事		間接叙事	
Present	は	Past	となり
Past	は	Past Perfect	となり
Future	は	Conditional or Potential となる、卽はち shall は should となり、will は would となる（但し此等は叙事中の人稱如何に繫るものにして尙ほ頓がて次に至つて詳述すべし）	
Present Perfect	は	Past Parfect	となり
Past Perfect	は	其儘	
Future Perfect	は	Conditional or Potential Past	となる

以上の例

《イ》 現在(プレゼント)變じて過去(パスト)となるの例

Direct:—"I am very sorry," he answered.

Indirect:—He answered that he *was* very sorry.

Direct:—"I don't think you are right," said he.

此場合の he を Cとし you を A と假定せよ、A が Cの述ぶるところをBに語るや次の如し

Indirect:—He (C) told me (A) that he *did* not think I (A) was right.

（勿論此の括弧の中なる頭文字は述べらるゝものにあらず、Bは此れなきも能く意味を解じ得るなり）

《ロ》 過去(パスト)變じて過去完了(パーフェクト)となるの例

Direct:—"I *came* back a month ago," said he.

Indirect:—He said that he *had come* back a month ago.

Direct:—"I *saw* him," said Robert, "last year."

Indirect:—Robert said that he *had seen* him last year.

《ハ》 未來(フューチュアー)變じて設若的(コンヂショナル)若くは可能的(ポテンシアル)となるの例

Direct:—He said, "It will rain."

Indirect:—He said (that) it would rain.

Direct:—C says to A, "I think you will not fail to succeed."

Aが此言をBに告ぐるや次の如し

Indirect:—C said that he thought *I should* (or *would*) *not fail* to succeed.

これを直接叙事を用ひてのべんことは能はざるべし何となれば代名詞に於て必らず混亂を惹起すを免かれざればなり、試みにAが直接叙事にて C said, "I think you will not fail to succeed." とBに告ぐるとせよ、Bは則はち此の章句に於ける二人稱代名詞が己れに係かるにあらずAにかゝるものにてあることを解する能はざるべし、却つて彼れは此代名詞を以て己れを指すものと惟ふなるべし、故に之を叙するには間接叙事を用ひて、He thought I should not fail to succeed. といふより外正しき形式あらざるなり

Direct:—"Will that man go?" asked he.

Indirect:—He asked if that man would go (or was going.)

Direct:—C asks A, "Shall you return soon?"

Aが此言をBに語るや下の如くならざる可らず

Indirect:—C asked me *if I would go.*

即ち直接叙事體の shall が之れを間接叙事體に翻へすに方りて would となりたるなり、是れ何故ぞ、Cがこれを問ふに於てはAは二人稱にて話掛けられたるものなれども、Aが此言をBに傳ふるに於てはAは一人稱なればなり

尙ほ一つ此の重要なる變化の例を示さんに

Direct:—C says to A, "You will regret having deceived me."

Aが此言をBに傳ふるや次の如くいはざる可らず

Indirect:—C told me that I *should* regret having deceived him.

即はち直接叙事の will が之れを間接叙事に飜へすに及んで should となりたる（Aの人稱が變化したるの故を以て）なり

《ニ》 現在完了（プレゼント、パーフエクト）變じて過去完了となるの例

Direct:—"I *have* just *come,*" said he.

Indirect:—He said that he *had* just *come.*

Direct:—She replied: "I *have* not yet visited Ōsaka."

Indirect:—She replied that she *had* not yet *visited* Ōsaka.

Direct:—"*Has* any one *called* to see me during my absence?" asked he.

Indirect:—He asked if any one *had called* to see him during his absence.

《ホ》 過去完了（パスト、パーフエクト）其儘なるの例

Direct:—"I *had not finished* writing then," said he.

Indirect:—He said that he *had not finished* writing at that time.

Direct:—C says to A, "I *had expected* to see you before that time."

Aが此れをBに傳ふるや下の如し

Indirect:—He (C) said that he *had expected* to see me before that time.

《ヘ》 未來完了（フューチュアー、パーフエクト）變じて過去の設若的若しくは可能的となるの例

Direct:—"That prisoner *will have had* plenty of time to repent before he gets out of gaol," said the turnkey.

Indirect:—The turnkey said (that) that prisoner would have had plenty of time to repent before he (the prisoner) got out of gaol.

此場合に於て間接叙事には斯く the prisoner なる語を括弧内に挿入するに如かず、然らずんば he なる代名詞は the prisoner よりも寧ろ the turnkey を指すものと見做さるゝの恐れあればなり。

五 若し先導動詞（イントロダクトリー、ヴアーブ）が過去にてあるときは、間接叙事の總べての動詞、其の設若法（コンヂショナル）或は可能法（ポテンシアル）に於けるものも、接續法（サブジャンクチーヴ）に於けるものと共に皆な過去の形を冒かすなり、即ち

直接叙事		間接叙事	
May	は	Might	となり
Can	は	Could	
Must	は	Must 或は Had to	
Shall	は	Should	
Will	は	Would	となる
Should	は	其儘 Should	
Would	は	其儘 Would	
Ought	は	其儘 Ought	

上の例

《イ》 May 變じて Might となるの例

Direct:—I said to him: "You *may* go."

Indirect:—I said to him that he *might* go. 或は I told him he might go とするを更に良しとす

Direct:—"It *may* rain," said he.

Indirect:—He said (that) it *might* rain.

Direct:—"*May* I go?" asked he.

Indirect:—He asked if he might go.

《ロ》 Can 變じて Could となるの例

Direct:—"Can it be possible that he is sick?" inquired he.

Indirect:—He inquired if it could be possible that that man was sick.

注意せよ此の場合に於て、直接叙事に於ける三人稱の代名詞は、之れを間接叙事に翻へすに當つて that man となる、是れ何故ぞ、他なし、爾かせざれば此の間接叙事を聞く者或は第二の he を以て第一の he と同一人なりと誤解し大ひなる混亂を惹起すことあるべければなり

Direct:—A thinks: "I wonder if I *can* ever learn English thoroughly?"

Indirect:—In repeating these words at a later date, A says, "I wondered if I could ever learn English thoroughly."

Direct:—He said, "I can speak three languages!"

Indirect:—He said that he could speak three languages.

《ハ》 Must が Must 或は Had to となるの例

直接叙事にも間接叙事にも must の重出するを以て、此の第五則に反するものと思ふべからず。此の二個ともに同一に綴られ同一に見ゆれども、間接叙事にある must は其の實、一の過去なり。アングロサクソン語及び古英語にあつては must なる動詞の現在と過去との間に區別存したりしが、Chaucer の時より以來二者ともに同一に綴らるゝことゝなりたるなり。乃はち二者ともに綴りは同一なりと雖ども、間接叙事に於ける must は、現在なる must とは全く別にして、之れを實際の過去と見做さゞるべからず

Direct:—He said: "I must go." 此の must は現在なり

Indirect:—He said (that) he must go. 此の must は過去なり。こは間接叙事にては must といふ代はりに had to といひ得るにても知らるべし、即はち He said he *had* to go.

此の had は勿論 have の過去なり

Direct:—A thinks: "I think I *shall have to* go."

Indirect:—A repeats later: "I thought I *should have to* go."

Direct;—"I *must* drink this medicine," said he.

Indirect:—He said he *had to* drink that medicine.

斯く直接叙事の this は之れを間接叙事に翻へすに至つて that となりたるが、こは若しCの言へる其の藥にしてAがCの言をBに傳ふる（卽はち間接に叙する）ときにAと同じ場所にあるか若しくは其近くにあるならば this にても可なるなり

《ニ》 Shall 變じて Should となるの例

こゝの shall は未來を意味する單純なる shall にはあらずして命令を表はすものと知るべし

Direct:—C says to A: "You *shall* go."

Indirect:—A tells B: "C said (that) I *should* go."

《ホ》 Will 變じて Would となるの例

こゝの Will は未來を意味する單純なる will にあらずして決心若しくは固執を表はすものと知るべし

Direct:—He said: "I will go, no matter what people think."

Indirect:—He said (that) he *would* go, no matter what people thought.

《ヘ》 Should, Would 及び Ought が變ぜずして其儘なるの例

此等が變ぜずに其儘なる所以は他なし、此等の語は直接叙事に於て既に少なくとも形式上に過去なればなり（意味の上に於ては往々然らざれども）。其の形式にして過去なる限りは、間接叙事の法則に反せるにあらず。記憶せよ should 及び would は實際 shall 及び will の過去形にして、而して ought は owe なる動詞の過去（今は廢語に歸したる）なり

Direct:—C says to A: "You *should* not do so."

Indirect:—A repeats to B: "He said I *should* not do so."

Direct:—I think perhaps I *should* go（行つた方がよいかも知れぬ）, but I don't want to (go).

Indirect:—I thought perhaps I *should* go, but I didn't want to (do so).

Direct:—He said: "I *would* do anything for that gentleman."

Indirect:—He said that he *would* do anything for that gentleman.

Direct:—He cried: "I *should* like it, but I can't do as I *would*."

Indirect:—He cried that he *would* like it, but that he could not do as he *would*.

Direct:—"I think I *ought* to know that," said he.

Indirect:—He said he thought he *ought* to know that.

注意せよ此の最後の例に於ては簡潔を旨とするが爲めに said 及び thought の後に that なる語が畧しあるなり

Direct:—I think I *ought* to be more diligent.

Indirect:—I thought I *ought* to be more diligent.

六 叙事の先導となる章句 (Introductory Sentence or Sentences) に於て先行詞 (Antecedent) が一人稱もしくは二人稱もしくは三人稱いづれかにてあるときは、叙述の部に於ける總べての代名詞も皆なそれと同一人稱ならざるべからず。

此の法則は之れを英語に應用しても日本語に應用しても至つて簡單なるものなるが、今ま之れを充分明解せんには復た遡つて定義の冒頭に示したる彼の圖式に據らざるを得ず。乃ちCがBのことに就いて何かAに語るとせよ、此の場合に於て話者なるCは一人稱ならざるべからず、而して話し掛けられたるAは二人稱にして、己れがことを語られたるBは三人稱なり。扨てAがCの言をBに報告すればAは一人稱Iとなり、Bは二人稱 you となり、Cは三人稱 he となる。例へばCがAに下の如く言へりと假定せよ。

"I (*C*) don't think he (*B*) is a very diligent student. I see him more often out walking with his friends than studying his book. I know you (*A*) are a friend of his, so I shall not say anything more than that."

今ま Aが此言をBに報ずるや下の如く曰ふ。

"*C* told me (*A*) that he (*C*) didn't think you (*B*) were a very diligent student. He said he saw you more often out walking with your friends than studying your books. He concluded by saying that he would not say anything more than that, for he knew that I were a friend of yours."

この例によりて見るべしC told me なる先導章句に於てCは三人稱となり、A (me) は話者として一人稱となることを。是故に報告叙事(リポーテッド スピーチ)の如何なる部分に在りてもCは依然三人稱、Aは一人稱として存し、而してBは話し掛けられたる人として必らずや二人稱たるなり。今ま上の例を日本語に反しみよ以て同一法則が英和兩つながらに當箝まるを見るべし。AはBに告げて曰く「C君が、あなたは餘まり勉强家でもない書物を勉强することが友達と遊ぶことよりも少ないと云ひました、シテあなたは僕のよく知つて居る方だからモッとひどい事を言はずに置くとサ」。

(B) 疑問章句に關する法則

短かき疑問章句 (Interrogative Sentences) は之れを間接叙事に化成すること決して難からず、若しそれ疑問章句が引抄言 (quotation) の中間にあるときには稍や難しと雖も、讀者にして既に通則の章を述べたるところを充分に會得せば此場合に於ても之れを解すること容易ならん

一 間接に叙せる疑問章句に於ては一般に疑問符(インターロゲーション、マーク)省略せられ、其の代はりに whether もしくは if なる語を以てす。且つ疑問の事實を顯はすに asked, inquired, wished to know, questioned, doubted などの如き先導動詞を以てす、乃はち whether もしくは if なる語は其の先導動詞の後に伴はるべからず。

上の例

Direct:—C says to (asks) A: "Have you eaten your dinner?"

Indirect:—A reports to B, "*C asked me whether* (or *if*) I had eaten my dinner.

Direct:—C asks A, "Have you seen B recently? I hope he is well."

Indirect:—A reports:—C *asked me if* I had seen you recently. *He said* he hoped you were well.

此の例はCが初めは Have you seen B recently? といふ一疑問を發し次いで I hope he is well. といふ一陳述をなしたることを示す、其の疑問は if の伴ふたる asked てふ動詞に先導せられ、其の陳述は (he) ssid なる先導動詞によつて表はさるゝなり。

Direct:—I asked: "May I go?"

Indirect:—I asked *if I might* go.

Direct:—"Are you not citizens of one country, speaking one tongue?"

Indirect:—He asked *if* they *were* not citizens of one country, speaking one tongue.

Direct:—"Wouldn't it be too much to say that English may be learned in one year?"

Indirect:—He inquired *whether* it wouldn't be too much to say that English *might* be learned in one year.

二 若し直接叙事に於ける原の疑問中に何か疑問的の詞あらば、間接叙事の疑問に於て先導動詞の後に whether 若しくは if なる語を置くを要せず

上の例

Direct:—"*What* is the matter?" he inquired.

Indirect:—He inquired *what* the matter was.

Direct:—"*Who* is knocking at the gate?" said the master.

Indirect:—The master asked *who* was knocking at the gate.

Direct:—"*Which* of those ladies do you admire the most?" asked he with a smile.

Indirect:—He asked, with a smile (or better, *smilingly*), *which* of those ladies I admired the most.

Direct:—"*How* far is it from here to Shimbashi?" said Miyazaki.

Indirect:—Miyazaki asked *how* far it was from {here / there} to Shimbashi.

Direct:—"*When* do you expect your father to return?" said John to James.

Indirect:—John asked James *when* he expected his (James's) father to return.

此の最後の例は之れを書く場合には (James's) てふ括弧を挿入するを宜しとす、三人稱の二個の代名詞の混亂を避けんとてなり

三 直接叙事にて主格 (subject or nominative) が動詞の後に伴ふときは、之れを間接叙事に翻へすに方りて主格が動詞の前に立つことゝなる

但し若し間接叙事に於て原の疑問形を其儘に存せば(第五則を見よ)動詞と主格との次第に變化なし

其の例

Direct:—(2) "Will (1) you go with me?" asked he.

Indirect:—He asked if (1) I (2) would go with him.

Direct:—(2) "Has (1) he come back yet?"

Indirect:—He inquired if[1] he[2] had come back yet.

Direct:—[2] "Are [1] you sure it is not raining?"

Indirect:—He wished to know if [1] I {[2] was / were} sure it was not raining.

四 直接叙事に、affirmative interrogation (……せざるかと問はずして……するかと問ふもの) に於ける do 若しくは did なる助動詞あらば、間接叙事にては此の助動詞を省く

上の例

Direct:—"*Did* you go there?" he asked.

Indirect:—He asked if I had gone there.

Direct:—"How *do* you do?" said he.

Indirect:—He inquired how I did.

Direct:—"*Do* you know that man?"

Indirect:—He asked if I knew that man.

但し注意せよ negative interrogation (……せぬかと問ふもの) にてあるときは間接叙事に於ても此の助動詞を存するなり

其の例

Direct:—"*Don't* you think it is pretty?" said he.

Indirect:—He asked if *I did not* think it was pretty.

Direct:—"*Don't* you like *o sashimi*?"

Indirect:—He wanted to know if I *did not* like *o sashimi*.

五 疑問章句が quotation or reported speech の中頃又は終にあるときは、原の疑問形を存して唯々其の時 (テンス) と人稱 (パーソン) とのみを變ずるを常例とす

其の例

Direct:—"I have something particular to say to you," said Sir John to my father. "*Will you kindly come into the house for a few minutes?* I will tell it you there."

Indirect:—Sir John informed my father that he had something particular to say to him. *Would he kindly come into the house for a few minute?* He would tell it him there.

Direct:—"You are the children of the greatest of great cities," said Hannibal to his soldiers. "*What have you to fear of Rome? Are you not as brave as the Romans?*"

Indirect:—Hannibal told his soldiers that they were the children of the greatest of great cities. *What had they to fear of Rome? Were they not as brave as the Romans?*

(C) 命令章句に關する規則

一 命令章句 (Imperative sentence) を間接的に言表はすには先導動詞の挿入 (若し原の直接叙事に先導動詞がなくば) を以てす、卽はち其の先導動詞は bade, ordered, told, commanded, 及び asked (begging 或は requesting の意味なる) なり。而して直接的の命令章句は又た不定法 (Infinitive mood) にも變ず卽はち其の不定法は先導動詞の直ぐ次に伴隨するものなり

此規則を今一層手短かに簡單に言顯はせば曰く、直接

叙事の命令法は間接叙事に於て不定法となる（命令を表はす或る動詞これが先行となりて）。

此規則と疑問章句に關する第一則とを比較するに、命令章句の叫號符 (Exclamationmark) は間接叙事に於て to なる語となるなり。記憶に便ならしめん爲め比較上次に三大區別を設く

（イ）一般の陳述に於ては、之れを間接叙事に飜へすに方りて、其の先導動詞の次に伴隨するコムマ若しくはコロンが that なる語となる

（ロ）疑問章句に於ては、其尾にある疑問符が whether 或は if なる語となる、而して此等の語は先導となる疑問的動詞の直ぐ次に置かざるべからず

（ハ）命令章句に於ては、其の尾にある叫號符が to なる語となる、而して此語は先導となる命令的動詞の次ぎに置かざるべからず

上記第一則の例

Direct:—"*Tell* the servant to wait while I write an answer."

Indirect:—He told me *to tell* the servant to wait while he wrote an answer.

Direct:—C says to A: "*Give* my compliments to your father."

Indirect:—A reports: "C told/asked me *to give* his compliments to my father."

Direct:—"*Take* care of yourself, and *let me hear* from you whenever you have time to write," says C to A.

Indirect:—A reports: "C told me *to take* care of myself and *to let him hear* from me whenever I had time to write."

Direct:—"*Leave* the house at once!"

Indirect:—He ordered him *to leave* the house at once.

Direct:—"*Wish* me joy, mother, for having won the finest lady that ever walked the earth!"

Indirect:—He asked his mother *to wish* him joy for having won the finest lady that ever walked the earth.

Direct:—"Do as I tell you!" cried he angrily.

Indirect:—He angrily commanded (bade) me *to do* as he told me.

二 されど若し命令法に於ける動詞が、quotation =卽はち間接に叙せられたる speech の央ばにあるときは、該命令詞をば let てふ語を以ての句（フレーズ）に變ずるを常とす

其の例

Direct:—"I am sorry to keep you waiting, but I'm very busy. *Wait* a little longer, please."

Indirect:—He said he was sorry to keep him waiting, he was very busy. Please *let him wait* a little longer.

Direct:—"Florence is not quite well," she replied, "and will not come down. *Wait* a while and you shall be told."

Indirect:—She replied that Florence was not

quite well and would not come down. *Let him waite* awhile and he should be told.

(D) 咏嘆章句に關する規則

咏嘆章句 (exclamatory sentence) は之れを文字通りにて間接叙事に飜へすこと能はず。間接叙事に於ては咏嘆の辭は省かざるを得ず。或は形を變ずると同時に之れに當るところの意味を表はす句を以てこれを間接にせざるべからず

其の例

Direct:—"Oh," said he, "I am severely hurt!"

Indirect:—He *cried out that* he was severely hurt.

Direct:—"Why, I have never heard of such a thing!"

Indirect:—He *exclaimed that* he had never heard of such a thing.

V. 備　　考

第一、直接叙事に用ゐたる語にして之れを間接叙事に用ゐるに於ては變化を受くるもの甚はだ多し。代名詞が勿論變化することは既に述べたり。然れども此等代名詞の外。種々の時之副詞 (adverbs of time) 場所之副詞 (adverbs of place) もまた變化を受くるなり。

卽はちA若しCが過去に言ひたることを現在に報告するならば、Cの用ひたる時之副詞をAは用ゐること能はず、何となれば時相ひ異なればなり。これと同じくA若しCが

甲の場所にて言ひたることをば乙の場所にて報告せんには勿論場所之副詞變ぜざるを得ず、然らざれば聽く者、今ま話しつゝあるAが今ま在る場所は則ちCのいへる場所なりと想ふべければなり

此等の副詞の重もなるものは次の如し

直接叙事		間接叙事
Now	は	then となり
To-day	は	that day (勿論Cのなしたる言がAの之れを報告する日と同一なるにあらざれば) となり
Yesterday	は	the day before 或は the previous day となり
To-morrow	は	the next day 或は following day となり
Last	は	previous (勿論 Cのなしたる言がAの之れを報告する場所と同一なるにあらざれば) となり
Last night	は	the previous night 或は the night before (前同斷) となり
This	は	that となり
Here	は	there (勿論 Cのなしたる言をば始め Cの之れを發したる場所と同一處にてAが語るにあらざれば) となる
Hence	は	thence
Hither	は	thither

此等の變化は既に毎々例示したれば今ま下に其の數例を擧げて已まん

Direct:—"I shall go *hence to-morrow.*"

Indirect:—He said he would go *thence the next day.*

Direct:—C says to A, "I saw B *yesterday.*"

Indirect:—A reports to B, *on another day,* "C said that he had seen you the *previous day.*"

Direct:—"What do you think of *this* man?"

Indirect:—He asked what I thought of *that* man.

Direct:—"You can stay *here* in my house."

Indirect:—He said I could stay there in his house.

Direct:—"I met him *last night,* but I have not seen him since."

Indirect:—He said that he had met him *night-before,* but that he had not seen him since.

第二、凡そ人の所言所述これを間接的に叙するときは多くは短縮せらるゝことを注意せざるべからず、是れ英語使用上普通の習慣にして時間儉約の意よりしてなり。次の數例以て之れを明かにするに足るべし

Direct:—He said, "I think you are crazy."

Indirect:—He thought me crazy.

Direct:—"I believe that he has died," said she.

Indirect:—*She believed he was dead,* or, still more simply, *she believed him dead.*

Direct:—She wept and said, "I fear he will never get well."

Indirect:—*She mourned over him as over one who could never recover.*

Direct:—He said, "I think you (some woman) are false."

Indirect:—He said he thought her false.

此種の短縮は殊とに詩に多し、而して其の短縮の奇巧幽微なるもの屢々あり、Patmore の 'The Angel in the House' と題する詩に、一貴女その情人に接吻しながら其のはしたなき振舞にあらざることを辨じて曰ふ

He thought me asleep; at least I knew
He thought I thought he thought I slept.

彼の人はわれを睡れりと思へり、少なくとも、彼の人はわれを睡れるものと思へりとわれが思へりと彼の人の思へることをわれは知れり（其貴女を睡れるものと情人は思へり—といふことを貴女は思へり—といふことを情人は思へり—といふことを貴女は知れり）

是れ批評家 Ruskin 氏が其の微妙なるを激賞したるものにして、宛然一個律語上の好謎と謂ふべし

John Donne の詩 'Love's Exchange' にある次の句の如きも亦た其の一例とすべし

Let me not know that others know
That she knows my pains, lest that so
A tender shame make me mine own woe.

余が心を惱ましゐることを彼女（余が愛人）は知るといふことを人々が知るといふことを余に知らしめざれ、さらずば余は耻づかしさにもの悲しくなるなり

第三、「應用」の章にも一寸示したるが如く、日本文にては

間接叙事を用ゆること稀れにして、殊とに稍や長き所言所述を間接に叙するが如きは到底能はざるところなり、故に英文にては間接叙事なるものも日本文にては大抵皆な直接に叙せざるべからず、例へば My mother told me to be good when she was gone, and love my father, and be kind to him. といふ間接叙事を譯せば、「われ死んだればおとなしくして父上を大事にせよと、母は告げたまへり」といふ直接叙事とならざるを得ず、He told them that he had this thing to promulgate abroad to all men; which of them would second him in that?.....Ali exclaimed that he would. といふ間接叙事の如きも之れを譯して「彼れ人々に告げて曰く余や此教を廣く萬人に弘めざるを得ず諸君の中誰れか余を贊するものぞと、.....吾れ請ふ之れを贊せんとアリー叫びぬ」と直接叙事にせざるを得ず、其他此種の例隨所に發見せらるべし。

第四講

不定法 (Infinitive Mood.)

總説

I. Infinitive と Gerund.

汎稱して不定法といへば Gerund をも其中に含む、蓋し Gerund は近世の英語にては別に一個の形式にあらずして、infinitive の一種の應用たるに過ぎざるなり。相當なる特有の前置詞を具へて目的若くは意志を表はすの不定形これをゼランドといふ、卽はち例せば to write 及び writing なる通常不定詞に對するゼランドは to write 及び for writing なり。扨てゼランドがセンテンスに於ける通常不定詞の如くに動詞の目的格にはあらずして、副詞若しくは形容詞いづれかの性質を有ち而して常に之れを擴げて一個の clause と成すことを得るなり。例へば

I love *to write.* (inf.)

I come *to write.* (ger.)

前者は「書くことを」の意にて、love なる動詞の目的格たる不定詞なり。後者は「書かんが爲めに」「書かんとて」の意にて、目的又は意志をあらはす副詞的ゼランドなり

(1) A house *to let.*
(2) The course *to steer by.*
(3) A thing *to be done.*
(4) A city *to take refuge in.*

(5) The means *to do* ill deeds.

の如きは形容詞的ゼランドにして、孰づれも之れを擴げて clause と成し得べきものなり。今ま順次これを示さんに次の如し

(1) A house that the owner lets or will let.
(2) The course that we should steer by.
(3) A thing that should be done.
(4) A city wherein one may take refuge.
(5) The means whereby ill deeds may be done.

次ぎの數例の如きも通常の不定詞にあらずして、ゼランド形のものなり

I have work *to do*.
There is no more *to say*.
He is the man *to do* it, or *for doing* it.
Ready *for sailing*.
Sharpened *for cutting*.

又た記者の意を明かならしむるが爲めにゼランドに於て to の前に for なる語を加ふることあり古文に專ら行はれたるところなり

扨て本講に於て -ing を以ての通常不定詞と名づくる I hate *lying*, Seeing is *believing* の如きに於ける -ing 形の名稱については諸文法家の說區々として一ならず、誠とに混雜を惹き起し易し。或ひは不定詞といふ名をば to を以てのものゝみに用ひ、上の如き -ing を以てのものを別に Gerund（を verbal noun と做して）と呼ぶものあり。或ひは to を以てのものを普通不定詞と呼ぶに對して -ing を以てのものを Gerundial Infinitive と呼ぶものあ

り。（目的を表はす to を以ての不定詞を往々 Gerundial or Dative Infinitive と稱す此は後にいふべし）。或ひは -ing に於ける不定詞と同ゼランドと同動詞狀名詞との間に區別を立つるあり。頗ぶる紛らはし。今ま本講に於てはベイン等の說に據り、ゼランドをば不定法中の一種となし、卽はち不定詞にして目的若しくは意志を表はすに用ゆるものをゼランドとし、而して不定詞に to なる前置詞を以てのものと -ing なる後置字を以てのものと二個の形式ありて、例へば to write と writing なる二種の通常不定詞に對し意思目的を表示する處ろの to write と for writing なる二種の形式をゼランドと名づくることとしたるものと知るべし

今ま通常不定詞とゼランド（副詞的形容詞的不定法）とに分つて夫れ々々各種の用法を說かんとするに當り先づ通常不定詞とゼランドとの分ちなく不定法全體の上に就きて言ふべきもの二三件あり

II. 不定法の時制（テンス）

凡そ不定法は to を以てのもの -ing なる後置字を以てのもの共もに單に行爲を名ざすのみにて、其の行爲のありたる時には嚴密なる關係なきを以て、其の tense modification は只僅かに下の如きに過ぎず

To を以てのもの
- 現在
  - to write.
  - to be writing.
- 過去
  - to have written.
  - to have been writing.

-ing を以てのもの { 現在 writing.
過去 { having written.
having been writing.

（以上は能動詞(アクチーヴ)に於ける例）

To を以てのもの { 現在 to be taught.
過去 to have been taught.

-ing を以てのもの { 現在 being taught.
過去 having been taught.

（以上は受動詞(パッシーヴ)に於ける例）

以上の中現在の不定法は殆ど一個格段なる時を表はすと云ひ難し、其が屬する他の動詞の如何によりて如何やうにもなり、絶對的に獨立の時といふものを有せず、其の時や相對的なり。而して I *intend to do* it, I *intended to do* it, I *have intended to do* it, 又は He *is* fond of *reading*, He *was* fond of *reading;* I never *shall forget the waking* next morning, *the being* cheerful and fresh for the first moment. などの如く如何なる時制とも結び付くを得るなり、されば一センテンス中に於て主たる動詞の時制が如何なる過去なるにせよ之れに伴なふ不定法は大概過去にあらで現在ならざるべからず

(1) He *saw* me *to be* impatient. 余が急ぎ居たるを知れり
(2) He *was* kind enough *to excuse* me. 親切にも余を恕るし呉れたり
(3) I *heard* him (*to*) *say* so. 彼れの爾か云ひたるを聞けり
(4) I *preferred speaking* last. 自ら擇で最終に語れり
(5) *Changing* the hour so *was* a mistake. 爾く時刻を變更したるは失錯なりき

(6) *The sending* away the messengers *led* to *the surrendering* the point. 使者を遣はしたので遂に論點を讓つた
(7) Luther's *burning* the pope's bull *brought* about the Reformation. ルーサー法王の告諭文を燒きしより宗教革命は起れり
(8) You *were* the cause of my *being dismissed.* お前ゆゑで免職せられた
(9) On his *reading* the letter, he *wept.* 彼れは其の手紙を讀んで泣けり
(10) After their *supping*, or after *supping*, they *went* out. 晩餐を濟ましたる上彼等は出で行けり
(11) Before *leaving* the city he *paid* his debts. 此地を立退いた前に借金を返へした

の如き皆な、主たる動詞の時制は過去なるも之れに伴なふ不定法の時制は現在なり（現在の不定法には獨立絶對の時といふものなく其の時や待對的のものにして其が屬する他の動詞の如何によりて如何やうにもなること前にいへる通りなるが、今此等の場合に於ける現在の不定法は主たる動詞が過去なるを以て隨つて過去の意を表はすこと各例の下に附せる譯にて明らかなり）。而して過去の不定法を用ひて可なるは唯々其の行爲が主たる動詞の時日に先きだちて既に完了せるときのみに限るなり、下の如し

(1) I *am glad to have met* you. あなたに御目にかゝつたので嬉しく存じます
(2) After *having paid* the money he *retired.* 金を拂つた後ち退いた
(3) *To have aided* in founding a great democracy

accross the Atlantic *was* a subject of pride to the French. 大西洋の彼方に大民主國を建設するに力を假したることは佛國人の誇る所なりき

(4) *'Ts* better *to have loved and lost,*
Than *never to have loved* at all. 愛して而して失なへるは、未だ嘗つて愛せざりしに優る

(5) A place where a torrent *seemed to have dashed* across the road. 急流の横斷突過したりと見ゆる場處

(6) He *reported* the experiment *to have failed.* 彼れは其の經驗失敗したりと報告せり

(7) I *perceived* him *to have made* a mistake. 余は彼れが誤まりたるを認めたり

これら皆な不定法にいへる事實が其の前若しくは後にある主たる動詞にいへる事實の以前に完了したるものなるを以て其の不定法を過去にするを得るなり。若し夫れ

(1) I intended to have written.
(2) I hoped to have seen him yesterday.

の如きに於ては然らざるを以て

(1) I intended *to write.*
(2) I hoped *to see* him yesterday.

ならざる可からず。但しエリサベス時代頃までの英語にては、完了する積りでありたるに目的を遂ぐる能はずして完了にならざりしといふ事を表する hoping, wishing, intending の動詞又は爲すべき筈でありたるに爲さゞりし事 (something ought to have been done but was not) を表する動詞の後に過去の不定法を用ひたり、シエークスピヤなどに此の例多し。

(1) I hoped thou *shoul lst have been* my Hamlet's wife;
I thought thy bride-bed *to have decked,* sweet maid. 可憐の乙女よ、御身はわが子の妻となるべかりしを、われは御身が嫁入の床に花時かんとこそ思ひしに

(2) Levied an army weening *to* redeem,
And *have installed* me in the diadem. 余を身受けし且余を王位に即けん積りにて兵を擧げたり

(3) Ambitious love hath so in me offended
That barefoot plod I the cold ground upon
With sainted vow my faults *to have amended.*
正しからぬ戀痛く余が良心に苦めたれば余は誓ふて余が過ちを改めんものと跣足にて冷めたき地上を踏めり

(此の二例に於ける have は或ひは I look to you to have this explained などに於ける have と同じく「…せさす」といふの義に見え即ち前なるは to have me installed=to cause me to be installed の意にして後なるは to cause to be amended の意ならんも、「爾かなることどうやら覺束ない」といふ不成就の念あるより斯く過去不定法を用ひたりと見るを得べし)

(4) He came thither thinking *to have raised* the siege. 圍みを解く積りにてそこに來れり

(5) He trusted *to have epualled* the Most High. 上帝に匹敵する積りであつた

此等往時の語法必らずしも廢斥すべきにあらず、現今にても間々此の語法存す、例へば

(1) I *would* (i. e. *wished to*) *have done* it. 左樣爲したかりしものを

(2) I *oughlt* (i. e. *was bound*) *to have* done it. 左樣爲すべき筈なりしに

(3) He was *to have learned* swimming, but not having done so was drowned upon entering the water. 水泳を學ぶ可かりしに、學ばざりしを以て水に入るや否や直ちに溺れたり

(4) I hope *to have succeeded*, but I failed. 首尾よくやり遂げる積りなりしに、失敗せり

〔これに反して I hoped to have succeeded, and I succeeded とは決して言ふを得ず、必らず I hoped *to succeed*, and I succeeded と云はざる可からず、此等の動詞の後に過去の不定法を用ゐるを得るは完了を企望する目的の遂げざりしを表はす場合に限れば なり〕

(5) I *could* (i. e. *was able to*) *have repeated* all Homer by heart once. 余は嘗つてホーマー全集を暗誦することが出來しものを。暗誦せよと云はれなばすることを得しに（誰れもして見よと云はざりしを以てせざりし）=……if any one had challenged me, but no one did.

〔これに反して I *could learn* a hundred lines in an hour once といへば件の過去不定法のものとは全く異なりて and I sometimes did（嘗つては一時間に百行づゝ學ぶことが出來た、シテ實際時々其れほどづゝ學んだ）との意を含むなり〕

要するに、過去形不定法の使用は現在形不定法の使用に比すれば甚だ少なしと知るべし

III. 不定法と否定詞との位置の關係

凡そ否定の句に於て、其の否定が不定法にかゝるものなるときに（即はち否定詞が不定法を modify する場合には）*Not* 或は *Never* なる副詞は常に不定法の前に立つ

(1) *Not to reply* would be acting contemptuously. 答へざるは無禮なり（若し答へざらん乎是れ他を侮蔑するものなり）

(2) I have decided *not to buy* a horse. 馬を買はぬことにきめました

(3) If you were to order the falcon *not to kill* birds, and the mole *not to destroy* insects, they would all die of starvation. 鷹に小鳥を殺さぬやう、土龍に小蟲を殺さぬやう仰せられては此等の者共は皆な飢え死に致すでしやう

(4) Than *never to have* loved. 嘗つて愛せざるよりは

(5) To be or *not to be*. 存らへんか存へざらんか

(6) It is *never to be* forgotten. 決して之れを忘る可からず

(7) I were best (*not*) *to call*. 呼ばざるに如かず

(8) It were best *not to know* myself. 自から知らざるに如かず

(9) *Not to say*. といはぬまでも（甚しきに至りては）

(10) *Not to speak* of. ……については更らにも言はず（況して）

(11) It is gone, *never to return*. 往いて復た歸らず

(12) I trust *not to dishonour* his memory. 彼れが遺名を汚がさぬ積り、辱かしめじと信任す

(13) To lose one's freedom is a loss *not to be* endured. 自由を失ふは堪ふ可からざるの損失なり

(14) He did well here *not to yield* to his inclination. 彼れ此場合に已れの好む所ろに從はざりしは宜かりき

(15) Tell him *not to forget* about the coal. 石炭のことを忘れぬやうに、あれに言つてお呉れ

(16) You ought *not to sleep* so late. 左樣朝寢せざらんことを要す、そんなに朝寢してはいけない

(17) She ought *not to be* out so late. 左樣晩くまで外出せざらんことを要す、そんなに晩くまで出て居るはいかぬ

(18) It ought *not to be* weak, it was carefully made.
そは念入れて作りたるものなれば弱からぬ筈なり

(19) I ought *not to have* said a word about it. 其事は一言も云はなければよいのに、一言もいはずに置く可かりしを

此等みな not 若しくは never なる否定詞が不定法に先きだちて其れをモディファイせるものなり。若しそれ次の諸例の如きに至りては之れと異なりて、not なる否定詞が（その後にある不定法にかゝらずして）其れに先きだてる動詞をモディファイせるなり

(20) Young men *care not* to innovate. 若年者は改革に就いて小心ならず、少年は改革を念とせず（改革する事を何とも思はず）

(21) Why *weep* ye *not* to think upon my wrongs? おん身は何故余が寃を思ふて泣かざるか

(22) He *dares not* (to) come. よう來ぬ（來るを敢てせず）

(23) I *dare not* (to) do this. これを爲すに忍びず

(24) He *need not* (to) go. 行くに及ばず

(25) You *need n't* (to) wait any longer. もう待つて居なくてもよい

(26) You *need n't* (to) run so, we've a long time yet. そんなに駈らずともよい、まだ餘ほど間がある

以上は別に紛ふべくもあらざれど、茲に否定詞が其の後にある不定法をモディファイするか其の前にある動詞をモディファイするか決し易からずして紛らはしき場合往々あり

(27) My son *is not to live* by his learning.
の如き not を is なる動詞にかゝらしめて
悴は學問で生計を立てる見込ではありませぬ
といふ意にも取らるべく、之れを to live なる不定法にかゝらしめて

悴は學問を渡世とは致さぬ筈です
といふ意にも取らるべし

(28) We *are not to be* surprised that bad men want shame.
の如きも、或は not を are にかゝらしめて
惡人に恥なきは驚くべきにあらず（異しむを要せず）
と解し得べく、或は之れを to be surprised にかゝらしめて
惡人に恥なきは驚くべからざる筈なり（異しまざらんを要す）
と解し得べく、孰づれとも斷言しがたし

(29) The rest of my family *were not to be* sacrificed to the place of one child alone.
の如きも前同樣、not の係り方如何によりて
一人の兒の心を安ずるために自餘の家族を犧牲にすべきにあらず、（犧牲にすること當然にあらず必要にあらず）
といふと、
一人の兒の心を安むるために自餘の家族を犧牲になす可からざる筈なり（犧牲にせざらんこと當然なり必要なり）
といふとの兩樣の意を生ずべし

(30) The cure for drunkenness *is not to be* ascetic.
なる章句に於て、not は動詞をモディファイして……is-not to-be-ascetic（醉狂を治するの道は禁慾を主義とするに在らず）といふが其の本意なること此文全體の旨意より視て推知するに難からざれど、亦た not をば不定法たる最後の三語にかけて is not-to-be-ascetic（醉狂を治するの道は禁慾を主義とせざるに在り）との意にも取られざるにあらず。前者の意を傳ふるに

To be ascetic is not the cure for drunkenness.

禁慾を主義とするは醉狂を治する所以にあらず

と書き、後者の意を傳ふるに

Not to be ascetic is the cure for drunkenness.

禁慾を主義とせざるは醉狂を治するの道なり

と書かば間違を生ずる恐れはなし

(31) No wonder, then, that one *likes not to be* ridiculed or laughed at.

に於ても、「嘲笑せられぬ」といふことが着眼點にあらずして「嘲笑せらるゝ」といふことが着眼點なれば、其の謂ふ所ろの本意は「然らば則ち人は嘲けり笑はるゝことを好まざる (one does not like being ridiculed) も異しむに足らず」に在り、去れど件の文面の如くにては或は「然らば則ち人は嘲り笑はれざることを欲する (one does like not being ridiculed) も異しむに足らず」との意にも取られ易し。故に此の章句は宜しく

No wonder, then, that one *does not like to be* ridiculed or laughed at.

と書かざるべからず。又た

(32) In this book the author has *aimed to be* (or *at being*) *neither* brilliant *nor* profound.

なる例の如きも、其の謂はんとする旨意は「著者は此書に於て絢爛ならんことを求めず將た深遠ならんことを求めず (has not aimed to be .....) といふに在り、而かも件の文面の如くば「著者は此書に於て絢爛ならざらんこと將た深遠ならざらんことを企圖せり (has aimed not to be .....)」とも解することを得べし。乃はち斯の兩樣の義に陷ゐるを避けんには是れ

In this book the author *has not aimed to be* (or *at being*) either brilliant or profound.

となさざる可からず

されば、「然らずと見ゆ」といふと「然りとは見えず」といふと其の意味に於て左まで著るしき相違あらねど、本來「然らずと見ゆ」といふときは否定の詞は「然かある」にかゝるが故に It seems *not to be so.* とあるべく、「然りとは見えず」といふときは否定は「見ゆる」にかゝるが故に It *does not seem* to be so. とある可きなり、蓋し not といふ否定が不定法にかゝらずして動詞にかゝるものなるときは其の否定詞をば動詞に先きだたしめてその前に do を添加すること惣じての用法なり、但しつまるところは大抵彼此同樣の意に歸着するが故に二者互ひに相ひ換へて譯するも必らずしも不可なし、否な日本語の語調上却つて「……と見えず」の類を「……にあらずと見ゆ」と譯するの妥當なるに如かざることあり、卽ち

(33) That coal *doesn't seem to burn* very well. その石炭は甚だよくもえるとは見へぬ

(34) He *does not intend* to permit me to go. 彼れは余の行くを許すの意なし

(35) The ostrich *does not seem to take* any notice of them. 駝鳥荷りそめにも之れを顧みるとは見えず

の如き、各々

あの石炭は餘まりよくもえないやうだ

あの人は私の行くのを許さぬ積りだ

駝鳥さらに之れを顧みざるものゝ如し、ちゝとも搆はぬやうだ

と譯して差支へなきのみならず、其の方が寧ろよく日本語自然の語調に叶へるを覺ゆ

IV. 不定法と副詞との位置の關係

以上は否定的副詞と不定法との位置の關係なるが、So, Thus などの副詞が不定法に於けるや通常多くは

To do *so*.

などの如く其の後に立つ、去れどまた

So to speak.

Thus to spend and be spent.

などの如く其前に立つときあり、又た

To *so* present ideas that they may be apprehend with the least possible mental effort—

などの如く間ま不定法の間に割り入ることもあり

V. 不定法の To なる語

の名稱性質については文法家の間に區々の議論あり、或ひは之を「マデ」といふ to と同じく前置詞なりとなし、或ひは只だ之れを不定法の符號 (sign) と呼ぶ、いづれにしても實際に差違なし。兎に角概するに通常不定法に於ては

To err is human. 過まつは人間の常

I love *to read*. 余は學問するを好む

などの如く此の to なる符號語に格別重き意味なく、第五講「第十七」に說く如く此の符號の有りそうな筈の處に往々其の省ぶかるゝことさへある位なれど、Gerund にありては第六講に說き示す副詞的不定法及び形容詞的不定法の諸例にて見らるゝが如く、此の符號が重き意味を有すと知るべし。

第五講

不定法 (Infinitive Mood.)—通常の不定法 (Gerund にあらざるもの)

緒言

以下單に不定詞といふはゼランドにあらざる通常の不定詞と知るべし

不定詞に二個の形式あり、to なる前置詞を以てのものと、-ing なる後置字を以てのものと、是れなり。此の二個の形式は一般に、其の文句の都合次第に隨つて、若しくは音調の工合に隨つて孰れを用ゐるも可なるものなり、例へば

To reign is worth ambition.
The act of reiging.....

Binding themselves by these terms was impudent.
To bind .....

To do nothing.
Doing nothing.

I find it difficult *to write* letters in English.
I find *writing* letters in English difficult.

It is no use *crying* over spilt milk.
It is no use *to cry*.....

We propose *drawing* a few lessons.
We propose *to draw*.....

但し to を先立たしむる不定詞と -ing を以ての不定詞とは必らずしも悉とく同一なるにはあらず、間ま相換用すべからざる場合もあり

Reading maketh a full man.

の如きは之れを *To read*.....となし難し、*Reading* は玆に讀むことの常々の習はしを表はすものなり然るに To read.....にてはかゝる意味を傳ふる能はず。蓋し to を以ての不定詞は單一孤獨なる個々の行爲若しくは短時間の働らきを表はす方によく適當す、卽ち例へば

To refuse consent would be unsafe.

の如きは或る一の場合に就いて云へるものなりと知るべし

日本語の動詞にては正さしく英語の不定詞と同一なる形式とてはなけれども、大抵「こと」「…は」「とは」「といふことは」「には」「…と」「ように」「…せんに」「…すれば」「…するところ」「…して」等を以て之を譯し得べきなり、こは追々其の各場合々々に至りて例示すべし

第一。名詞として

不定法は屢ば名詞の如くに用ゐらる、斯く名詞として用ゐらるゝは不定法中の最も使用多きところのものにて to を以ての形式、-ing を以ての形式ともに孰づれも同じく此の用をなすなり、扨て斯く不定詞は名詞の職分を務むるが故にセンテンス中に於て主格たることもあるべく、目的格たることもあるべし

(1) *Going* is sad. 行くことはつらし
(2) He dreads *going*. 彼れは行くことを憚かる
(3) *To walk* is healthy. 歩るくことは健康の爲めによし
(4) He loves *to read*. 彼れは讀むことを好む

(5) His object is *to learn*. 彼れの志は學ぶにあり（學ぶことに存す）
(6) *To be* or *not to be*,—that is the question. 存らへん乎存らへざらん乎といふこと是れぞ疑問なり
(7) *To see* is *to believe*. 見るは則ち信ずるなり（見ることは信ずることに均し）
(8) *To hear* is *to obey*. 聽くは從ふ所以なり
(9) *To be rich* is *to be flattered*. 富むは諂はるゝ所以なり（富めば諂諛せらる）
(10) *To do* nothing is not always pleasant. 何も爲す無きことは必らずしも快よきものにあらず
(11) He dislikes *doing* nothing. 彼れは何も爲す無きことを嫌ふ
(12) We wish *to go* soon. 我等は速かに行かんことを望む
(13) I preferred *speaking* last. 余は最後に語ることを擇めり
(14) *To learn* the art of *being* content is *to realize* a chief condition of our *being* happy. 足ることを知るは幸福になることに就ての重もなる條件を實際に盡す所以なり
(15) *Being* without work is one, *reposing* from work is another thing. 仕事をなさざることゝ仕事を休むことゝは別事なり
(16) *To recover* Silesia, *to humble* the dynasty of Hohenzollen to the dust, was the great object of Maria Therasa's life. シレシヤを恢復しホーヘンゾルレン朝を敗ぶりて地に塗れしめんことはマリヤテレサ畢生の大目的なりき
(17) *To see* with one's own eyes men and countries, is better than *reading* all the books of travel in the world. 自家の眼を以て民風國土を視ることは世界中の有らゆる旅行記を讀むに勝る

(18) What he and they called *levying* war was, in truth, no better than *instigating* murder.

彼れと彼等との所謂る師を起すといふことは其の實殺害を勵ますに外ならざるなり

(19) *To give* is more blessed than *to receive*. 人に與ふるは已れに受くるよりも幸ひなり

此等の諸例に於ける名詞的不定詞は以上示したるが如く日本語の「こと」「…は」「といふことは」に當るを知るべきなり

第二。形容詞と結び付く

第一則にいへるが如く不定法は屢は名詞として用ゐらるゝが故に、隨つて名詞の如く形容詞と結び付くことあり、(蓋し doing nothing *well* などの如く副詞と伴なふことは不定詞にあつて敢へて珍らしからずと雖ども、形容詞と伴なふは其の本領にあらずして特異の現象なり)、而して斯く不定詞とゝもに用ゐらるゝ形容詞は重もに demonstrative にして其の中には定冠詞もあり

(1) *That changing* the hour was a mistake.

この demonstrative は副詞句(アドヴァービアル、フレーズ)の短縮にして、即はち

Changing the hour, *on the occasion, in that way, so,* was a mistake.

に當る。日本語に飜へすに於ても「斯く時刻を變更するは……」「かくの如き時刻の變更は……」といはざるを得ず

(2) *This fiddling, shouting, bawling,* I detest.

これも上の例にて類推すべし

(3) *The sending* away the messengers led to *the surrendering* the point.

此の定冠詞は一層委曲なるべき名詞の形式を短縮したるものにして、即ち

The act or circumstance, namely, sending away the messengers led to the act or effect—surrendering the point. 使を遣はすといふ其の事が、論點を讓るといふ其の事(結果)を來たせり

に當る

(4) I never shall forget *the waking* next morning; *the being* cheerful and fresh for the first moment, and then *the being weighed down* by the stale and dismal suppression of remembrance.

此も上の例にて類推すべし

(5) *The suffering* Ireland to send anything to these colonies, to bring anything directly from thence, is itself a favour.

此例中の the suffering (…を容るすといふ其の事、……せしむるといふその事) は單に suffering とするか或は to suffer とするこそよけれ。されど斯くすれば不定詞が相重さなりあふにつき、不定法になさずして

If we suffer Ireland to send anything……

と變形するも可なり

(6) *Easy writing* is *hard reading.*

では二個の不定詞ともに quality の形容詞 (easy と hard) と相伴なへり、斯くデモンストレチーヴにあらざる形容詞に不定詞の結びつくは甚はだ稀れなる例にして且つ不規則なるものなり。本來いへば斯かる場合の形容詞は副詞ならざるべからず然らずんば其の不定詞は純然たる名詞となる

べし。是れ決して不定詞の本領にあらざるなり。即ち本文の例はワザと簡約警拔に言做したるものにして、之れを完全なる形式にすれば

What is written with ease is read with difficulty.
(書くに易きもの讀むに難し)

となるなり

(7) There is *no saying.*

に於ける no なる形容詞の如きも元來 not なる副詞の用ゐらるべき處なるを斯く變形したるものにして、即はち是れ

One cannot say. (言ふところを知らず、言ふべきなし)

なり

以上の如く形容詞と相伴なふ不定詞は皆な -ing を以ての形式なるが、茲に下の如く非常の例外あり

(8) He made a *great to do.*

これ不規則なるの甚だしきものにして、a great *to do* は則ち a great *doing* の意なり。*doing* てふ不定詞に great なる形容詞を冠するはまだしもなれど、to do てふ不定詞に之れを冠するに至りては頗る其の不都合なるを見るべきなり

第三。物主格と結び付く

名詞として用ゐらるゝ不定詞はまた物主格 (Possessive) と結びつくことあり。勿論これは -ing を以ての形式に限ると知るべし。而して斯く物主格とともに不定詞を用ゐるは是れまた短縮のためにして、則はち例へば

(1) *Luther's burning* the Pope's bull, brought about the Reformation.

の如きは

Luther burnt the Pope's bull and the Reformation followed.

を縮約したるものなり

(2) Much depends on *Richard's observing* the rule, *his neglecting* it will give trouble.

の如きも之れを伸ばせば

Much depends on the fact that Richard observes the rule; the fact that he neglects it will give trouble.

なり。以下諸例みな以て徵すべし

(3) In case of *your being* absent. =in case that you are absent.

(4) James seems to have been the elder, from *his being* always mentioned first. =from the fact that his name is.....

(5) This arise from *your neglecting* my admonitions. =from the fact (or circumstance) that you neglected.

(6) You were the cause of *my being dismissed.* =of my dismissal.

(7) I am surprised at *your saying* so.

(8) There is no reason for *his doing* it.

(9) No sighs but of *my breathing,* no tears but of *my shedding.*

(10) I flattered myself with the hopes of *his interesting* himself in favour of the tragedy.

(11) I could assure myself of Mr. *Vandal's being* unengaged to any other author.

(12) I waited a few days in expectation of *its being* put in rehearsal.

第四。前置詞を持つ

名詞として用ゐらるゝ不定法はまた名詞の如く其の前に前置詞を有つことあり、但しこれも -ing を以ての形式に限ると知るべし。他の形式の不定詞は既に to なる前置詞と共に組成せらるゝが故に容易に重ねて第二の前置詞をもつこと能はず、然れども -ing を以てのものは一般に能く前置詞を受け取り得らる。而してかゝる場合の前置詞は又多くは接續詞に轉形するを得るなり、例へば

Before your deciding.=Before you decide.

On his reading the letter.=When he read the letter.

After their supping, after supping.=After they had supped.

第五。先驅の It.

不定詞が名詞の如く用ひられて主格若しくは目的格となるに當り、it なる代名詞これに先んじて預かじめ其の前驅となり先導をなすこと極めて多し。例へば

(1) *It* was not easy *to* wound his feelings. 彼れの感情を害することは、そは容易くはあらざりき

(2) *It* is wong *to* waste time. 無駄に時を費やすのは、そは悪しきことなり

(3) *It* is better *to* suffer than *to* do wrong. 害をなすよりも害を忍ぶことこそよけれ

(4) *It* is hard for a rich man *to* enter into the kingdom of heaven. 天國に行くといふことは、そは富者にとつては難し

(5) *It* is much better *to* be a little cautious, than

to run any risk. 如何なる危險をも冒すことよりは、少しく戒慎を加ふるこそ遙かによけれ

(6) A pleasant thing *it* is for the eyes *to* behold the sun. 太陽を見るといふ事は、そは眼にとつて快よきことなり

の如きにありては、it は形式上の主格にして、則はちいづれも to……てふ事實上の主格の先驅をなせるものなり

(7) My generous patron had *it* not in his power *to* introduce me personally. 余が恩人は躬親から余を紹介することをば爲す能はざりし

(8) The influences of that age, his open, kind, susceptible nature, to say nothing of his highly untoward situation, made *it* more than usually difficult for him *to* cast aside or rightly subordinate. 彼れが立ちしところの頗ぶる不如意なりし位地については言はずもあれ、彼れが空豁なる有情なる感受し易き性質は、彼れをして當代の影響を放擲し又は截然これを屈從するといふ其の事を非常に困難ならしめたり

(9) They patiently endured, counting it blessedness enough so *to* spend and be spent. 彼等は斯く生を費やし又斯く消費せらるゝを以て充分に福祐と做し耐忍して之を持續したり

の如きに在つては、it は形式上の目的格にして、卽はち各々 to introduce……, to cast aside……, so to spend and be spent なる事實上の目的格の豫備となれるものなり

尙ほ下の諸例を看るべし

(10) *'Ts* better *to* have loved and lost,
Than never *to* have loved at all. 未だ曾つて愛せざるは、愛して之れを失ふに如かず

(11) *'Ts* well *to* be off with the old love
Before you are on with the new. 新らしき戀を招かんとするには、先つ昔き戀を棄つるこそよけれ

(12) *It* is necessary *to* obey the path of virtue. 善道に順ふはこれ必須已むべからざる所なり

(13) To be respected *it* is necessary *to* be honest. 人に尊まれんには正直ならんこと必要なり

(14) *It* is pleasant *to* walk in the forest in spring. 春、林の中に散歩することは愉快なるものなり

(15) *It* is unpleasant *to* want, and still more *to* have to sneeze in the present of guests. 貧乏するは不愉快なることなり、客の前にてクサメの出るは猶ほ不愉快なり

(16) *It* is strange *to* hear a man deny the existence of God. 神の存在を否む人あることは奇怪なり

(17) *It* was marvelous *to* see how large his mouth became when he swallow that sweet potato. 彼れがアノ薩摩芋を喰はんとして大きな口を開きたる其の樣おかしかりき

(18) *It* is good *to* be good. 善なることは善し

(19) *It* is too bad *to* say such a thing. かゝることを言ふとは餘まりヒドし

(20) Is *it* possible *to* acquire a knowledge of the Queen's idiom in the year? 年内に英語を學ぶこと出來べきや

(21) *It* is possible for a man *to* be mistaken even when he is most certain of his subject. 已れの最も確かに知れると思ふ事柄にても誤解することあるは是れ人にあつて有り得べきところなり

(22) *It* is impossible *to* complehend the depravity of the human heart. 人性惡なりとは思はれず

(23) Were *it* impossible *to* put electricity to practical use, our future would be much the same as our present. 電氣を實地に使用すること成し得べからざらん乎將來の世界は現今の世界と多く異なるところ無かるべし

是等に於ける to……みな是れ事實上主格にして、形式上にては it なる代名詞と同格なるものと謂ふべきなり

上の如く it なる代名詞を先立たすは to を以ての不定詞なること常なれども、間ま又た

(24) *It* is no use *crying* over spilt milk. 乳汁のこぼれたるなれば嘆げくとも益なし

(25) *It* is esay *distingushing*……を區別すること是れ容易なり

などの如く、-ing を以ての形式のものも爾かする例あり。左れどこれ本來矢張り to にてあるべきものにて

It is no use *to* cry over spilt milk.
It is easy *to* distinguish……

とするを可とするなり。要するに此の用法は to を以ての形式に限るを一般の常則となす

凡そ斯かる場合に於ける it は何を指すものなるや往々學生の惑ひやすき點なれば、注意すべきところなり

（上來第五則までは to を以ての不定詞と -ing を以ての不定詞とに共通の講說なれど、是れよりは特り to を以てのもののみに關する說明となるべし、蓋し to を以てのものは不定法中の重もなる不定詞にして最も廣く用ゐられ、而して其の用法種々にして多岐多端に亘り、頗る注意せざる可からざるものあり、從來世の所謂る直譯讀にて to といふ不定法なれば何でも漢でも一切「べく」

と直譯し去るが如きは甚はだ不都合にして讀者をして不定詞の眞意を解する能はざらしむるなり）

第六。他動詞の目的格として

Toを以ての通常不定詞は日本語の「……するを」「……せんと」といふ意にて他動詞(Transitive Verb)の目的格として用ゐらる、此は其の用法中の最も普通なるものなり

(1) I should like *to go*. 行きたいものだ（行くを希ふ）

(2) I want *to make* free of your house. 君の宅にちよと一日ほどとまらせて戴れたまへ（君の居宅を借用せんと望む）

(3) His hands refuse *to labour*. 彼れの手は働らくを肯んぜず

(4) If you choose *to have* those terms. 汝若し此の條件に從ふを甘んずるならば

(5) They are forced *to give up* at last. 彼等は遂に斷念せざるを得ざるに至れり

(6) I desire *to hear* her speak again. 再び彼女の語るのを聞くを願ふ……

(7) It began *to fawn*. 尾を振りはじめたり（尾をふることを始めたり）

(8) We used *to walk*. 吾等は散歩するを習ひとせり

(9) When people used *to worship* many gods. 人々多神を崇拜するを習ひとせしときに

(10) I tried *to persuade* him. 余は彼れを說き服せんと試みたり

(11) He attempted *to leap* out of the second story window, but fractured his arm in so doing. 彼れは二階の窓から飛び出んとして手を折りたり

(12) I endeavoured *to make* him acquainted with my intention. 余は彼れに余が意思を知らしめんと勉めたり

(13) I look *to be* in Heaven with most of you. 余は諸君の多數と共もに天國に在らんを期す

(14) They say the burglars were forced *to attack* the reverend gentleman. 强盜が彼の紳士に打つて掛からざるを得ざる事情に迫まられたり（擊つてかゝるを餘儀なくされたり）と云ふ

(15) Children and dogs are not permitted *to enter*. 小兒と犬は入るを得ず

(16) We poor mortals are not allowed *to do* as we please. 吾人は人間の蟲なさ、意の如くするを得ず

(17) I hope *to be* asleep by 11 o'clock. 十一時まで眠るつもり（眠らんと望む）

(18) I hope *to become* still more celebrated than ——. 何某よりも有名にならんを望む

(19) He said he hoped *to see* me at dinner. 晝飯に私に會ひたし（會ふを望む）と彼の人は云へり

(20) I wish *to stop* at this point, because my students are tired of writing. 書生が書き疲かれてきたから、こゝらで止めやう（止めんと欲す）

(21) He promised *to meet* us in Tokyo. 東京で吾等に逢はうと約束した

(22) If we wish *to avoid* important error. 吾人もし重大なる過誤なからんと欲せば

(23) He wishes *to see* him hanged. 彼れはあの人が大嫌ひ（あの人のヒドい目にあはんを彼れは欲す）

(24) I hope *to be* able to give him as good as he has brought. 辱かしめられたから辱かしめてやらう（彼れが仕向けたる通り彼れに仕返してやり得んを望む）

以上諸例みな「……するを」「……せんと」に相當するを見る

べきなり。然るにこゝに此等他動詞の目的格たる通常不定詞と酷はだ相肖たる Gerund（卽はち目的を表はす不定詞）ありて而して日本語にては同じく斯く「……するを」「……せんと」と譯して可なるもの少なからず、甚はだ混じ易し。例へば

(25) Who rejoice *to do* evil.

の如き、「惡を爲す」は「悅ぶ」といふ情の的にして日本語にて「惡を行ふを樂しむ人々」と釋して差支なく卽はち是れ動詞の目的格たる通常不定詞の如く見ゆれども、rejoice は自動詞 (Intransitive Verb) にして、自動詞は目的格を受取るを得ず、故に是れ動詞の目的格たる通常不定詞にあらずして、ゼランドと見做さざるを得ず、之れを解剖すれば「惡を行ふを以て樂みとなす人々」「惡を爲して以て悅ぶ人々」なり

(26) I rejoice *to* hear it.

の如きも上と同樣、一見「余は之れを聞くを悅ぶ」と譯せらるべけれど、其實 rejoice は自動詞にして、「聞く」は「喜ぶ」といふ情の原因なれば、是れ動詞の目的格たる通常不定詞にはあらず、其の本意は「余は之れを聞いて悅ぶ」なり

(27) I *ventured to lift* it, but found it beyond my power.

(28) I *sought to obtain* his consent, but in vain.

の如き孰づれも、上記 10,11,12 の例と似て、「之れを擧げんと試みたり」「彼れの同意を得んとを求めたり」と譯するを得、動詞の目的格たる通常不定詞と見えもすべけれど、ventured, sought はいづれも此場合に自動詞なれば、乃

ち是れ「之れを擧げんとて試みをなせり」「彼れの同意を得んとて歎願せり」といふゼランドなるを知るべし

(29) Those that are *willing to help* themselves.

の如きも「自から助けんと欲する人々」「自から助くるとをなす人々」と譯してさらに不可なきを以て、人或ひは謂はん、are willing は wish と同一なれば乃はち to help は此の are willing に含蓄せる wish の目的格なりと、然れどもこれ亦た to help は as regards doing, in the matter of helping を意味するゼランドと做す方を可とす、元來 willing は形容詞にして、他動詞にあらざればなり

要するに、動詞の目的格たる通常不定詞は唯々他動詞に隨伴し、Gerund は自動詞、形容詞等に伴隨するなり、此ところ緻密の注意を要す。但し自動と他動とを兼具する動詞ありて、例へば上記 10,11,12 の例に於ける tried, attempted, endeavoured の如きは他動詞たると同時に又た自動詞なれば「說き服せんとて、試みをなせり」「飛出んとて、其企圖をなせり」「知らしむるとに就いて勉めたり」といふゼランドとも見られざるにあらず、此等は通常不定詞と見るとも、ゼランドと見るとも、孰づれにても可なり

尙ほ此の動詞の目的格たる通常不定詞とゼランドとの辨別については後にゼランドを講ずるに及んで詳述すべければ宜しくそを參看すべし

第七。補足目的格として

To を以ての通常不定詞は日本語の「なりと」「なるを」「せよと」「すべきを」「やうに」といふ意にて先行名詞若しくは代名詞の補足として目的格に用ゐらるること甚はだ多し。たとへば

(1) I like *a rascal to be punished.* 余は惡漢の罰せらるゝを好む

に於て、rascal が輙はち like の目的格にはあらず、何となれば余は「惡漢」(a rascal) を好むにあらずして「惡漢の罰せらるゝ」(a rascal to be punished) を好むなればなり。故に rascal は目的格の全部にあらずして其の一部たるに過ぎず、乃はち to be punished なる不定詞之れが補足 (complement) たるなり。以下の諸例皆な類推すべし

(2) I know *him to be honest.* 余は彼れが正直なるを知る(彼れを正直なりと知る)

(3) He reported *the experiment to have failed.* 彼れは其の經驗失敗したりと報告せり

(4) I perceived *him to have made a mistake.* 余は彼が誤まりたるを認めたり

(5) I saw *him (to) fall.* 余は彼れの落つるを見たり

(6) I desire *you to let me* know all about your recent indisposition. 頃日御不快の模樣委細を知らしめられんを望む

(7) I ordered *him to fire.* 余は彼れに發砲せよと命じたり

(8) I tried to persuade *him to slay,* but he refused. 停まるやうに彼れを説服せんとしたれども彼れ聽かざりき

(9) When I see *(his words) to be credible,* I'll believe his words. 彼れの言信用すべしと看取せば之れを信ずべし

(10) He saw *me to be impatient,* and therefore did not attempt to detain me. 彼れは余が性急なるを看たれば留めんとはせざりき

(11) I look to *you to have this* explained. これを説明かしてもらへと汝に指圖す

(12) I forced *him to show* his hand (intention). 彼れが其の意志を明かすの止むを得ざるに至らしめたり

(13) I cannot compell *you to learn* English, I can only assist your endeavors. 君に英語を學べと强ゆることは能はず唯だ其れに就て一臂の力を貸さんのみ

(14) His tone caused *me to imagine* that he was ruffled. 彼れの調子は余をして彼れが癇や怒れることを想はしめたり (彼れ少しく怒れりと想ふやうに余を惹起せり)

(15) I can't permit *you to have* such an opinion of me. われをソンなものと思ふてはいかぬぞ (君が余を爾く以爲ふを許さず)

(16) I'll allow *him to be clever.* 彼れの怜悧なるを識認す

(17) He said he could not suffer *me to go* without dining. 飯食はずには行かさぬ (余が飯食はずには行くを許さず) と彼れは云へり

(18) We cannot suffer our *beloved preceptor to be tyrannical.* 余が敬愛する師が壓制に陷ゐるを默止するに忍びず

(19) I'll suffer *you to do it* this time only. 此度限り汝が左樣するを許すべし

(20) He does not intend to permit *me to go.* 彼れは余の行くのを許さうといふ意思なし

(21) He told the *servant to light* the lamp. 彼れは燈をつけよと僕に言へり

(22) He ordered *the lamp to be lighted.* 燈をつくべきことを命じたり

(23) Tell *Hana to serve* breakfast. 朝飯を出すやうにお花に云つてお呉れ

(24) Didn't the doctor advise *you to go* to Oiso? 醫者は大磯へ御出でなさるやうに勸めませんでしたか

(25) I'll bring *him to consent.* 彼れに承知させやう（彼れが承知するやうに致すべし）

(26) The Lord brought *it to pass.* 神が此事あらしめたり（此事の起るやうに致せり）

(27) I don't think I can even bring *my plan to blossom.* 余が計畫を成効するやうに至らしむ（成効さする）を得べしとは思はず

(28) Let me beg *you to accompany* him. 君が彼の人に伴はんことを希ふ

(29) I beg *you to listen* to my proposal. 請ふらくは君が余の言ふ所を聽かれんことを

(30) Could I beg *you to lend* me ten *sen* until Jan. Ist? 一月一日まで十錢貸したまはるやうに願ふ

(31) Gentelmen, I beg *you to be diligent.* 諸君！願はくは諸君の勉強せられんことを

(32) Sir, I request *you to shut up.* 君の默つて呉れんことを請ふ

(33) The furious roaring of the lion made *the poor slave (to) prepare.* 獅子の猛く吼ゆるにつけ奴隷が覺悟をなすやうになれり

(34) Seeing *the savage beast* at once *(to) change its nature.* 獅子が直ちに其の猛き性を變ゆるを見て

(35) The spectators bade *officers (to) let loose* a second lion. 見物人は役人に第二の獅子を放てと云へり

(36) .....forced *it to turn* from him. 其れをして彼れを措いて他に向ふやうに至らしめたり

(37) They begged *the governor to pardon* him. 人々彼れを宥して呉れと知事に乞へり

(38) He asked *the wolf to shew* him the way home. うちへ歸る途を教へて呉れと狼に云へり

(39) I advise *you to come* with me. 君が僕と共に來らんことを勸告す

(40) I have no *wish (hope, ambition, desire,* etc.) *to succeed.* 余は成功するやうにとの願望なし

(41) Give me *your promise to obey.* 順ふやうにとの約束をせよ

以上みな「なりと」「なるを」「せよと」「やうに」等の意に當るを見るべきなり。然るにこゝに又た此等補足的目的格の通常不定詞と同形なる Gerund ありて、請求、命令、勸告、强迫の動詞の後に在つては補足的の目的格たる通常不定詞とも見做されゼランドとも見做され其の孰づれなるやを決し難きもの少なからず、此れについても後にゼランドを講ずるに及んで述ぶべければそを參看せんことを要す

尙ほ古英語にては此等先行名詞若しくは代名詞の補足として目的格に用ゐらるゝ通常不定詞に於て to の場合に for を用ゐたり、此は別に項を設けて to と for の關係を說く節に述ふべし

第八。補足主格として

To を以ての通常不定詞は日本語の「…と」「やうに」「…を」等といふ意にて先行名詞若しくは代名詞の補足として主格に用ゐらるゝことあり。這は第七則にいへる目的格に用ゐらるゝものほどには頻々用ゐられずと雖ども其の用例亦た少なからず而して、日本語の語法には類なき場合ありて隨つて日本人にとつては異やうに見ゆるものあれば注意せざる可からざるところなり。たとへば

(1) *The prisoner* was ordered *to be executed.* 此の囚人は死刑に處せらるるやうに命ぜられたり

に於て、「此の囚人」(the prisoner) が「命ぜられたる」「命を受けたる」(was ordered) にはあらず、「此の囚人の死刑に處せらるゝこと」(the prisoner to be executed) が命ぜられたるなり。故に prisoner は主格の全部にあらずして其の一部たるに過ぎず、乃はち to be executed なる不定詞之れが補足 (complement) たるなり

(2) A place where a *torrent* seemed *to have dashed* across the road. 急流が横斷突過したりと見ゆる（急流の突過したるらしき）場處

に於ても、「急流が見ゆる」にはあらず、「急流の突過したりと見ゆる」にて、「突過したりと」は必らず「急流」に附屬せざるべからざるものなり。故に torrent 丈けにては完全の主格にあらず、乃ち to have dashed なる不定詞之れが補足たるなり。以下の諸例皆な類推すべし

(3) *Our curiosity* is raised *to know* what lies beyond. 人の好奇心は彼方に隱れ在るものを知らんとす、人は見へざるものを見んと好奇心を起す

(4) *I* was commanded *to take* charge of his expendition. 彼れの會計主任となるやうに仰せ付けられた

(5) If *he* had been told *to go*, he might have gone. 行けと（行くやうに）言ひつけられたらば行つて仕舞つたかも知れぬ

(6) If *he* had been desired by you *to do so*, I shouldn't be surprised if I had done so. 彼れが爾かなすやうに君より依頼せられたりとせば僕爾かするとも不思議にはあらざるべし

(7) *He* was compelled *to make* an abrupt exit. 彼れは俄かに退場するやうに餘儀なくされたり

(8) *He* was brought up *to be* a joiner. 指物屋となるやうに養成せられたり

(9) *I* was requested *to take* the chair, but refused. 椅子にかけよと言はれたれど辭したり

(10) *He* is said *to be coming.* 彼れは來りつゝあり（將さに來らんとす）と云ふ

(11) *He* was ordered *to be exposed* to wild beasts. 野獸の爲すがまゝになるやう命ぜられたり

(12) *The wretched slave* was made *to stand* in the presence of thousands. あはれや此の奴隷は數千人の眼前に立たしめられたり（立てと命ぜられたり）

(13) *A lion which* had not been suffered *to eat* anything. 何をも食はしめられざりし（食ふを容されざりし）獅子

(14) *He* is known *to be honest.* 彼れは正直なりと（人々に）知られて居る

(15) *He* was asked *to do*.....云々せよと請求せられたり

(16) Sometimes *I* am ordered *to be tied up.* 折々余は縛らるゝやうの命に逢ふ

(17) *They* are allowed *to walk about* just where they like. 其の欲する所へ歩るきまわるを容るさる（人其の歩るきまわるを妨げず）

(18) *He* at last was forced *to keep out* of its sight. 彼れは遂に之れを避けざるを得ざるに至れり

(19) What *they* are required *to do.* 其の爲すやうに要めらるゝ事、人より爲せと所望せらるゝ事

(20) *He* had been trained *to hunt.* 狩りするやう馴らされたりき

(21) *We* seemed *to be forced* up a narrow lane. 吾等狹き陋巷へ押込められるとぞ見えし

(22) *The beavers* are formed *to live* in the water. 海狸は水に住むやうに（水に住むものとして）造られてあり

(23) *The ostrich* does not seem *to take* any notice of them. 駝鳥さらに之れを顧みずとぞ見ゆ、苟りそめにも之れを顧みるとは見えず

(24) *He* was heard *to say*.....彼れ……と云ふと聞えたり、彼れの……と云ふのが聞かれたり、彼れ……と云へるを人々聞きたり

(25) *He* was seen *to do*.....彼れ斯々すると見えたり、彼れの斯々するのが見られたり、彼れ斯々するを人々見たり

(26) *Eagles* have even been known *to carry off* young children. 鷲は幼兒を奪ひ去ることもありと云ふ（鷲が爾かすこともあるといふ事古來人の知れる所なり）

(27) *A lion* has been known *to carry* a cow in its mouth for many miles. 數哩の間その口に牛をくわへて行きたる獅子ありと云ふ（或る獅子が爾かしたること世の知れる事實なり）

この最後の四例の如きは本邦に斯かる語法を見ざるが故に我が學生には少しく奇異の感あるを以て殊に注意を要す。「彼れは云ふべく聞かれし」「彼れは爲すべく見られし」「鷲は幼兒を奪ひ去るべく知られた」「或る獅子は數哩の間其口に牛を運ぶべく知られた」といふが如き所謂直譯讀は頗ぶる變に聞えて此の不定法の眞意義を傳へざるのみならず初學者を惑はすの弊あるがゆゑに甚はだ非なり

第七則にいへる補足目的格なる不定詞は大抵此の補足主格なる不定詞に轉化するを得、例へば

He gave *me to understand*. 彼れは余に其の意を知らしめたり（補足目的格）

は轉じて

I was given *to understand* by him. 余は彼れに其意を知らしめられたり（補足的主格）

となすべし。去れど必ずしも悉く爾かなし得と思ふべからず、例へば

I like a *rascal to be punished*. （補足目的格）

とは云ひ得べきも

A rascal is liked *to be punished*. （補足的主格）

とは云ひ難し、何となれば rascal なる名詞 to be なる不定詞と分割して連絡を絶ち或は is liked までにて別に一句一意を成せるやうに見え乃はち rascal 丈けにて is liked の主格全體と見做さるゝの恐れあればなり

此の補足的主格の場合にありても亦た其の中に、gerund とも見做され得べきものあり卽ち上記の例中 He is known to be honest の如きは he is known *as regards being honest*（正直なることに就て能く知られて居る）と取られ、He was heard to say の如きは he was heard *in the act of saying*（言ふて聞かれたり）と取られざるにあらず。此れについても矢張り後に講及すべきゼランドの條を參看すべし

第九。for との關係

古英語にては

A many of rude villains made *him for to bleed*. 多人數の曲者彼の人をして血を流さしめたり

If he will not suffer *my people for to pass*. 彼れ若し我が民の通行するを容るさゞらんには

などの如く、先行名詞若くは代名詞の補足として目的格に用ゐらるゝ通常不定詞に於て to とあるべき場合（第七則參看）に for to を用ゐたりけるが、今日にても此れに由來して之れと似たる語法存し、to を以ての通常不定詞に先

行する名詞又は代名詞の前に for なる前置詞を付くること往々あり。此の用法中にも睹易からざるところのもの有れば留意を要す

(1) It is rare *for a man to starve* in this country. 此國にて人の飢餓するは稀れなり (=a man's being starved, or, that a man should be starved, is rare.)

(2) The time *for us to go* is close at hand. 吾等の行くべき時迫れり (=the time for our departure is close at hand.)

(3) The night is too dark *for us to travel.* 今夜は吾等が旅するには餘りに暗らし

(4) The signal *for them to return* was immediately made. 頓がて、彼等が歸るやうにとの合圖ありたり

(5) I do not see the way clear *for me to accept.* 余は余の執るべき前途の方針を明視せず

(6) There is no reason *for you to refuse.* 君の拒むべき理由なし

(7) It is high time *for us all to get* to bed. 最早我等の皆な寢に就くべき時なり

(8) It is very rare indeed *for men to be wrong* in their feeling concerning public misconduct. 公共的失行に關し人が誤まりたる感情を抱くといふことは極めて稀れなり

(9) There is no one *for them to depend* on in the world. 彼等の頼みとすべきもの天下に一人もなし

(10) It is possible *for a man to be mistaken* even when he is most certain of his subject. 人は確かに能く其事を知ると思ふときにても誤解することあるものなり

(11) A pleasant thing it is *for the eyes to behold* the sun. 眼が太陽を見るは快ふきものなり

(12) He then waited *for another bait to be put on.* モーツ餌サをつけてもらふのを待つて居たり

(13) I wish *for a good little girl to love* me. 善き小女のわれを愛せんことを願ふ

(14) It was large enough *for Fred to crawl* into it. フレッドが這ひこまれるほどの大さなりき

以上の如きは初學者にも格別覩難くはあらざるべけれど、以下の諸例の如きに至りては動もすれば學生の惑ふこと吾人の經驗するところなり

(15) The wind sits fair *for news to go* to Ireland. 新聞が愛蘭へ到るに (愛蘭へ便りが達ずるに) 風に合よろし

(16) They only want the use of the chimneys during the summer, when it is too hot *for fires to be made.* 火がたかるゝには (火をたくには) 餘り暑き夏の間煙突を使はんと欲するのみ [=.....when it is too hot to make fires.]

(17) He was too much accustomed to deeds of violence *for the agitation he had experienced to be* of long continuance. 彼れの心の騒ぎが長く持續するには彼れは餘りに暴行に慣れ過ぎたり (暴行にはよく慣れ居たれば胸騒ぎも長くはあらざりき)

(18) He belonged to a race that was too much detested *for him to hope* anything from charity. 彼れが人の慈善に屬望するには彼れは餘りに多く嫌惡せられたり (嫌惡せられたれば迚ても人の慈善にて助けらるゝ望みなかりき)

(19) *For a man to be proud* of his learning is the great ignorance. 人が其の學問を誇るは無知の極なり (=it is the greatest ignorance for a man to be proud of his learning.)

(20) *For Miss Richland to undertake* setting him

free, I own, was quite unexpected. リッチランド嬢が彼れを解放せんと計るとはまことに案外なりと謂はざるを得ず

(21) *For men to search* their own glory, is not glory. 人が自家の光榮を求むるは光榮にあらず

(22) *For a prince to be reduced* by villany to my distressful circumstances, is calamity enough. 君主たるものが惡逆の爲めに余の如き窮境に陷ゐるはまことに惨の至りなり

(23) *For holy persons to be humble*, is as hard, as *for a prince to submit* himself to be guided by tutors. 僧侶が謙遜なることの難きは猶ほ君主が侍師に聽從するの難きが如し

扨てまた不定詞に先たつべき此の for と名詞若しくは代名詞とが時としては言葉の上に表はされずして意に含蓄せらるるともあり、例へば

(24) *Not to know* me, argues thyself unknown. 余を知らざるは汝自己の知られざるを證す

の如きは、*For thee* not to know me（汝が余を知らざるは）とある意なり。蓋し There is no one to depend on in the world といへば「世には頼みとすべき人なし、人皆な頼むに足らず」(すべての人にとつて）といふ全稱命題にして其の depend の前に for them を入るれば「彼等が此の世に頼みとすべきものは一人もなし」といふ特稱命題なるが如く、單に Not to know me といへば何人と限らずして一般に凡そ「人が余を知らざるは」との全稱命題なれど、此の場合にては或る一個人に對し「汝」に關していふものなれば斯くは for thee なる語あると同じく格段の意となるなり

(25) *I, to bear this*, is some burden. 余が之れを堪ふるは隨分の重荷なり

の如きも、For me to bear this.....といふと同じ意なり

(26) Blockheads with reason wicked wits abhor,
But *fool with fool* is barbarous civil war.

に於ても、fool with fool は for fool to contend with fool, for one fool to contend with an other（愚物が愚物と爭ふは）とある意なりと知るべし

第十。咏嘆情叫（エキスクラメーション）に用ひらるゝもの

To を以ての不定詞は時として、獨立して（他と何等の連繫なくして）情叫（エキスクラメーション）咏嘆に用ひらるゝことあり

(1) *To think* that he should be so foolish! 彼れ斯くまでに愚かならんとは！

是れ To think（と思へば）を主格として其の後には astonishes me（驚くに堪へたり）といふが如き動詞が畧せられたりと見做すべし

(2) O *to forget* her! あゝ彼女を忘るゝとは！

(3) Simpleton! *To dream* that he could succeed without effort! 力めずして事成るを得べしと夢想するとは！馬鹿め！

彼の「ハムレット」なるシエークスピヤの名文句——

(4) *To be* or not *to be*! that is the question. 存らへんか、存らざらんか！あゝこれぞ疑問なる

又た同作中の句——

(5) *To die;—to sleep!*—To *sleep!* perchance, *to dream!* あゝ死ぬ、眠る、—眠る、夢みる！

の如きも此中に數へ入れて可なるべし

又た咏嘆に於ける不定詞の前に、目的格ならで主格の置かるゝこと之れあり

(6) I *to be* so happy! われ爾く幸ひなるとは!

(7) He *to desert* me! 彼れ余を棄つるとは!

凡べて此類の to には強き意味なしと知るべし、これに「可く」といふ例の直譯讀は例の如く無用なるのみならず不當なり

第十一。If.....に當るもの

To を以ての不定詞は「何々せば」といふ if...の句に當ることあり、例へば

(1) *To see* London at its best, you had better go forth in the evening. 龍動の最美景を見んと欲せば夜出づるに若くはなし [=If you would.....]

(2) It will not be very pleasant *to get* into debt. 借金してはあまり快よくない [.....if we get.....]

(3) It would not pay *to sell* it for less than one yen. 一圓以下で賣るが如きことあつては勘定にあはぬ [.....if we were to sell.....]

(4) It will injure the country *to pass* such a law. 斯かる法律を制定すれば國の害となるべし

(5) *To hear* him speak, one would imagine he was a Solomon. あの人の語るのを聞けばソロモン(の如き賢者)のやうに思われる

(6) It will be a great mistake *to wait* a month. 一ヶ月待つては(一ヶ月も待たば)大なる間違なるべし

(7) *To tell* the truth, he is very foolish 隱さず云へば彼れはまことに馬鹿なり [If I am to tell the truth.....]

(8) *To be respected* it is necessary to be honest. 人に尊まれんには(重んぜられんとせば)正直ならざるべからず

此の最後の二例に於けるものゝ如きは亦た gerund と見るべし後に述ぶるところを參看せよ

第十二。has, etc. に隨ふもの

To を以ての不定詞が has, have, had に伴隨するときは必至不得止 (necessity) の意を表はす。

即はち has, have に伴なふものは日本語の「…せねばならぬ」「…せざるを得ず」にして、had に伴なふものは「…するの已むべからざるに至れり」「止むを得ずして…したり」なり

(1) Had I not *had to go*, I should not have *had to meet* him. 行かなくてもよかつたならば彼の人に逢はずともよかつたらうに

(2) He said that were he to devour another sardine, he would *have to submit* to medical treatment. もう一疋鰯を食つたなら醫者の厄介にならずばなるまいと彼れは云へり

(3) He *has to dine* with the noble. 貴族と會食せねばならぬのだ

(4) Should I have *had to go* to Ueno this morning, I should have *had to go* there twice since yesterday. 今朝上野へ行かなければならなかつたならば、昨日からして丁度二度も行かざりしを得ざりし勘定なり

但し間ま必至の意を表はさゞる場合もあり、例へば

(5) This present pleaded more powerfully than anything I *had to say*. 此の贈物が如何なる余が辯論よりも効驗ありき

に於ては別に必至の意味なく、anything I had to say は any argument I had と同じ

第十三。is, etc. に隨ふもの

To を以ての不定詞が am, is, are, was, were 等に伴隨するときは (A)取極、支度の意を表はし、(B)必期確實の意を表はし、(C)義務、命令の意を表はし、(D)必至必要の意を表はし、(E)願欲の意を表はし、(F)得る、能ふの意を表はす、之れを分類して例せんに

〔A〕「…するやうの定め」「することに取極めらる」「することゝ相成れり」といふ arrangement の意を表はすものは如下

(1) The fate of a brave people *was to be decided.* 勇武なる人種の存亡こゝに決せらるゝことゝはなりたり

(2) They *were to hold* their situations for five years. 五年間在職の定めなりき〔=It was arranged that they should hold .....〕

(3) Hastings *was to be* the first Governor-General. ヘスチングスが最初の太守たることに取極まつたり〔It was arranged that Hastings should be.....〕

(4) When we *were to assemble* in the morning..... 朝吾等の集まらんとするに至れる時に

(5) He *was to lie* that night at a neighbor's. 其の夜彼れは隣人の家に宿まる筈(約)なりき

(6) This book *is to read* and not tear. 此書物は讀む筈のものなり裂く筈のものにはあらず

(7) The deed *is to be signed* to-morrow. 此の契約は明日調印せらるゝ筈なり

(8) The one who does it best *is to get* a prize. 一番よく之を爲す者が褒美を獲る取極なり

〔B〕「必らず…すべし」といふ確實 (certainty) の意を表はすものは如下

(9) The doctor says he *is to recover.* 屹度回復致すべしと醫者は申す

(10) I have no doubt that it *is to rain.* 屹度雨降るべし

(11) The carpenter assures that the table *is to be* finished by 17th. 十七日までには卓必らず出來すべしと大工は保證せり

(12) Then it *is to be hoped*.....然れば……ならんこと期して待つべし

(13) A profession where mere industry alone *was to insure* success. 勉强のみにて成功の必すべき職業

〔C〕「…す可きものなり」といふ義務、「せざる可からず」といふ命令の意を表はすものは如下

(14) We *are to pay* our just debts. 人は其の當然の負債を償還せざるべからず

(15) We *are to set* the pleasure of others above our own 人々宜しく他人の樂を先きにして自己の樂を後にす可きなり

(16) No matter how much he dislike to do so, he *is to do* so. 彼れは如何に爾かするを好まざるとも、爾かせざる可からず

(17) It *is to be* remembered. 須らく之れを記憶すべし

(18) It *is never to be* forgotten. 決して之れを忘る可からず

(19) The Lord's name *is to be* praised. 神の名は讃美せざるべからず

(20) I say you *are to* observe the law. 此の法律を遵守せればならぬぞや

(21) He was told that he *was to go.* 彼れは行けと言付けられたり

(22) I say, boy, you *are to go* and get small change for this note. 小僧や此の小爲替を取りに行つておいで

(23) I allotted to each of the family what they *were to do*; my wife *was to attend* me; my boys *were to read* to me. 斯く々々の事をせよと夫々家内の者に割宛て、妻には余に侍して用を辨ぜよと命じ小兒等には余に本を讀み聞かせよと命じたり

〔D〕「是非…せざるを得ず」といふ必至 (necessity) の意を表はすものは如次

(24) We *are to* obey the authorities, whether we will or no. いやでも應でも官命に從はざるを得ず

(25) My students *are to learn* English. 余が書生に英語を學ばしめねばならぬ

(26) He *was to have* learned swimming, but not having done so was drowned upon entering the water. 彼れは水泳を學ばねばならぬ必要ありしに、學ばざりしを以て水に入るや直ちに溺死したり

(27) Man *is to die*. 人はどうでも死なねばならぬものなり

(28) I *am to learn*. 余はこれから學ばざるを得ず

〔E〕want といふほどの願欲の意を表はすものは如次

(29) It *is to be* hoped that..... 願はしき次第なり、吾人切に望む

〔It is to be hoped なる句は夫々場合に應じて或ひは(ロ)の例に於けるが如く必期の意となり或ひは此の如く切望の意となると知るべし〕

(30) It *were to be wished* that..... 甚はだ願はしゝ、何卒斯くあれかし

(31) I *am to break* with thee of some affairs. 君に打明けて語らんと欲する處ろのものあり、打明かすべき事あり

〔此の例の如きは半ばは願欲、半ばは必要の意を含有すと知るべし〕

(32) O, I *am to discourse* wonders. 今やわれ不思議の物語りせんと欲す

〔F〕Can 或は may の意を表はすものは如次

(33) One who *is to be* seen. 見られる人、=one who may be seen.

(34) Fuel *was* rarely *to be* found there. 其處に薪を見出し得ること稀れなりき

(35) Thou *art to expect* any extra supplies. 餘分の錢を貰らふことを得べし、=Thou mayst look for extra money.

扨て此の am, is, are 等と不定詞と相ひ伴ふ場合に於て、受動調 (passive) を用ふべき處をば其の代りに能動調 (active)を用ふること往々あり

(36) You *are to blame*. 〔=to be blamed〕

(37) The thing's *to do*. 〔=to be done〕

(38) When deed of danger *was to do*. 〔=to be done〕

(39) Little *is to to*. 〔=to be done〕

(40) What's more *to do*. 〔=to be done〕

(41) Savage, rude, cruel, *not to trust*. 〔=to be trusted.〕

(42) Such a storm as often between May and April *is to see*. 〔=to be seen〕

シエクスピヤなどの文には此例多し

(43) Where *to begin*? How *to excuse* myself?

(44) I know not where *to begin*, nor how *to excuse* myself.

などの如き疑問句の不定法も此の第十三則の中に屬すべきものにて、to begin, to excuse の前にいづれも am I が略せられたるものと見るべし

第十四。about に隨ふもの

To を以ての不定詞が about なる前置詞に伴隨するときは「將さに…せんとする」の意を表はす

(1) I was *about to write.* 將さに書かんとしたるところなりき

(2) What am I *about to say?* あゝわれ何を言はうとするぞ

第十五。獨立的用法

To を以ての不定法が獨立して情叫咏嘆(エキスクラメーション)に用ゐらるゝことあるは第十則に云へる通りなるが、こゝに其のエキスクラメーションにあらずして獨立絶對に (absolutely) 用ゐられ他の部分と何等文法上の關繫なく是れ丈けにて別に一句一センテンスをなす場合あり、此の場合にては日本語の「…せん」「せんに」に相當す

(1) *To return:* I continued thus employed... 本へ還つて言はんに、余は云々

(2) But *to return* from this digression. それは扨置きイザ本題に歸つて說かん

(3) *To diverge* from the main part of my story. こゝに少しく岐路に入つて物語らん

第十六。動詞の省略

不定法の動詞をば省きて其の to なる記號だけを存することあり、是れ今既に言顯はしたる動詞を重複することを避けんが爲めなり

(1) They might have aided us; they ought *to.* [= ought *to have aided us.*]

(2) We have tried to like it, but it's hard *to* [*like it.*]

(3) He caught the words which he was not intended to [*catch*]

(4) Do you expect to leave? No, I don't expect *to* [*leave*]

こは特に通俗談話上の用法也

第十七。to の省略

To を以ての不定詞にして某々動詞の後にありては、To なる符號の有りそうなる筈の處に其の省ぶかるゝとあり、卽ち

[A] **Bid** なる動詞が「命ずる」といふ意のときは其の現在過去いづれのテンスたるを問はず其後に to あらざるを常とす、例へば

(1) I *bid* you (to) *go* away. あちらへ行け

(2) Thou *bidst* the world (to) *adore.*

(3) If the prophet had *bid* thee (to) *do* some great thing.

(4) It was you who *bade* me (to) *go* out.

但し詩に於ては律呂の都合上より時としては上の場合に to を附することあり、例へば

(5) *Bid* me *to strike* my dearest brother dead,
To bring my aged father's hoary head.

又た此の動詞が promise (約束する、望みあり)或は offer (申出す) といふ意のときは、其後に伴なふ不定詞の前に to なかるべからず、例へば

(6) He *bids* fair *to* excel them all.

(7) No person under heaven *bids* more likely *to* be saved.

(8) And each *bade* high *to* win him.

[B] **Dare** なる動詞が「敢てする」といふ自動詞に用ひら

れたるときは通例其の後に伴なふ不定詞に to なし、其の過去なる Durst（此語は決して他動詞に用ひられず）に在つても然り

(1) I *dare* (to) *do* all that may become a man. 男兒の應さに爲すべきものならば何でもやッてみん

(2) If he *durst* (to) *steal* any thing.

(3) I *dare* not (to) *do* this.

されど此等の場合に於ても間々 to を附する例なきにあらずして

He *dares* not *come*. と

He has not *dared to come*. と

無差別に用ふることも有り

以上の諸例にありては dare, durst が助動詞に似たる故 to あるを不可とすれど、下の如く dare 其れ自身が通常動詞にして助動詞の後に置かるゝ場合には to を挿入する方を可とす

(4) *Let* a private man *dare to* say that it will.

(5) Some *would* even *dare to die*.

(6) He *will* never *dare to come*.

また dare, dared に目的格のある場合には to なかる可からず

(7) He *dares* (=challenges) *me to* fight him. 余に來つて鬪へと挑む

〔C〕 **Feel** なる動詞が他動詞に用ひられ而して肉體の感覺に關するときは其の孰づれのテンスたるを問はず其後に to なくして可なり

(1) I *feel* it (to) *move*.

(2) I *felt* something (to) sting me.

(3) I *feel* the shock (to) *vibrate* through my nerves.

されど次の例の如く心の感情を言ふ場合若しくは自動詞に用ひられたるときには to を要す

(4) I *feel* it *to* be my duty.

(5) I *felt* ashamed *to* ask.

(6) I *feel* afraid *to* go alone.

(7) I *felt* about *to* find the door. （戸を捜らんと撫でまはせり）

身體の苦痛を言ふ場合の如きは

(8) I *feel* it *to* be severe.

といふを得

〔D〕 **Hear** なる動詞の後に伴なふ不定詞にも to の省ぶかるゝこと通例なり

(1) To *hear* a bird (to) *sing*. 鳥の鳴くのを聞く

(2) We *hear* the wind (to) *blow*. 風の吹くのを聞く

(3) You have never *heard* me *say* so.

の如き是れなり

(4) I have *heard tell* of such things.

(5) I have *heard say* of thee, that...

の如きは I have heard *people* (to) tell....., I have heard *men* (to) say……の略と見るべし

〔E〕 **Let** なる動詞（其の受動形にても）の後にも通例 to なし

(1) *Let* us (to) *pray*. [=permit us to pray.]

(2) The solution *let* (to) *go* the mercury.

(3) They were *let* (to) *go* in peace.

(4) The curtain was not *let* (to) *fall.*

此動詞が次の例の如く「妨げ制する」の意にて自動詞に用ひらるゝ時は to を要すれど此は既に古るき用法なり

(5) He would not *let* (=forbear) *to counsel* the king.

(6) If nothing *lets* (=prevents) *to make* us happy both.

〔F〕 **Make** の後にも今や大抵 to なし

(1) They *made* him (to) sit on ground.

(2) He *made* me (to) *turn* out of my way.

(3) You *made* me (to) *blush.*

されど下の例の如き場合にては to を挿入するを正當とす

(4) He *was made to* sit.

〔G〕 **Need** の後にも同上

(1) He *need* not (to) *go.* 行くに及ばぬ

上の例の如きにありては need なる語は助動詞の性質を有するが故に to を要せざるなれど、下の例の如きに於ては助動詞にあらずして通常の本動詞なるが故に to を入るゝを正常とす

(2) We *need* only *to* remark. 一言するの要あり

(3) Moral instruction *needs to* have a more prominent place.

〔H〕 **See** の後にも同上

(1) I *saw* him (to) *fall.* 彼れの落つるのを見たり

(2) *See* me (to) *do* it. 余がそを爲すを見よ

但し此語が自動詞に用ひらるゝ時には to なかる可らず

(3) I will *see to* have it done. 屹度それをさせませう

(斯かる場合にては see は「監督をなす」「注意をなす」などの意)

〔I〕 前項の see と相似たる **Behold, View, Mark, Observe, Perceive, Watch, Spy, Find, Know** などの後にも to の省かるゝことあり

(1) I *observed* him (to) *come.*

(2) I *beheld* Satan (to) *fall* from heaven.

(3) *Viewing* the silver *stream* (to) glide silently.

(4) She did *spy* them (to) *come.*

(5) You will *find* the difficulty (to) *disappear* in a short time.

(6) I do not *find* him (to) *reject* his authority.

(7) *Knowing* thy heart (to) *torment* me with disdain.

〔J〕 **Have** が *to cause, allow, wish* などの意を有するときにも同上

(1) I must *have* you (to) *attend.* お前を伴はせねければならぬ

(2) You will *have* your father (to) *blame* you. おとッさんに叱られるぞ

(3) I *had* him (to) *clean* the house thoroughly before my arrival 余が着く前に彼れに充分家を掃除させて置いた

(4) It is all very well when he does just what we would *have* him (to) *do.* 彼れに爲てもらひたい事を爲て呉れると大變に都合がよい

(5) Objects which we wish to *have* (to) *appear* distinct. 區別を判然せしめたき事柄

(6) He will *have* us (to) *acknowledge.* 彼れは吾等が彼れを認識するを欲するなるべし